埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第105集

深 谷 市 内 遺 跡 XVI

2009.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第105集

深谷市内遺跡XVI

（ふかやしないいせき）

2009.3

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、北部は利根川水系の低地で、南部は秩父山地から流れ出た荒川が扇状台地を形成する平坦な地形となっています。

こうした豊かな自然環境のもと、古代人の暮らした足跡が埋蔵文化財として今なお多く眠っています。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡をはじめとして、再葬墓で著名な上敷免遺跡、県内有数の大規模な鹿島古墳群、榛澤郡家正倉跡と想定される「中宿古代倉庫群跡」や国指定重要文化財「緑釉手付瓶」を検出した西浦北遺跡など、重要な遺跡が多数存在します。

深谷市では、こうした貴重な遺跡群を保護するために鋭意努力してまいりましたが、やむなく破壊を免れ得ない場合には、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成９年度に国庫補助事業として、個人住宅建築に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものです。各地点ともに熊野遺跡内の調査でありましたが、古代から近世に至る様々な遺構・遺物が検出され、地域史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

本書が学術・研究関係はもとより、文化財保護に対する啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成21年３月

深谷市教育委員会
教育長　　猪　野　幸　男

例　　言

1．本書は、平成９年度国庫補助事業として実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2．発掘調査の期間及び調査担当者は、下記の通りである。

熊野遺跡102次	平成９年４月22日 ～ 平成９年５月16日	宮本直樹
熊野遺跡107次	平成９年６月２日 ～ 平成９年６月27日	宮本直樹
熊野遺跡118次	平成９年11月４日 ～ 平成９年11月21日	宮本直樹
熊野遺跡122次	平成９年12月８日 ～ 平成９年12月20日	竹野谷俊夫
熊野遺跡124次	平成９年12月15日 ～ 平成９年12月26日	宮本直樹

3．整理・報告書刊行事業は、平成20年度国庫補助事業として実施した。

4．出土品の整理及び図版作成は、宮本直樹と竹野谷俊夫が行った。

5．本書の執筆は、第Ⅲ章４項を竹野谷俊夫、それ以外を宮本直樹が担当した。

6．本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．発掘調査位置図は岡部町都市計画図（1/2,500及び1/10,000）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（1/25,000）を使用した。

2．遺構実測図は、現場では基本的に1/20、カマド実測図を1/10とし、本書掲載の段階で1/60及び1/30とした。遺物については、基本的に1/3で掲載した。

3．遺物観察表の数値に（　）のあるものは推定値、《　》のあるものは残存値を示す。

目　　次

序

例言・凡例

Ⅰ　発掘調査に至るまでの経緯 …… 1
　1．発掘調査の経緯 …… 1
　2．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 2

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境 …… 6
　1．地理的環境 …… 6
　2．歴史的環境 …… 6

Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 9
　⑴ 熊野遺跡102次調査 …… 9
　⑵ 熊野遺跡107次調査 …… 13
　⑶ 熊野遺跡118次調査 …… 18
　⑷ 熊野遺跡122次調査 …… 25
　⑸ 熊野遺跡124次調査 …… 37

Ⅳ　発掘調査のまとめ …… 52

挿 図 目 次

第１図　熊野遺跡の範囲と調査地点……３
第２図　熊野遺跡102次調査地点位置図 ……３
第３図　熊野遺跡107次調査地点位置図 ……４
第４図　熊野遺跡118 次調査地点位置図……４
第５図　熊野遺跡122 次調査地点位置図……５
第６図　熊野遺跡124 次調査地点位置図……５
第７図　周辺の遺跡分布……８
第８図　熊野遺跡102次調査全測図 ……10
第９図　１号掘立柱建物跡実測図……11
第10図　１号・２号溝実測図……12
第11図　１号・２号土坑実測図……13
第12図　熊野遺跡107次調査全測図 ……14
第13図　１号溝実測図……15
第14図　１号溝出土遺物実測図……16
第15図　２・３号溝実測図……17
第16図　３号溝出土遺物実測図……18
第17図　熊野遺跡118次調査全測図 ……19
第18図　１号井戸跡実測図……20
第19図　１号井戸跡出土遺物実測図……20
第20図　１・２号溝実測図……21
第21図　３号溝実測図……22
第22図　１・３号溝出土遺物実測図……22
第23図　１号土坑実測図……23
第24図　２・３号土坑実測図……23
第25図　４号土坑実測図……23
第26図　１・４号土坑出土遺物実測図……24
第27図　熊野遺跡122次調査全測図 ……26
第28図　１号住居跡実測図……27
第29図　１号住居跡カマド実測図……28
第30図　１号住居跡出土遺物実測図(1)……29
第31図　１号住居跡出土遺物実測図(2)……30
第32図　１号住居跡出土遺物実測図(3)……31
第33図　２号住居跡実測図……32
第34図　２号住居跡出土遺物実測図……32
第35図　３号住居跡実測図……33
第36図　３号住居跡出土遺物実測図……34
第37図　４号住居跡実測図……34
第38図　土坑出土・表採遺物実測図……35
第39図　１～４号土坑実測図……36
第40図　熊野遺跡124次調査全測図 ……38
第41図　１号住居跡実測図
及び遺物分布状況図……39
第42図　１号住居跡カマド実測図……39
第43図　１号住居跡出土遺物実測図(1)……40
第44図　１号住居跡出土遺物実測図(2)……41
第45図　２・３・４号住居跡実測図……43
第46図　２号住居跡カマド実測図……43
第47図　２号住居跡出土遺物実測図……44
第48図　３・４号住居跡出土遺物実測図……45
第49図　５号住居跡実測図 ……46
第50図　５号住居跡出土遺物実測図……46
第51図　６号住居跡実測図……47
第52図　１号溝実測図……47
第53図　１号溝出土遺物実測図(1)……48
第54図　１号溝出土遺物実測図(2)……49
第55図　１号溝出土遺物実測図(3)……50
第56図　１号溝出土遺物実測図(4)……51
第57図　熊野遺跡全体遺構配置図……53
第58図　熊野遺跡（区画整理地内）遺構配置図……55

図 版 目 次

写真図版１　熊野遺跡102次・107次検出遺構
２　熊野遺跡118次・122次(1)検出遺構
３　熊野遺跡122次検出遺構(2)
４　熊野遺跡122次(3)・124次検出遺構
５　熊野遺跡107次・118次・122次(1)
出土遺物
６　熊野遺跡122次(2)、124次(1)出土遺物
７　熊野遺跡124次出土遺物(2)
８　熊野遺跡124次出土遺物(3)

Ⅰ　発掘調査に至るまでの経緯

1　発掘調査の経緯

埼玉県北部に位置する深谷市は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡を筆頭に、弥生土器を出土した上敷免遺跡、鹿島古墳群・黒田古墳群、郡衙正倉跡と想定される中宿遺跡、など、各時代を通して著名な遺跡が多い。さらに畠山重忠をはじめ多くの武蔵武士たちが活躍した地域でもある。

本報告の５件の発掘調査は、平成９年度国庫補助事業として実施したものである。いずれも個人住宅建築に先立ち、熊野遺跡内において発掘調査を実施した。各調査ともに事業主や土地所有者の協力の下、必要最小限の措置を講じたものである。

以下、発掘調査に至るまでの経緯を記す。

熊野遺跡（県登録番号№63-017）は、JR岡部駅のすぐ北西に立地し、県道蛭川普済寺線と国道17号線に挟まれた範囲である。東西約1,300m、南北約1,000mを測る、市内でも大規模な遺跡である。かつては、駅から少し離れると畑地の多く残っていたが、平成元年に『岡中央土地区画整理事業』が立ち上がり、景観が大きく様変わりした。

この区画整理事業に先立つ発掘調査は、平成４年度から実施され、道路建設や個人住宅の移転などに伴う調査件数が急増した。熊野遺跡における発掘調査は、現在までに163次に及ぶ。また、この区画整理事業地内に埼玉県住宅供給公社が岡中央団地を建設するにあたり、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埼埋文」と記す）も４次にわたる調査を実施している。

⑴　第102次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成９年３月13日付けで、埋蔵文化財の所在についての照会文書が、宮本茂氏（以下、事業主と記す）～岡部町教育委員会（当時、以下「町教委」と記す）あてに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを書面で回答した。また、これと併せて、東に接する第20次調査・南に接する第35次調査により遺構の存在が想定されたため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立ち事業主から文化財保護法57条の２に基づく埋蔵文化財発掘届が、文化庁長官宛に提出された。これを受けて、町教委では、文化財保護法98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年４月21日に提出した。

⑵　第107次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成９年４月20日付けで埋蔵文化財の所在についての照会文書が、小林金八氏から町教委宛てに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを書面で回答するとともに、遺跡の詳細な把握をするための試掘調査が必要である旨を伝えた。

その後事業主より試掘調査依頼書が提出されたため、町教委では事業主や重機等の日程調整を行い、試掘調査を実施したところ、遺構の存在が明らかとなった。

このため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立つ平成９年５月２日に事業主から文化財保護法57条の２に基づく埋蔵文化財発掘届が、文化庁長官宛に提出された。これを受けて、町教委では、文化財保護法98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年５月28日に提出した。

⑶　第118次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成９年10月12日付けで埋蔵文化財の所在についての照会文書が、須藤道子氏から町教委宛てに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを書面で回答した。また、これと併せて近接する埼埋文調査Ｂ地点の調査結果により、遺構の存在が想定されたため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立ち事業主から文化財保護法57条の２に基づく埋蔵文化財発掘届が、平成９年10月28日付けで文化庁長官宛に提出さ

れた。これを受けて、町教委では、文化財保護法98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年10月30日に提出した。

⑷　第122次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成９年５月26日付けで埋蔵文化財の所在についての照会文書が、吉田哲哉氏から町教委宛てに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを６月９日に書面で回答するとともに、遺構の詳細な把握をするための試掘調査が必要である旨を伝えた。

その後10月14日に事業主より試掘調査依頼書が提出されたため、町教委では事業主や重機等の日程調整を行い、試掘調査を実施したところ、遺構の存在が明らかとなった。

回答した。また、これと併せて近接する埼埋文調査Ｂ地点の調査結果により、遺構の存在が想定されたため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立ち事業主から文化財保護法57条の２に基づく埋蔵文化財発掘届が、平成９年12月１日付けで文化庁長官宛に提出された。これを受けて、町教委では、文化財保護法98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年12月４日に提出した。

⑸　第124次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成９年12月３日付で、埋蔵文化財の所在についての照会文書が、岡潔氏から町教委宛てに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを12月４日に書面で回答した。また、近接する第98次調査の成果により、遺構の存在が想定されたため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立ち事業主から文化財保護法57条の２に基づく埋蔵文化財発掘届が、文化庁長官宛に提出された。これを受けて、町教委では、文化財保護法98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を12月11日に提出した。

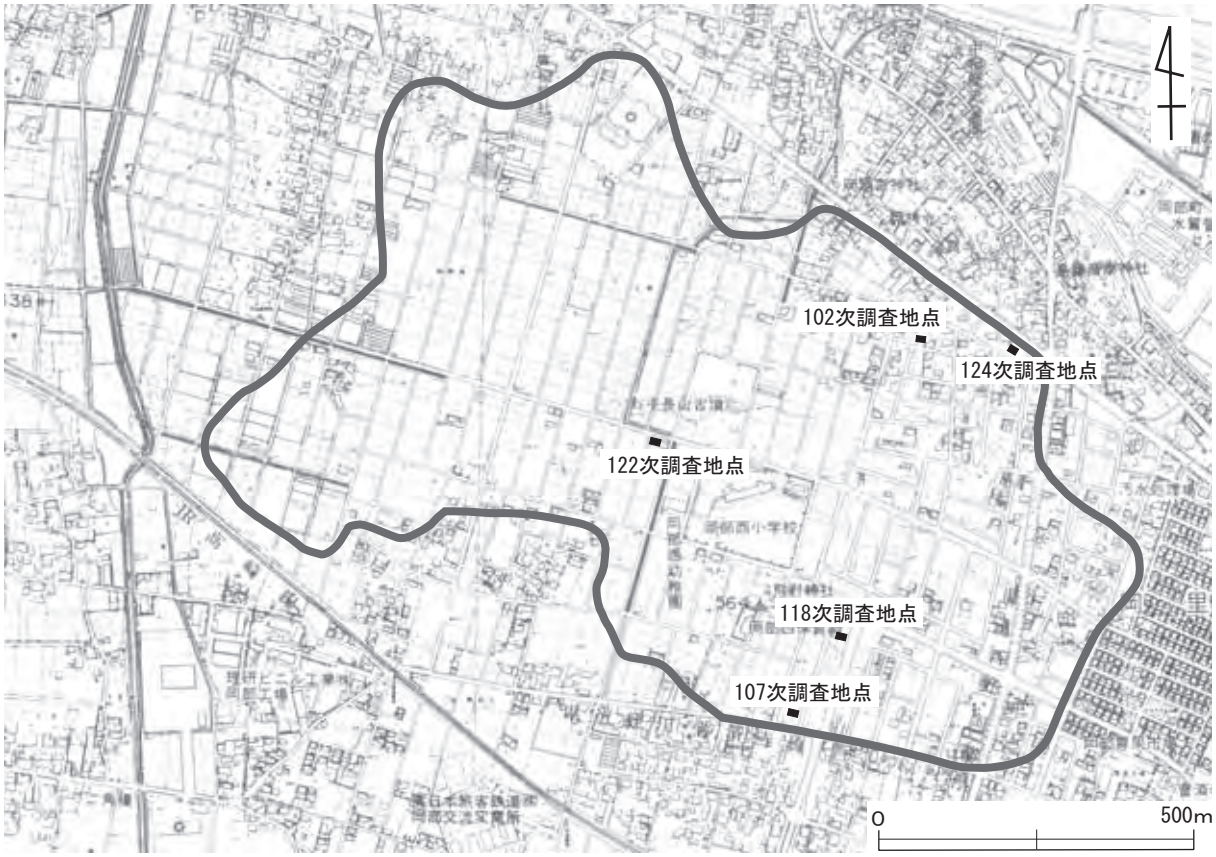
２．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

⑴　発掘調査（平成９年度：岡部町）

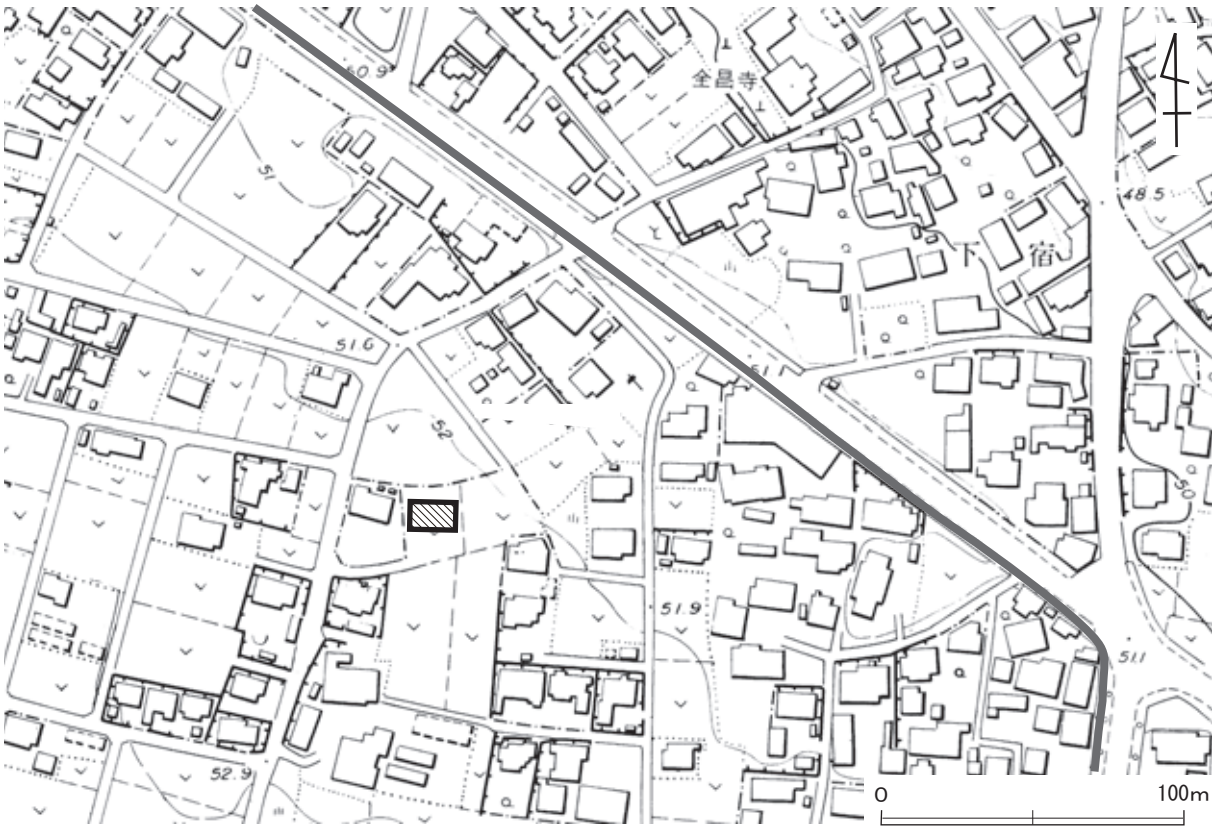
教育長	大野　福治
文化財保護室長	今井　宏
室次長	米沢　信男
係長	大谷　住雄
主任	中野　弘
〃	鳥羽　政之
主事	平田　重之
〃	宮本　直樹
臨時職員	竹野谷俊夫
〃	松田　哲
〃	大谷　規雄
〃	角田ミヤ子
〃	坂野　浜子
〃	小館かおる
〃	佐藤　由江
〃	布施みゆき
〃	山崎えり子
〃	伊藤万里子

⑵　整理・報告書刊行（平成20年度）

教育長	猪野　幸男
部長	石田　文雄
教育次長	中村　信雄
課長	澤出　晃越
課長補佐	吉羽　厚仁
主査	鳥羽　政之
〃	森下昌市郎
〃	宮本　直樹
主任	知久　裕昭
主事	幾島　審
臨時職員	栗原貴世実
〃	竹野谷俊夫
〃	伊藤万里子
〃	黒澤　恵
〃	佐藤　由江
〃	布施みゆき



第１図　熊野遺跡の範囲と調査地点

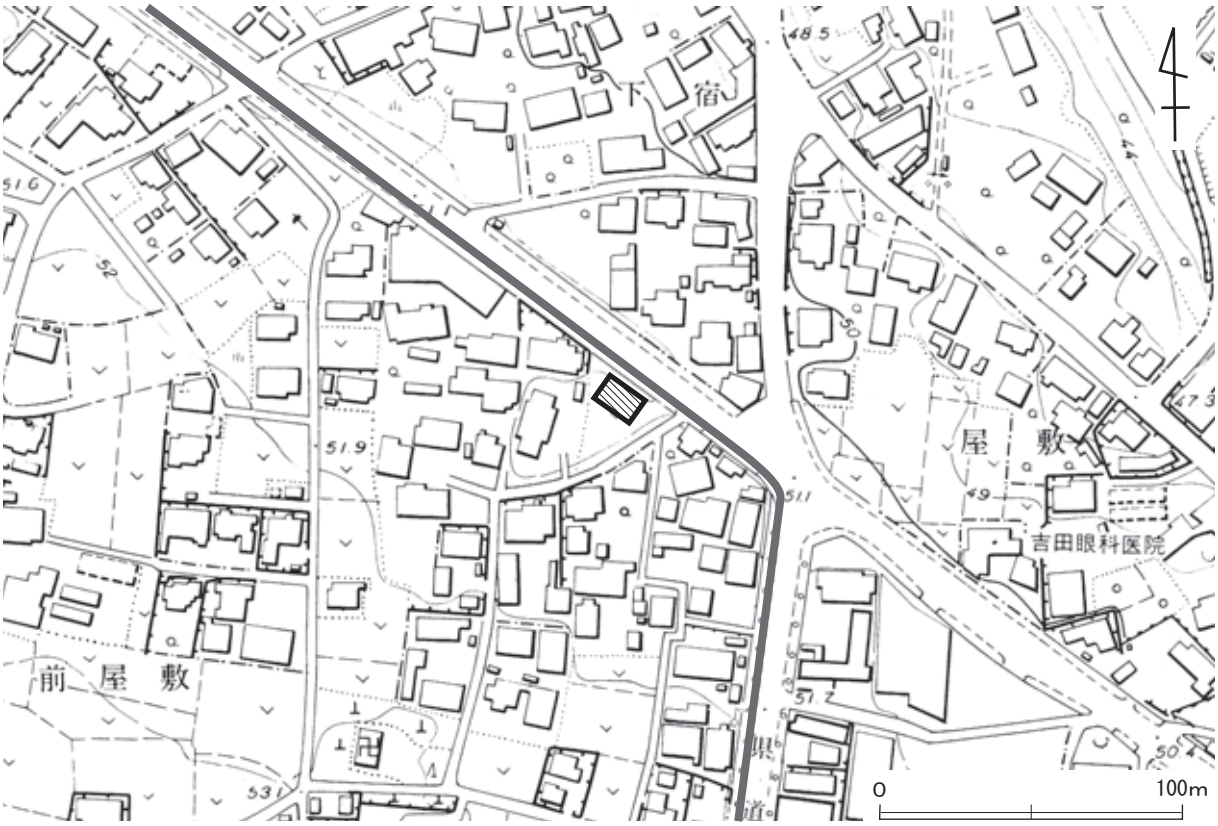


第２図　熊野遺跡102次調査地点位置図

第３図　熊野遺跡107次調査地点位置図

第４図　熊野遺跡118次調査地点位置図

第５図　熊野遺跡122次調査地点位置図



第６図　熊野遺跡124次調査地点位置図

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境

１．地理的環境

埼玉県の北部に位置する深谷市は、北は利根川を挟んで群馬県と接する。南部には荒川が東流し、両河川が最も近接する地域である。

深谷市の南半部は櫛引台地、北半部は妻沼低地であり、地形的に二分できる。櫛引台地は、荒川によって形成された荒川扇状地が浸食されてできた洪積台地である。寄居付近を頂点として、西側の櫛引面と東側の一段低い寄居面、両者に挟まれるように御稜威ケ原面からなる。この間を唐沢川や藤治川が北流する。また、台地上には、観音山（標高77m）、仙元山（標高98m）、山崎山（標高117m）などの独立丘陵が存在する。台地の北端は崖線を形成し、比高差５～10mで妻沼低地と接する。

妻沼低地は、利根川の作用で形成された沖積低地である。さらに、利根川をはじめ小山川・福川などによって、自然堤防や後背湿地が形成されたと推定されている。

熊野遺跡は、櫛引台地北部の深谷市岡字熊野他に所在する。JR高崎線岡部駅の北西に位置し、東西1300m、南北1,000mの範囲に及ぶ大規模な遺跡である。かつては、駅から少し離れると住宅も少なく、畑地が広がっていたが、近年は区画整理事業等により、市街化が急激に進んでいる。

２．歴史的環境

熊野遺跡の立地する櫛引台地北部は、早くから開発が進み、これらに伴う発掘調査が多く実施されてきた。調査の結果、縄文時代～中世に至る様々な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では、西谷遺跡から爪形文系・多縄文系土器などが検出され、草創期の土器として研究上重要なものである。早期では、撚糸文系土器が西谷遺跡、沈線文系土器が中原・西谷遺跡、条痕文形土器が西龍ケ谷・西谷・茶臼山遺跡から発見されている。前期では宮西遺跡で関山式期、四十坂遺跡で黒浜式期、沖田・東光寺裏遺跡で諸磯Ｂ式期の集落跡が検出されている。中期では、水窪遺跡で勝坂式期～加曽利Ｅ１式期、菅原遺跡で加曽利Ｅ３式期の環状集落が発掘調査されている。後期では、上宿遺跡で敷石住居跡が検出されている。晩期では、原ケ谷遺跡の発掘調査で、安行Ⅲａ式期の良好な資料が出土している。

弥生時代では、四十坂遺跡より縄文晩期～弥生初期の土器群が出土し、弥生初期のまとまった資料として早くから注目されてきた。平成2年の発掘調査では、再葬墓や土坑墓群が検出され、弥生時代の開始を窺わせる資料として重要である。

古墳時代にいたると、遺跡数は急増し、重要な遺構も多数確認されている。

四十坂遺跡からは、五領～和泉期にいたる方形周溝墓群が検出され、この段階から後期群集墳まで連綿と墳墓が営まれていたことが知られる。中でも四十塚古墳は、横矧板鋲留短甲・五鈴鏡板付轡などを出土し、これらの遺物から５世紀後半の当地域の首長墓と捉えられている。

その後、６世紀代には、やはり首長墓と想定される寅稲荷塚古墳（前方後円墳）が四十塚古墳群内に出現する。これ以降、首長墓は、お手長山古墳（帆立貝式古墳）・内出八幡塚古墳（円墳）・愛宕山古墳（方墳）と順次南東方向へ移動しながら単独で築造されたことが認められる。

原ケ谷戸遺跡は、方形周溝墓６基、円形周溝墓１基、円墳21基、帆立貝式古墳１基が検出されている。四十坂遺跡と藤治川の両岸に立地し、両古墳群の変遷過程のあり方が共通することが注目される。

熊野遺跡の東に接する白山古墳群では、６世紀代の古墳跡24基（円墳23、帆立貝式古墳１）が調査された。弾琴埴輪や壺を捧げ持つ巫女の埴輪など６体の人物埴輪が、ほぼ完全な形で出土した。

この他に、菅原古墳群・前原古墳群・上原古墳群などが台地上に展開する古墳群であり、西山古墳群・千光寺古墳群・諏訪山古墳群などが丘陵上に立地する古墳群である。

なお、櫛引台地北部における古墳時代の集落は、現

在のところ中宿遺跡や上宿遺跡など数軒が確認されているに過ぎない。この時代の集落は、妻沼低地に立地する砂田前遺跡・岡部条里遺跡や本庄台地上の六反田遺跡・大寄遺跡・宮西遺跡などがあり、櫛引台地以外に分布の中心が認められる。

また、該期の遺跡として、狢山祭祀遺跡が挙げられる。畑の開墾中に偶然土製模造品が出土し、３回の開墾で形が判明したものだけでも100点を超える模造品を中心に数点の土師器が含まれる。遺跡が古代榛沢郡と児玉郡・那珂郡の郡界に存在する山崎山丘陵の斜面に位置することから、坂の神を祭った遺跡であったことが推定されている。

奈良～平安時代になると、様相は一変する。それまで墓域として利用されてきた熊野遺跡内に、突如集落が営まれる。これまでに163次に及ぶ調査が実施され、720軒を超える竪穴住居跡、160棟の掘立柱建物跡をはじめ、道路状遺構・大溝・石組井戸・連房式鍛冶工房など特殊な遺構が多数検出された。また、和銅開寶・円面硯・帯金具・唐三彩の陶枕・刻字紡錘車・陶製仏殿・置きカマドなど他の集落では見られない貴重な遺物も多数出土している。

なお、集落の開始時期は、131次調査の１・２号竪穴住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、７世紀第３四半期と考えられている。さらに、１次調査において検出された７間×３間をはじめとする大型建物の存在から、該期の熊野遺跡は初期評家と想定されている。

また、櫛引台地縁辺部に位置する中宿遺跡からは、５次にわたる調査の結果、大規模な総柱式建物跡20棟が規則的に配置された状態で検出された。榛沢郡衙に伴う正倉跡と推定され、７世紀後半の成立であることから熊野遺跡との関連が想定される。また、中宿遺跡が立地する台地直下から、「滝下大溝」が検出された。その北方で条里遺構が確認されたことから、灌漑と運河の機能を併せ持っていた大溝であったことが想定される。

さらに、熊野遺跡の北東に位置する岡遺跡は、８世紀第２四半期と考えられる蓮華文軒丸瓦などが古くから多量に表採され、廃寺跡と推測されてきた。平成13年度に町教委が実施した確認調査により、版築された基壇状遺構が検出された。近接する住居跡からは、「榛」の刻字瓦や「寺」と墨書された土師器坏なども出土し、寺院跡である可能性がほぼ確実となった。

なお、この岡廃寺の北側、中宿遺跡の東側にもあたる台地末端上に、島護産泰神社が鎮座する。北側は崖線であり、現在でも湧水が認められる。創建時期は不明であるが、これらの状況から、古代に遡る可能性を指摘しておきたい。

このように、奈良～平安時代の櫛引台地北部は、中宿遺跡・熊野遺跡を中心として、その周辺に集落や寺院が展開していた状況が窺われる。

古代から中世にかけては、猪股党の岡部六弥太忠済や丹党の榛沢六郎成清の活躍が『平家物語』などから知られる。

14世紀中ごろ、北関東の新田氏の勢力を抑え、さらに関東から越後に至る通路確保のために関東管領上杉憲顕の命により六男憲英が庁鼻和城を築いたのが、深谷上杉氏の始まりであるといわれる。深谷城は、古河公方の勢力に備えるために、深谷上杉氏が康正２年（1456）に築城した説が有力であるという。当年９月17日には利根川沿いの岡部原（現在の深谷市岡部周辺）で古河軍と上杉軍が衝突している。この他に、岡部六弥太館跡からは、方形に廻る堀跡や井戸、土壙墓などが検出された。同様な堀跡は、熊野遺跡と白山遺跡からも検出され、館跡に付属するものと推定されている。西龍ヶ谷遺跡では、軸を揃えて並んだ６棟の掘立柱建物群が確認された。

1．熊野遺跡　（律令期集落・官衙・中世居館）
2．中宿遺跡　（郡衙正倉・律令期集落）
3．滝下遺跡　（河川跡・律令期集落）
4．岡廃寺　（寺院跡・古墳～律令期集落）
5．岡部条里遺跡　（古墳集落・条里水田・律令期居宅）
6．砂田前・樋詰遺跡（古墳～平安集落）
7．白山遺跡　（古墳群・律令期集落・中世居館）
8．新田遺跡　（律令期集落）
9．上宿遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
10．四十坂遺跡　（縄文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群）
11．原ケ谷戸遺跡　（縄文・古墳集落・古墳群）
12．水窪遺跡　（縄文・古墳集落・周溝墓・古墳群）
13．新井遺跡　（律令期集落）
14．東五十子遺跡　（古墳・中世集落）
15．六反田遺跡　（古墳・中世集落）
16．大寄遺跡　（縄文・弥生～律令期集落）
17．西浦北遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
18．東光寺裏遺跡　（縄文・平安集落）
19．榛沢六郎成清館跡（中世）
20．石蒔遺跡　（古墳～平安集落・周溝墓）
21．地神祗遺跡　（古墳～平安集落）
22．千光寺遺跡　（古墳群・平安集落）
23．西谷遺跡　（縄文）
24．茶臼山遺跡　（古墳群）
25．伝上杉館跡　（中世）
26．山河聖天社　（中世）
27．西龍ヶ谷遺跡　（律令期集落・中世居館）
28．伝岡部六弥太館跡（中世）
A．四十坂浅間山古墳（円墳）
B．寅稲荷塚古墳　（前方後円墳）
C．お手長山古墳　（帆立貝式古墳）
D．前原愛宕山古墳　（方墳）
E．内出八幡塚古墳　（円墳）
F．四十塚古墳群　（古墳群）

第７図　周辺の遺跡分布

Ⅲ　発見された遺構と遺物

(1)　熊野遺跡第102次調査

①　発掘調査の経過

熊野遺跡第102次調査地点は、深谷市岡字前屋敷3047番地５（岡中央土地区画整理事業地内９街区11画地）である。

周囲は、区画整理事業及び個人住宅建築等により発掘調査が実施されてきた。近接して20次･35次･127次･131次調査区などが位置する。調査区中央での標高は、52.1mを測る。

発掘調査は、平成９年４月22日から同年５月16日にかけて実施した。発掘調査面積は、約397㎡である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から行った。遺構確認面は、表土から30cmほど掘り下げたソフトローム面とした。

表土除去後、遺構確認作業を行い、掘立柱建物跡１軒、大溝１条、溝１条、土坑２基などを確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、大溝にトレンチを３本設定し、ここから掘り下げを開始した。その後、順次他の遺構も掘下げていった。

土層断面図の作成は、遺構掘り下げと並行して実施し、その後に平面図を作成した。土層断面図・平面図ともに１/20の縮尺で実測した。

全ての掘り下げ・図化作業が終了した後、全景写真を撮影した。これにより､発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

②　遺構と遺物

調査により検出された遺構は、奈良時代の掘立柱建物跡１軒、平安時代の大溝１条、中～近世の土坑２基･溝１条である。

【１号掘立柱建物跡】

調査区の北西に位置する。１号大溝と重複し、切り合い関係から、１号溝の方が新しいことが確認されている。

今回検出されたのは東コーナーの一部であるが、西隣の第127次調査で本遺構の延長部が確認されており、３間×３間の側柱建物であることが判明している。(第58図参照）このうち確認できたのは、１間×１間の範囲で、柱間は東西2.1m、南北2.8mを測る。主軸方位は、N-29°-Wである。

各柱穴の平面形態は隅丸長方形を主体とする。１号柱穴は、長軸115cm、短軸98cm、確認面からの深さ89cmを測る。２号柱穴は、長軸153cm、短軸120cm、確認面からの深さ90cmを測る。４号柱穴は調査区隅に位置するため規模は不明であるが、確認面からの深さは61cmである。いずれも底面から柱の「当り痕」が確認できた。

遺物は、土師器と須恵器の小破片が出土したが、図示し得るものはなかった。

【１号大溝】

調査区の北端に位置する。

北半部が調査区域外にあるため、確認できたのは東西4.65m、南北4.86mの範囲である。ただし、東方にて実施した81次・90次調査等により200m以上にわたり直線的に延びることが判明している。

今回は個人住宅建設に先立つ調査であることから、トレンチ３本を設定して堀下げを実施した。検出できたのは溝の落ち際から深さ105cmまでの範囲であった。壁が緩やかに落ちていること、埋土上層に浅間Ｂ軽石が堆積していたことが確認できた。

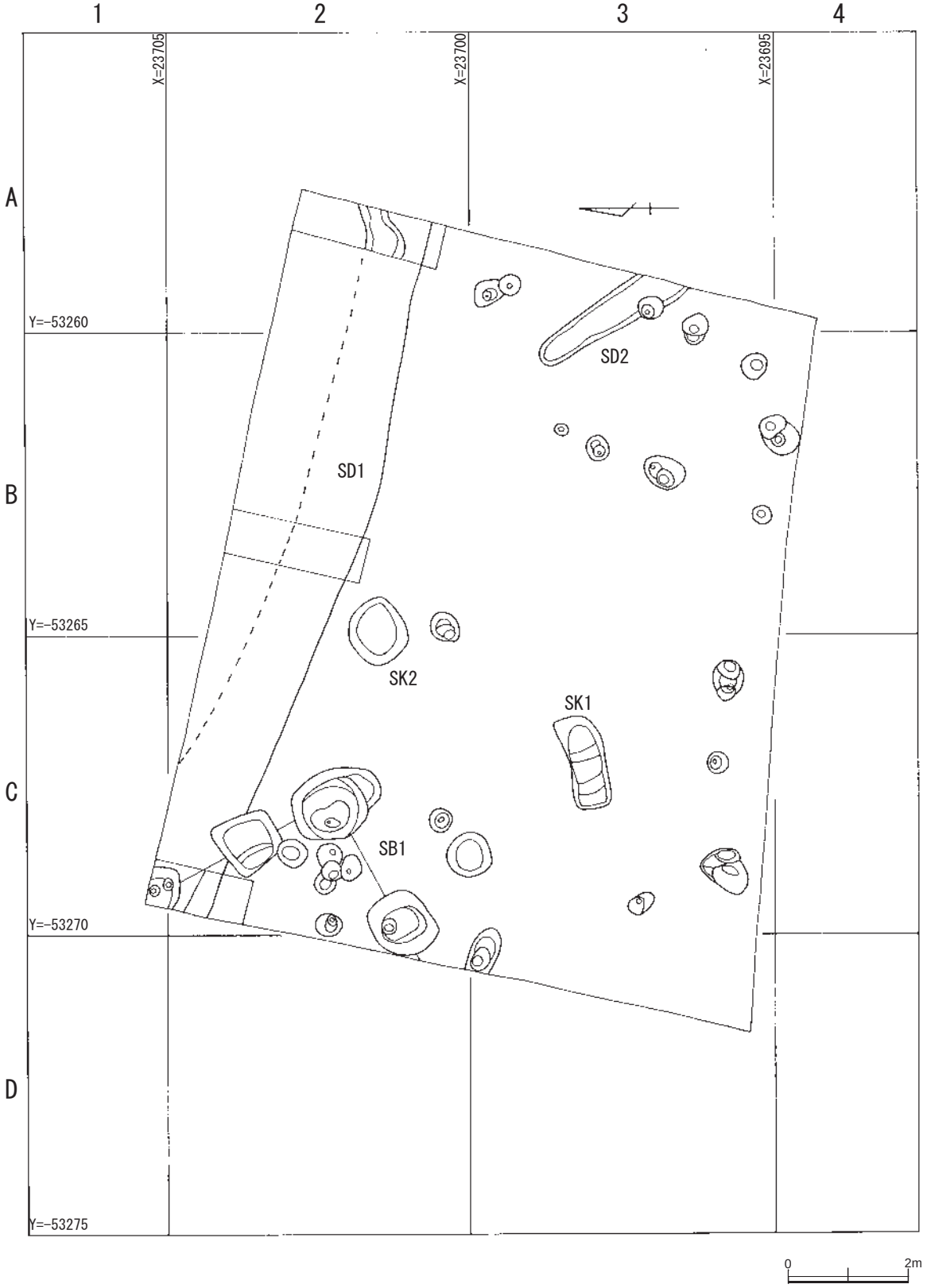
遺物は、図示し得るものは出土しなかった。

【２号溝】

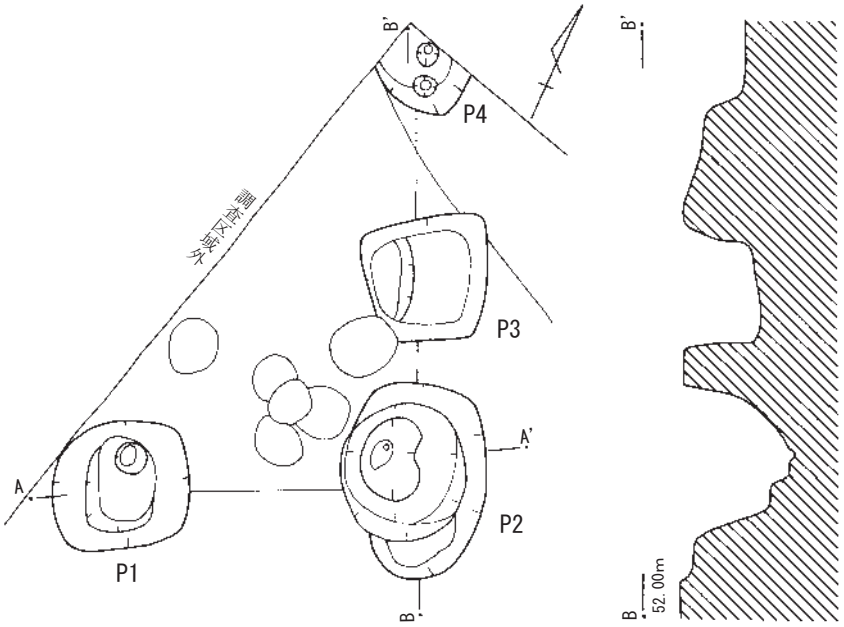
調査区の東端に位置する。東部が調査区域外にあるため、全容は不明である。

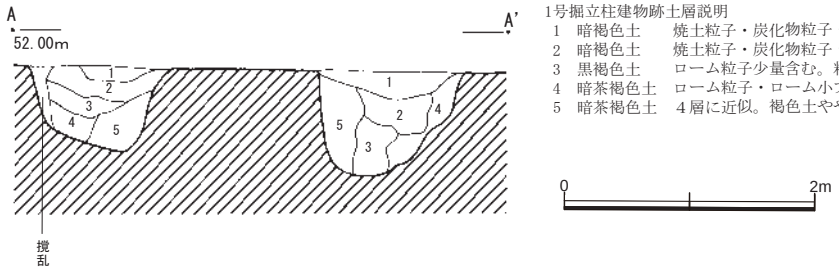
確認できたのは、長さ2.5mの範囲である。幅は最大で63cmを測り、深さは14cmである。底面は平坦であり、断面形態は皿状を示す。主軸方位は、N-33°-Wを示す。

遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土したが、図示し得るものはなかった。



第８図　熊野遺跡102次調査全測図





1号掘立柱建物跡土層説明

1	暗褐色土	焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量含む。粘性なし。しまり良。
2	暗褐色土	焼土粒子・炭化物粒子・ローム小ブロック少量含む。しまり良。
3	黒褐色土	ローム粒子少量含む。粘性やや有。しまり良。
4	暗茶褐色土	ローム粒子・ローム小ブロック多量含む。粘性やや有。しまり弱。
5	暗茶褐色土	４層に近似。褐色土やや多い。しまり弱。

第９図　１号掘立柱建物跡実測図

【１号土坑】

調査区の西部に位置する。

平面形態は長方形を呈し、長軸162cm、短軸63cmを測る。主軸方位は、N-70°-Eを示す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれる。底面は、西部から東へ向かい２か所の段差をもつ。平坦である。最深部で、確認面から68cmを測る。

遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土したが、図示し得るものはなかった。

【２号土坑】

調査区の北部に位置する。

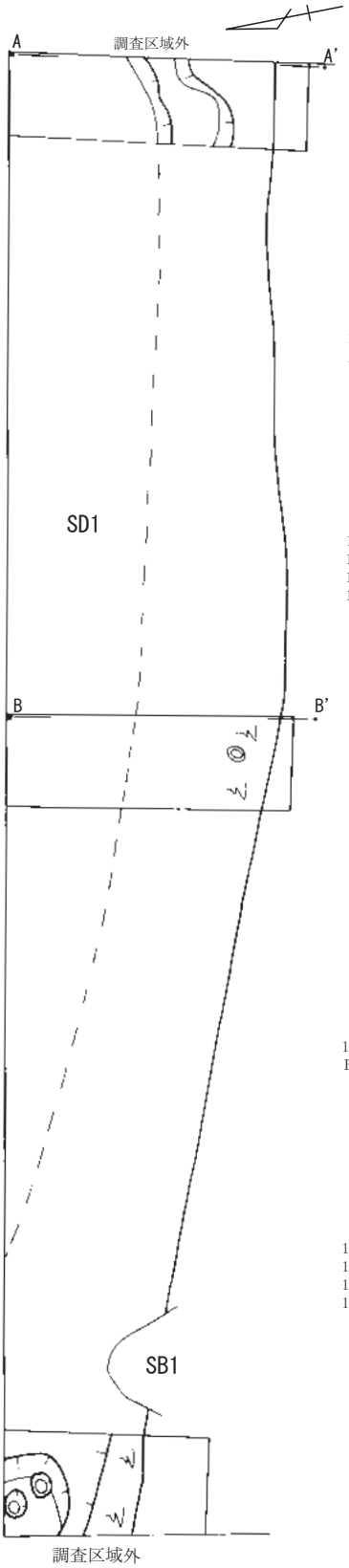
平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸103cm、短軸94cmを測る。主軸方位は、N-52º-Eを示す。

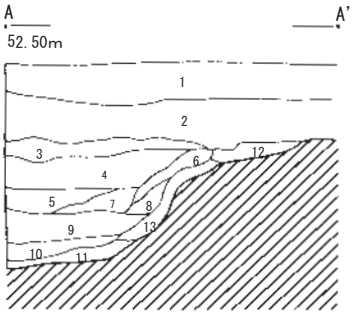
壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、34cmを測る。

遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土したが、図示し得るものはなかった。

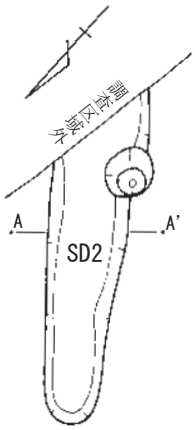
③　まとめ

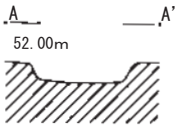
１号掘立柱建物跡は、近接する調査結果と合わせ、３間×３間の掘立柱建物跡であることが判明した。また、１号大溝は131次調査で検出した延長部であり、10世紀代には廃絶されたものと考えられる。

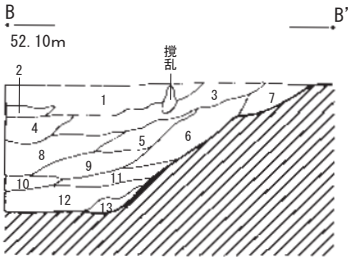




1号溝土層説明
A-A'
1　暗褐色土　　（耕作土）
2　暗褐色土　　パミス・ローム粒子少量含む。しまり良。
3　暗褐色土　　パミス（浅間B）多量、ローム粒子少量含む。しまり強。
4　暗褐色土　　パミス少量、焼土粒子微量含む。粘性やや有。しまり強。
5　暗茶褐色土　パミス・焼土粒子微量、ローム粒子少量含む。粘性有。しまり強。
6　暗茶褐色土　パミス、ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。粘性なし。しまり良。
7　暗茶褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。粘性やや有。しまり強。
8　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック少量。粘性なし。しまり良。
9　暗褐色土　　ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。粘性有。しまり強。
10　暗茶褐色土　ローム粒子少量。粘性、しまり強。
11　暗茶褐色土　ローム粒子多量、ローム小ブロック少量含む。粘性、しまり強。
12　茶褐色土　　ソフトローム土多量含む。褐色土との混合土。粘性なし。しまり弱。
13　暗茶褐色土　ローム粒子多量含む。粘性なし。しまり弱。

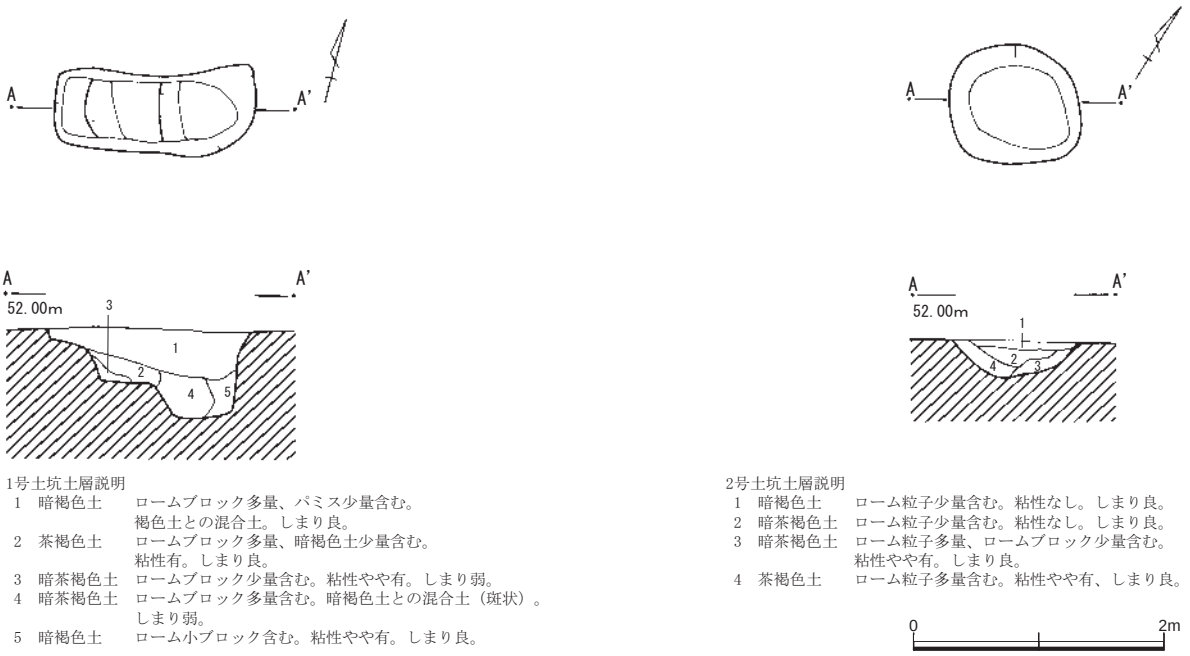






1号溝土層説明
B-B'
1　暗褐色土　　ローム粒子少量、パミス多量含む。しまり強。
2　暗褐色土　　ローム粒子少量、パミス多量含む。（浅間B）
3　暗茶褐色土　ローム粒子・パミス少量、焼土粒子微量含む。しまり強。
4　暗褐色土　　ローム粒子・パミス少量、焼土粒子微量含む。しまり強。
5　暗茶褐色土　ローム粒子・パミス少量含む。粘性なし。しまり強。
6　暗茶褐色土　ローム粒子多量、パミス少量含む。しまり強。
7　茶褐色土　　ローム粒子多量、ローム小ブロック少量含む。しまり良。
8　暗褐色土　　ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。粘性やや有。しまり強。
9　暗褐色土　　ローム粒子少量含む。粘性有。しまり強。
10　黒褐色土　　ローム粒子微量含む。粘性有。しまり良。
11　暗茶褐色土　ローム粒子多量、焼土粒子微量含む。粘性有。しまり良。
12　暗茶褐色土　ローム粒子少量含む。粘性、しまり強。
13　暗茶褐色土　ローム粒子少量、ローム小ブロック微量含む。粘性有。しまり弱。

第10図　１号・２号溝実測図



1号土坑土層説明

1	暗褐色土	ロームブロック多量、パミス少量含む。褐色土との混合土。しまり良。
2	茶褐色土	ロームブロック多量、暗褐色土少量含む。粘性有。しまり良。
3	暗茶褐色土	ロームブロック少量含む。粘性やや有。しまり弱。
4	暗茶褐色土	ロームブロック多量含む。暗褐色土との混合土（斑状）。しまり弱。
5	暗褐色土	ローム小ブロック含む。粘性やや有。しまり良。

2号土坑土層説明

1	暗褐色土	ローム粒子少量含む。粘性なし。しまり良。
2	暗茶褐色土	ローム粒子少量含む。粘性なし。しまり良。
3	暗茶褐色土	ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。粘性やや有。しまり良。
4	茶褐色土	ローム粒子多量含む。粘性やや有、しまり良。

第11図　１号・２号土坑実測図

(2)　熊野遺跡第107次調査

①　発掘調査の経過

熊野遺跡第107次調査地点は、深谷市岡字熊野2939番地２（岡中央区画整理事業地内32街区４画地）である。標高は、調査区中央で約55.8mを測る。

発掘調査は、平成９年６月２日～同年６月27日にかけて実施された。発掘調査面積は、約500㎡である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から始めた。遺構確認面は、表土から約60cm掘り下げたソフトローム面とした。表土除去後、遺構確認作業を行った。

遺構確認状況の写真撮影の後、遺構の掘り下げを開始した。掘り下げは、調査区西端から１号溝と２号溝を同時に始め、順次東へ掘り進めていった。

②　遺構と遺物

【１号溝】

調査区の中央を東西に走行する。両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。確認できたのは、東西15.6mの範囲である。主軸方位は、N-64°-Wを示す。

今回は個人住宅建設に先立つ調査であるため、溝の両端と中央の計３本のトレンチを設定し、調査を実施した。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、52cmを測る。幅は、195～372cmである。

須恵器の坏・高台埦・甕、土師器台付甕、土錘などがあった。

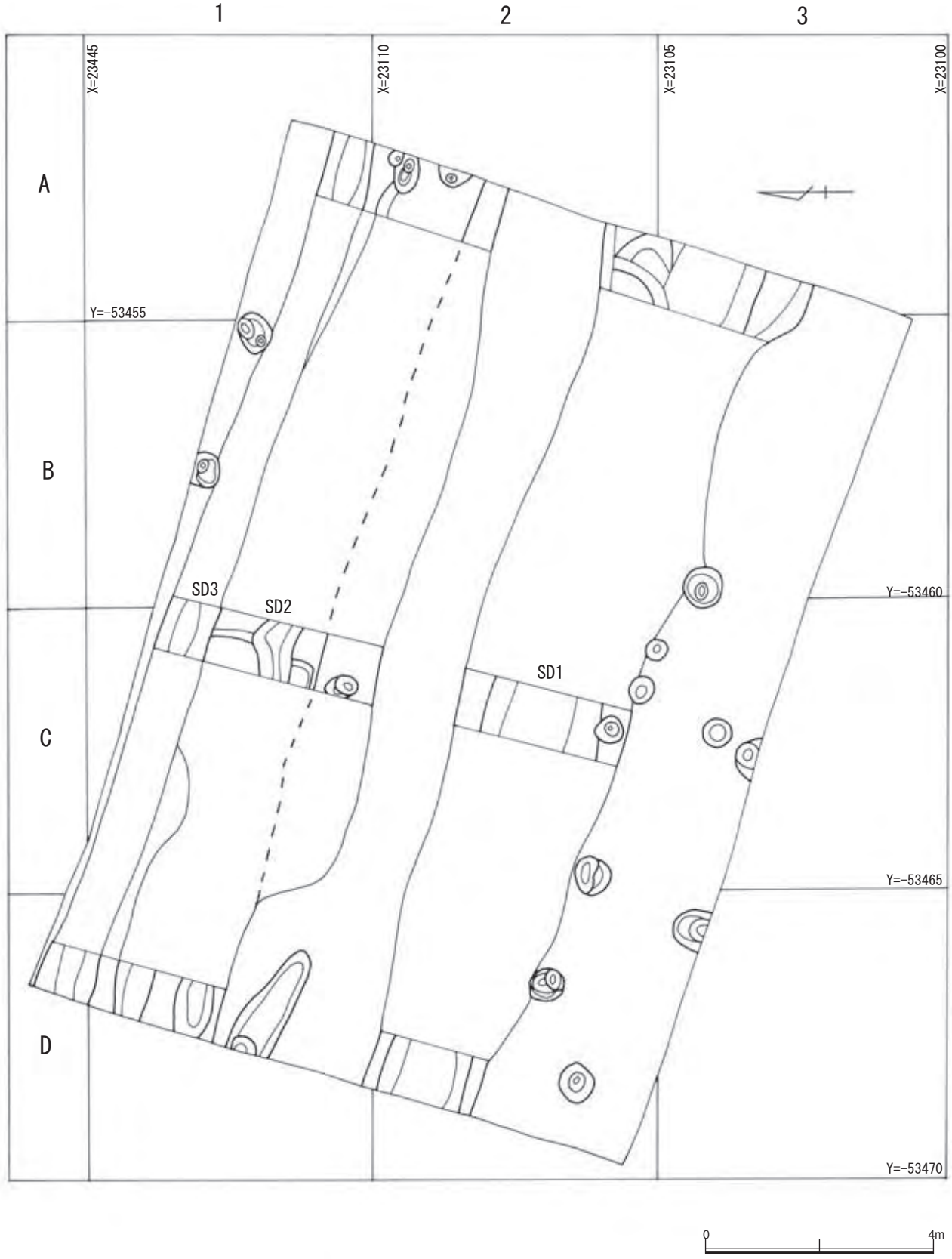
【２号溝】

調査区のやや北寄りを東西に走行する。両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。確認できたのは、東西15.8mの範囲である。主軸方位は、N-65°-Eを示す。

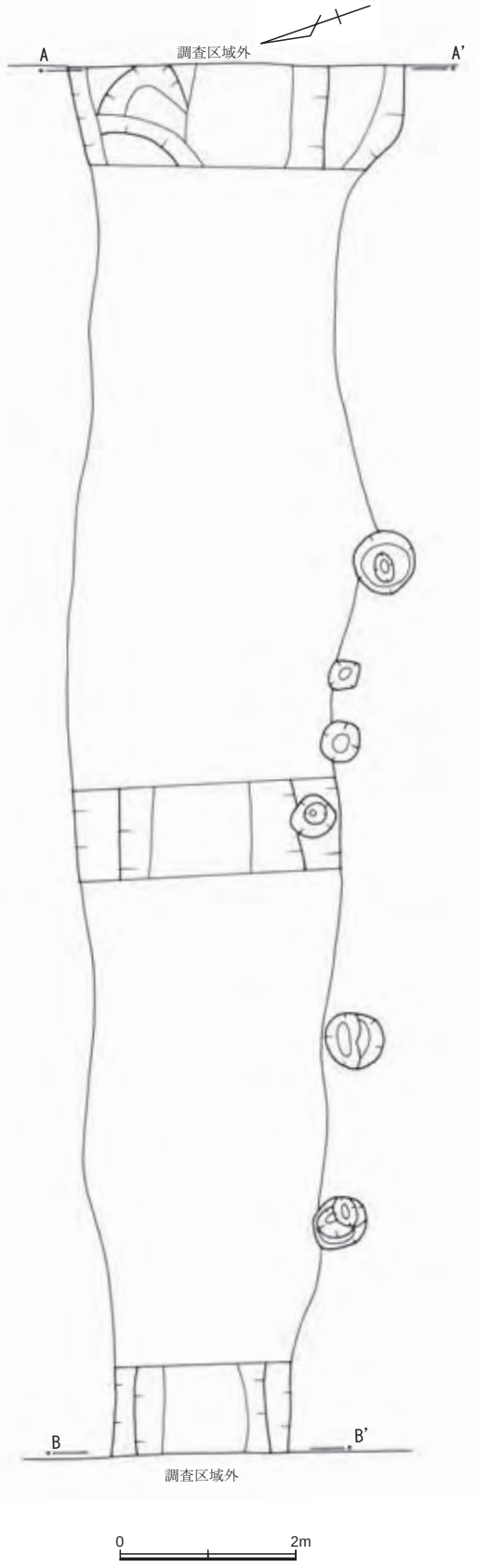
１号溝同様に３本のトレンチを設定し、調査を実施した。

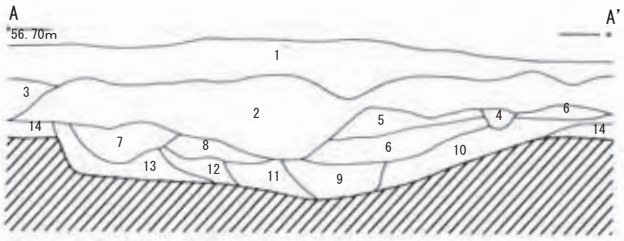
壁は角度をもって掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、43cmを測る。幅は、183～326cmである。

遺物は、出土しなかった。



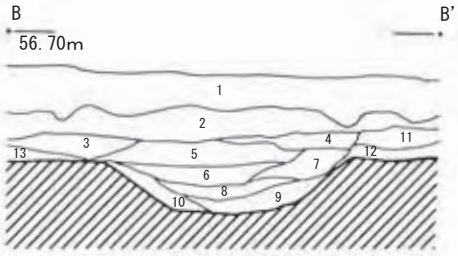
第12図　熊野遺跡107次調査全測図





1号溝Ａ－Ａ´土層説明

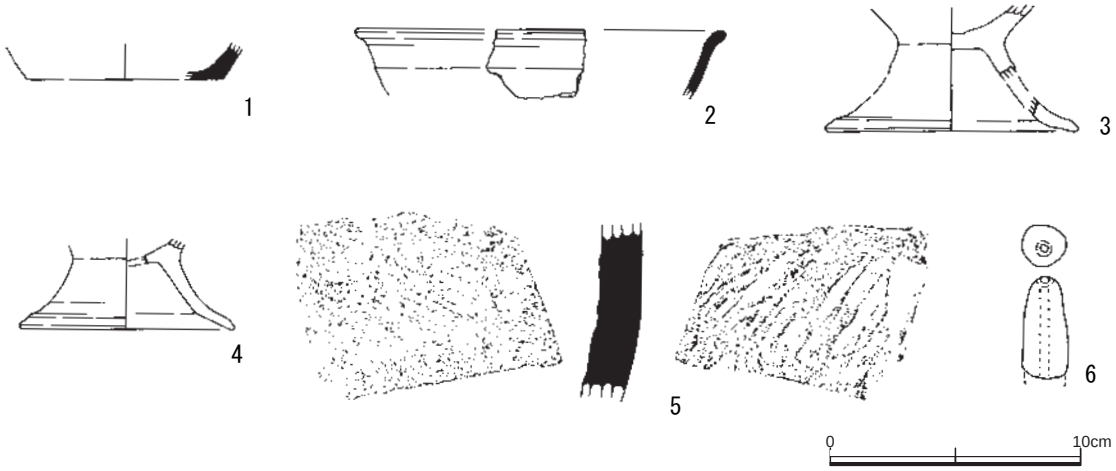
1	褐色土	Ａ軽石多量含む。しまり弱い。近現代の耕作土。
2		
3	黒褐色土	
4		
5	暗茶褐色土	Ａ軽石微量含む。
6	暗茶褐色土	Ａ軽石微量含む。ローム粒微量含む。
7	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック少量、Ａ軽石微量含む。
8	暗茶褐色土	Ａ軽石・ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
9	黒褐色土	ローム粒少量含む。
10	茶褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。
11	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
12	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック少量含む。
13	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。



1号溝Ｂ－Ｂ´土層説明

1	褐色土	Ａ軽石多量含む。しまり弱い。
2	茶褐色土	Ａ軽石少量含む。
3	暗茶褐色土	Ａ軽石・ローム粒微量含む。黒褐色土ブロック少量含む。
4	暗茶褐色土	ローム粒微量含む。
5	暗茶褐色土	ローム粒少量含む。4層に比べて色調やや暗い。
6	暗茶褐色土	４層に類似する。
7	暗茶褐色土	ローム粒少量、黒褐色土のブロック微量含む。
8	黒褐色土	ローム粒微量含む。
9	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック少量含む。
10	暗黄褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
11	暗茶褐色土	
12	黒褐色土	
13	暗黄褐色土	ローム主体。

第13図　１号溝実測図



第14図　１号溝出土遺物実測図

１号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	須恵坏？	-	《1.5》	(7.6)	暗灰色	やや悪	長石、褐色粒	図示10%	底部手持ち篦、産地不明
2	須恵高台埦	(14.0)	《2.7》	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩、褐色粒	図示７％	末野
3	台付甕	-	-	(9.7)	明橙褐色	普通	微砂粒	破片	
4	台付甕	-	《3.5》	(8.2)	赤褐色	普通	微砂粒	図示10%	
5	須恵甕	-	-	-	暗灰色	良好.堅緻	石英、長石	破片	外面平行叩き、内面青海波＋篦ナデ、末野
6	土錘	長さ4.0	幅1.2	孔径0.3	重さ11.5g	-	-	70%	

【３号溝】

調査区の中央を東西に走行する。両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。確認できたのは、東西15.8mの範囲である。主軸方位は、N-66°-Wを示す。

１号溝・２号溝と同様に３本のトレンチを設定し、調査を実施した。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、24cmを測る。幅は、75～102cmである。

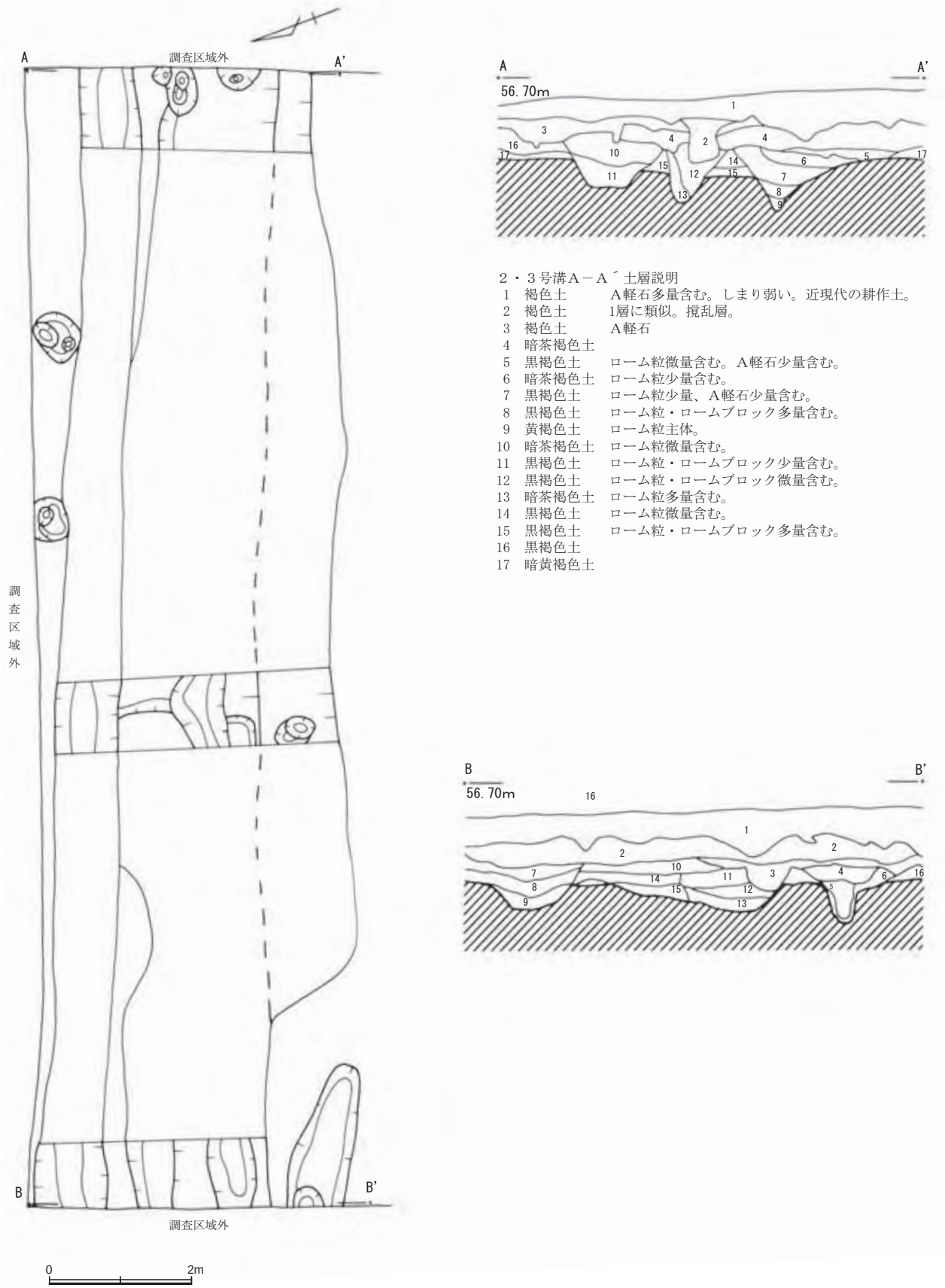
出土遺物には、須恵器甕、土師器坏などがあった。

【ピット】

調査区の南端および北端から15基が検出された。直径は48～74cm、深さは16～38cmである。出土遺物はなく、時期は不明である。また、建物等の配列が判明できるものはなかった。

③　まとめ

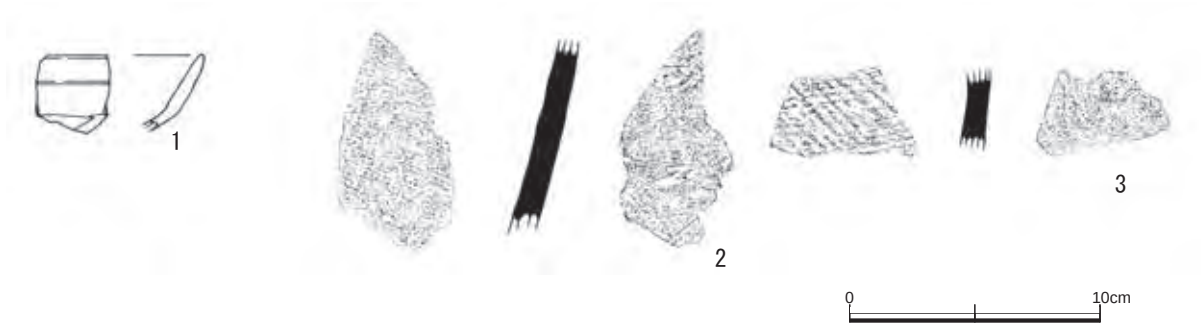
近世の溝３条が検出された。本調査地点から東方の熊野遺跡Ｂ区（埼埋文調査）や更に東の第61次・90次調査でも本遺構の延長部が検出されており、長さ200m以上に及ぶことが確認できた。



２・３号溝Ａ－Ａ´土層説明

1	褐色土	Ａ軽石多量含む。しまり弱い。近現代の耕作土。
2	褐色土	1層に類似。撹乱層。
3	褐色土	Ａ軽石
4	暗茶褐色土	
5	黒褐色土	ローム粒微量含む。Ａ軽石少量含む。
6	暗茶褐色土	ローム粒少量含む。
7	黒褐色土	ローム粒少量、Ａ軽石少量含む。
8	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。
9	黄褐色土	ローム粒主体。
10	暗茶褐色土	ローム粒微量含む。
11	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック少量含む。
12	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック微量含む。
13	暗茶褐色土	ローム粒多量含む。
14	黒褐色土	ローム粒微量含む。
15	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック多量含む。
16	黒褐色土	
17	暗黄褐色土	

第15図　２号・３号溝実測図



第16図　３号溝出土遺物実測図

３号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	-	-	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス	５％	
2	須恵甕	-	-	-	暗灰色	普通	石英、長石	破片	外面平行叩き後ナデ、内面青海波叩き後ナデ、末野
3	須恵甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石	破片	外面平行叩き、内面青海波叩き後ナデ、末野

(3)　熊野遺跡第118次調査

①　発掘調査の経過

熊野遺跡第118次調査地点は、深谷市岡字熊野2,912番地４（岡中央土地区画整理事業地内31街区５画地）である。

周囲は、区画整理事業及び個人住宅建築等により発掘調査が実施されてきた。近接して21次・27次、135次、埼埋文Ａ区などが位置する。調査区中央での標高は、55.0mを測る。

発掘調査は、平成９年11月４日から同年11月21日にかけて実施した。発掘調査面積は、約247㎡である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から行った。遺構確認面は、表土から50cmほど掘り下げたソフトローム面とした。

表土除去後、遺構確認作業を行い、井戸跡１基、溝３条、土坑４基等を確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、調査区西端の遺構から掘下げを開始した。その後、順次東方の遺構も掘下げていった。

土層断面図の作成は、遺構掘り下げと並行して実施し、その後に平面図を作成した。土層断面図・平面図ともに1/20の縮尺で実測した。

全ての掘り下げ・図化作業が終了した後、全景写真を撮影した。これにより、発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

②　遺構と遺物

調査により検出された遺構は、古代の井戸跡１基、中～近世の溝３条・土坑４基・ピット群である。

【１号井戸跡】

調査区の東端に位置する。東部が調査区域外にあるため、全容は不明である。

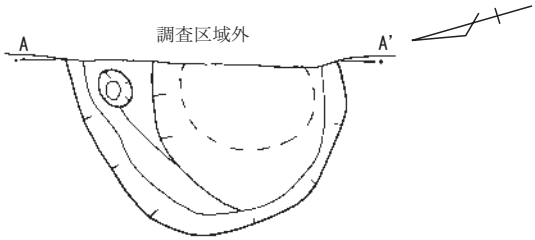
平面形態は楕円形を呈すると想定され、直径は2.20ｍを測る。壁は、南部はほぼ垂直に、北部は角度をもち掘り込まれていた。個人住宅にかかる調査のため、確認面より約１ｍ掘り下げ調査を中止した。この段階での直径は85cmを測ったが、底部の状況は不明である。

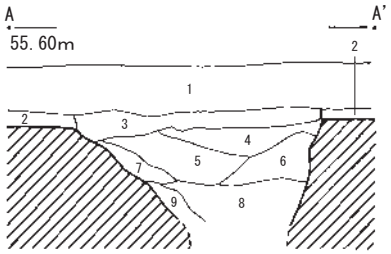
遺物は、土師器の坏・皿、須恵器の坏・甕が出土した。

【１号溝】

調査区の西端を南北に走行する。両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。

第17図　熊野遺跡118次調査全測図



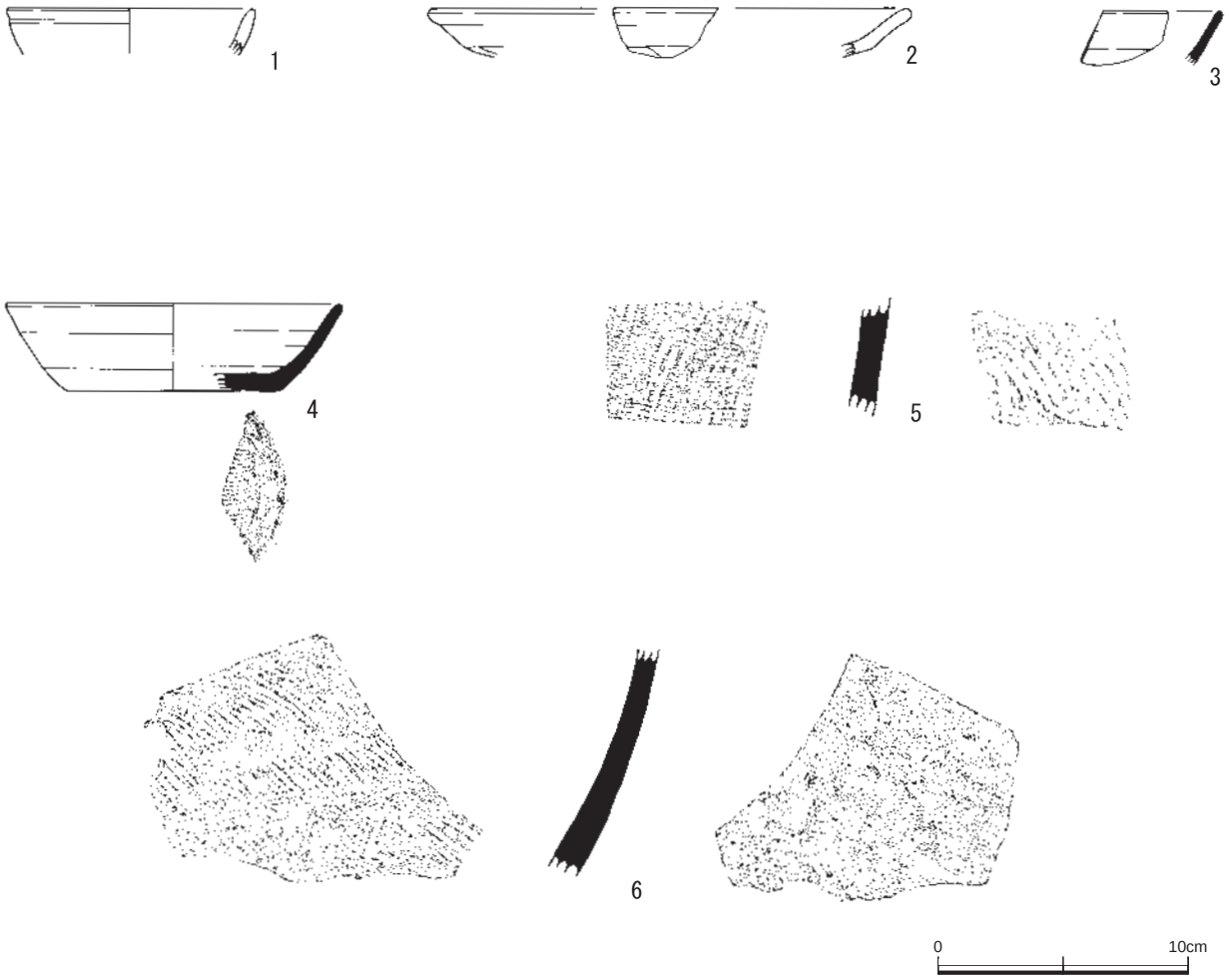


1号井戸跡土層説明

1　暗褐色土　　A軽石多量。しまり・粘性弱い。
2　茶褐色土　　ローム粒多量含む。
3　暗茶褐色土　ローム粒少量含む。
4　黒褐色土　　ローム粒・礫微量含む。
5　黒褐色土　　ローム粒・ロームブロック・礫少量含む。しまりやや弱い。
6　暗茶褐色土　ローム粒・礫少量、ロームブロック微量含む。しまりやや弱い。
7　黒褐色土　　ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
8　黒褐色土　　ローム粒微量、礫少量含む。
9　黒色土　　ローム粒微量含む。

0　2m

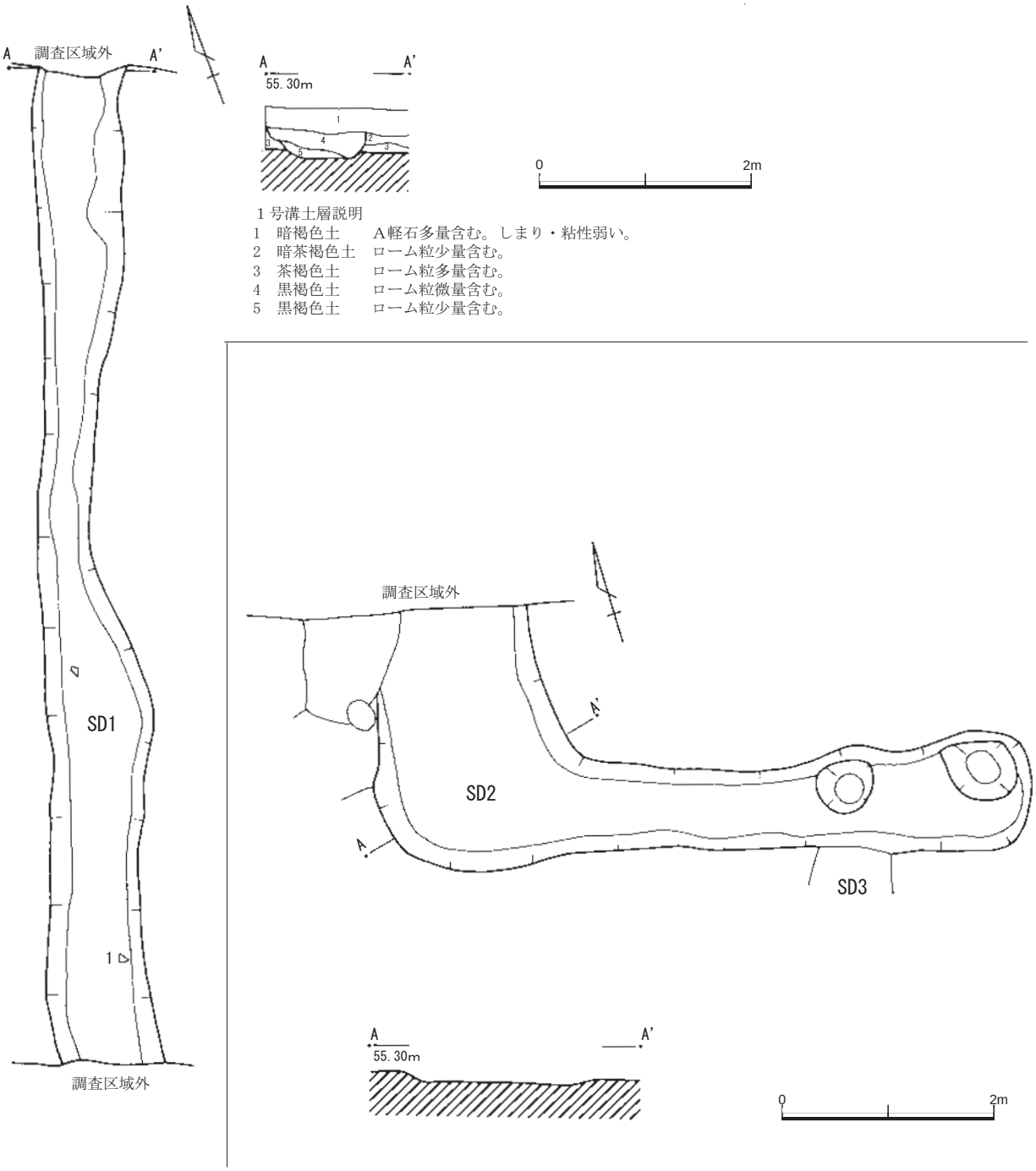
第18図　１号井戸跡実測図



第19図　１号井戸跡出土遺物実測図

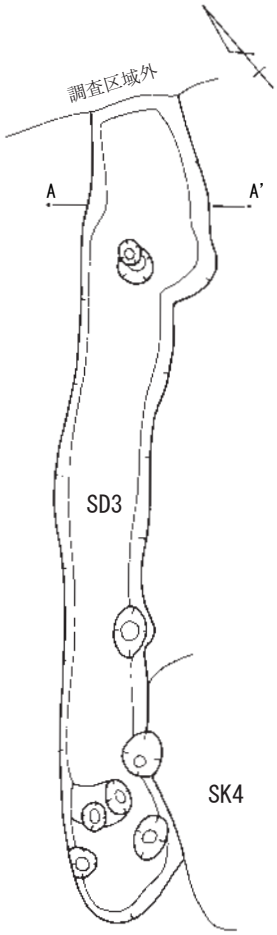
１号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(9.6)	《1.9》	-	橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示10%	上層
2	皿	(18.7)	《1.9》	-	明橙色	明橙色	石英、チャート、角閃石	図示５%	上層
3	須恵坏	-	-	-	明灰色	良好	石英､長石、海綿骨針	破片	上層、南比企
4	須恵坏	(13.0)	3.4	(8.2)	淡黄灰褐色	不良	石英、長石、片岩、黒色粒	図示25%	上層、底部周辺回転篦けずり南比企、磨滅あり
5	須恵甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石	破片	上層、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野
6	須恵甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石	破片	上層、外面平行叩き、内面ナデ、末野

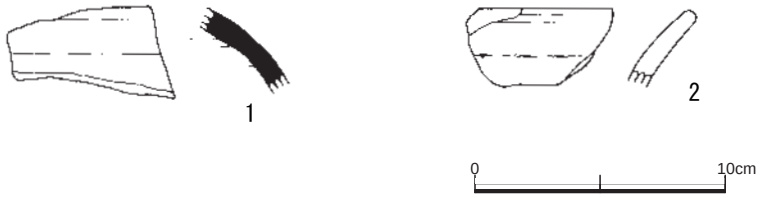


１号溝土層説明
1　暗褐色土　　A軽石多量含む。しまり・粘性弱い。
2　暗茶褐色土　ローム粒少量含む。
3　茶褐色土　　ローム粒多量含む。
4　黒褐色土　　ローム粒微量含む。
5　黒褐色土　　ローム粒少量含む。

第20図　１・２号溝実測図



第21図　３号溝実測図



第22図　１・３号溝出土遺物実測図

１・３号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	須恵甕	-	-	-	暗灰褐色	普通	石英、長石	破片	ＳＤ－１、内外面回転ナデ、末野
2	甕	-	-	-	橙色	普通	石英､雲母、微砂粒	破片	ＳＤ－３

確認できたのは、長さ9.4mの範囲である。幅は最大で102cmを測り、深さは８cmである。底面は平坦であり、断面形態は皿状を示す。主軸方位は、N-20°-Eを示す。

遺物は、須恵器の甕が出土した。

【２号溝】

調査区の北部に位置する。北端が調査区域外にあるため、全容は不明である。

本遺構は、調査区北部で東から西に走行した後、ほぼ直角に北へ向きを変え、調査区外へと延びる。確認できたのは、長さ8.5mの範囲である。幅は最大で195cmを測り､深さは10cmである。底面は平坦であり、断面形態は皿状を示す。主軸方位は、N-74°-W～N-6°-Eを示す。

遺物は、出土しなかった。

【３号溝】

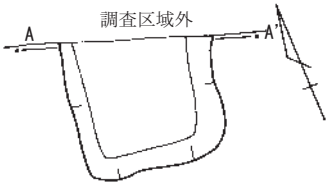
調査区の中央に位置する。北端が２号溝と接する。長さは6.55mで、幅は最大で105cmを測る。底面は平坦で、断面形態は皿状を示す。確認面からの深さは15cmである。主軸方位は、N-36°-Eを示す。

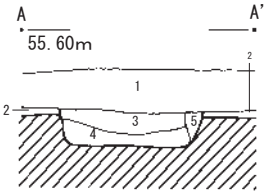
遺物は、土師器の甕が出土した。

【１号土坑】

調査区の北端に位置する。北部が調査区域外にあるため、全容は不明である。

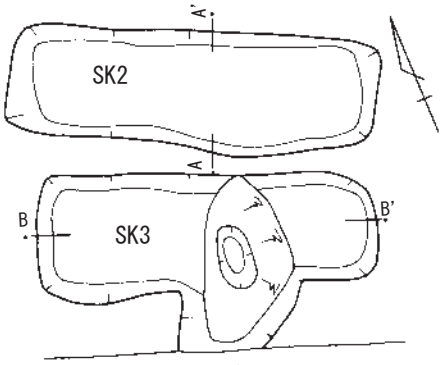
平面形態は、長方形を呈すると想定される。長軸

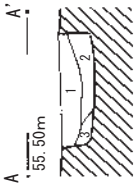




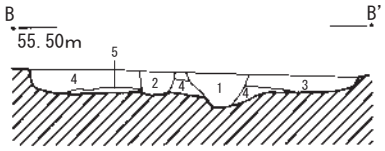
1号土坑土層説明
1　暗褐色土　　A軽石多量含む。しまり・粘性弱い。
2　茶褐色土　　ローム粒多量含む。
3　黒褐色土　　ローム粒・ロームブロック微量含む。しまりやや弱い。
4　黒褐色土　　ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
5　茶褐色土　　ロームブロック主体。

第23図　１号土坑実測図



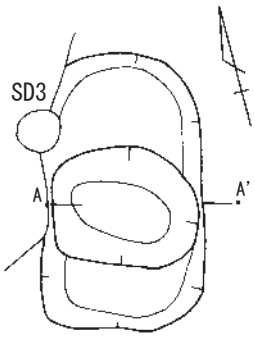


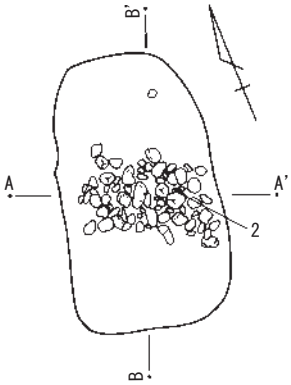
2号土坑土層説明
1　暗茶褐色土　ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
2　黒褐色土　　ローム粒・ロームブロック少量含む。
3　茶褐色土　　ローム粒多量含む。



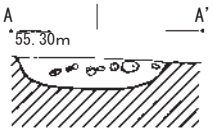
3号土坑土層説明
1　黒褐色土　　ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
2　黒褐色土　　１層に類似。
3　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック少量含む。
4　茶褐色土　　ローム粒・ロームブロック多量含む。
5　黒色土　　ローム粒微量含む。

第24図　２・３号土坑実測図

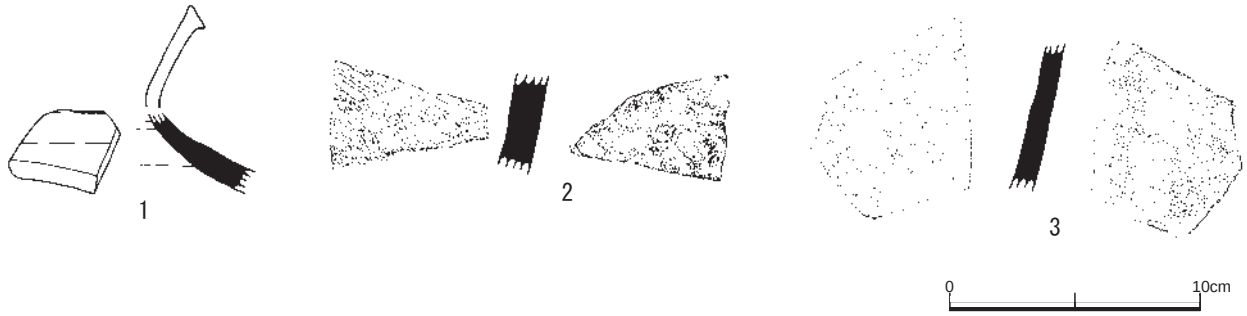




4号土坑土層説明
1　黒褐色土　　ローム粒微量含む。
　　粘性ややあり。



第25図　４号土坑実測図



第26図　１・４号土坑出土遺物実測図

１・４号土坑出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	須恵甕	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	ＳＫ－１、末野
2	須恵甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	ＳＫ－４、外面平行叩き、末野
3	須恵甕	-	-	-	明灰色	普通	長石、黒色粒、海綿骨針(精良)	破片	ＳＫ－４、外面平行叩き後ナデ、南比企

110cm以上、短軸115cmを測る。主軸方位は、N-７°-Ｅを示す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれる。底面は平坦で、確認面からの深さは22cmを測る。

遺物は、須恵器の甕が出土した。

【２号土坑】

調査区の南西に位置する。

平面形態は長方形を呈し、長軸291cm、短軸99cmを測る。主軸方位は、N-70°-Wを示す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、28cmを測る。

遺物は、出土しなかった。

【３号土坑】

調査区の南西に位置する。

平面形態は長方形を呈するが、中央部で土坑と重複する。長軸272cm、短軸101cmを測る。主軸方位は、N-68°-Wを示す。

壁はやや角度をもち掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、20cmを測る。

遺物は、出土しなかった。

【４号土坑】

調査区の南部に位置する。

平面形態は、隅丸長方形を呈する。長軸218cm、短軸130cmを測る。主軸方位は、N-20°-Ｅを示す。

壁はやや角度をもち掘り込まれる。底面は凹凸をもち、中央部が楕円形に掘り込まれる。円形部の直径は、114cmを測る。確認面からの深さは、24cmを測る。

遺物は、須恵器の甕の破片が出土した。また、中央部の覆土上層から中層にかけて、礫が集中して出土した。

④　まとめ

調査区東端で検出された井戸跡は、８世紀前半以降である。他の遺構は、覆土の状況から古代に遡るものではないと想定される。

(4) 熊野遺跡第122次調査

① 発掘調査の経過

熊野遺跡第122次調査地点は、深谷市岡字千手堂1,880番地４である。

周囲では、岡部西小学校建設や道路拡幅に先立ち発掘調査が実施されている。調査区中央での標高は、54.1mを測る。

発掘調査は、平成９年12月８日から同年12月20日にかけて実施した。発掘調査面積は、約110㎡である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から行った。遺構確認面は、表土から30cmほど掘り下げたソフトローム面とした。

表土除去後、遺構確認作業を行い、竪穴住居跡４軒、土坑４基などを確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、調査区北東に位置する１号住居跡から掘り下げを開始した。その後、順次他の遺構も掘り下げていった。

途中、土器類が出土したので、なるべく元位置を留めながら掘り下げを続け、床面を検出した段階で遺物出土状況の写真撮影を実施し、遺物出土状況図を作成した。また、土層断面図の作成も、遺構掘り下げと並行して実施し、その後に平面図を作成した。

全ての掘り下げ・図化作業が終了した後、全景写真を撮影した。これにより、発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

② 遺構と遺物

調査により検出された遺構は、飛鳥～平安時代の竪穴住居跡４軒、近世以降の土坑４基などである。

【１号住居跡】

１号住居跡は、調査区東側に位置する。耕作により住居跡上面が削平されていた。２・３号住居跡と重複し、断面観察から本住居跡が最も新しいことが判明した。

平面形態は略方形で、規模は長軸約4.8m、短軸約4.6m、深さ約0.3m、を測る。主軸方位はN-51°-Eを示す。

床面は２枚の貼床が確認されており、旧床面の貼床は最終床面（10,11層）より東側の幅が狭く、住居が東側に拡張されたものと考えられる。床面は両面ともよく踏み固められていた。

壁溝は幅0.3～0.4m、深さ約0.1mを測り、全周する。

カマドは、東壁側のやや南寄りに設置されていた。袖は灰白色粘土と砂質土の造り付けで、両袖には土師器甕が補強材として使われていた。燃焼部の幅は約0.5mで、煙道部は一部撹乱により壊されているが、焚き口から煙道部までの長さは約1.2mであった。火床面は平坦で、燃焼部には土師器甕が逆位で残されていた。おそらく支脚として使われたものと推定される。

ピットは最終床面で６基、旧床面で６基が検出された。最終床面のＰ１～Ｐ４は柱穴と思われる。

出土遺物は、覆土中から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、磨痕石、貼床下から土師器暗文坏、砥石等が出土した。１～７、９、10は北武蔵型坏で、丸底のものと平底化したものがある。11は皿、12～14は北武蔵型暗文坏である。12、14は貼床下から出土したもので丸底風のもの、13は平底化した暗文坏で、前者より後出的である。16～25は土師器甕で、19以外はすべてカマド出土である。いずれも胴部上位に膨らみをもつが、18、19はやや弱い。26、27は須恵器蓋、28、29は須恵器坏。28は底部全面回転篦ケズリでケズリは浅く、口縁部が直線的にのびる。29は内湾ぎみ。30は甕で、内外面にハケメ調整を施す。須恵器はすべて末野産である。31は砥石で、使い減りが著しい。32は表裏に研磨痕のある石で、磨り石として使用されたものであろうか。

住居の時期は、床面の構造および出土遺物から、２時期に分かれるものと思われる。第１期は７世紀後半～８世紀初頭、第２期は８世紀前半と考えられる。

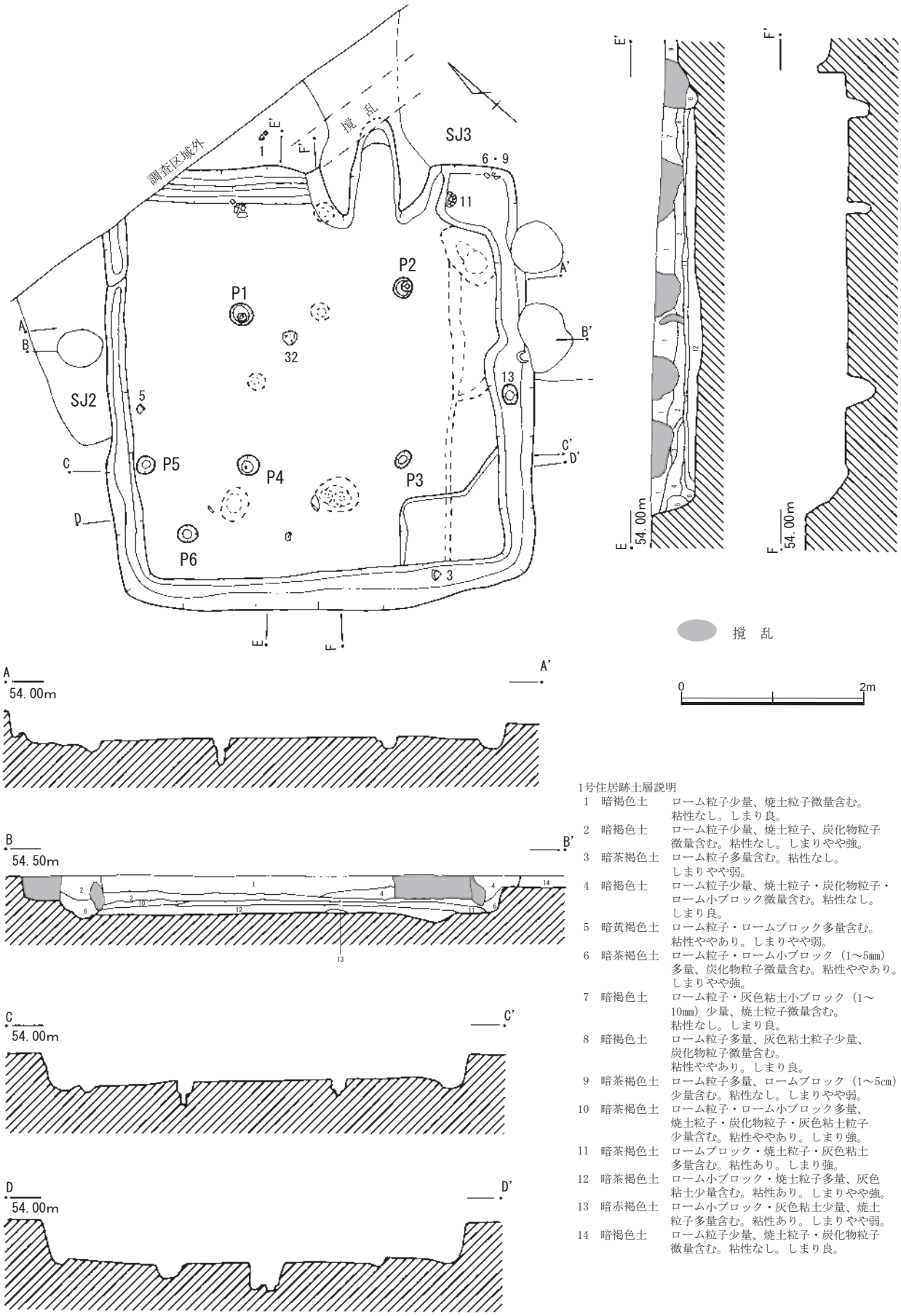
【２号住居跡】

２号住居跡は、調査区東側に位置する。住居の大半が１号住居跡に切られており、また北壁側が調査区外のため全容は不明である。

平面形態は方形または長方形と思われ、規模は残存する東西軸で約3.8m、深さは約0.2mを測る。

床面はほぼ平坦である。壁溝は西壁側で幅約0.2m、深さ約７㎝、東壁側で幅約0.3m、深さ約４㎝を測る。

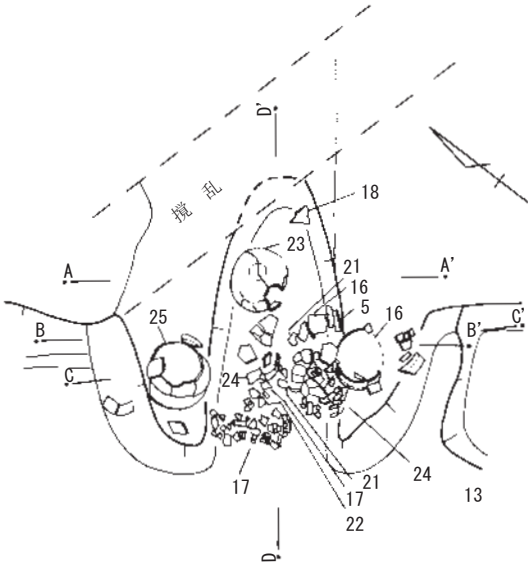
第27図　熊野遺跡122次調査全測図

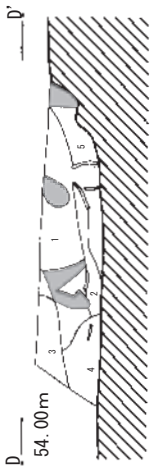


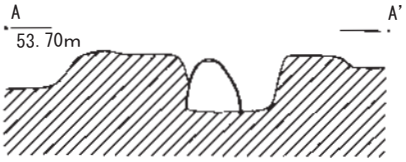
1号住居跡土層説明

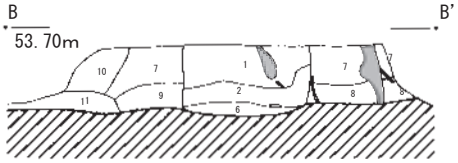
1	暗褐色土	ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。粘性なし。しまり良。
2	暗褐色土	ローム粒子少量、焼土粒子、炭化物粒子微量含む。粘性なし。しまりやや強。
3	暗茶褐色土	ローム粒子多量含む。粘性なし。しまりやや弱。
4	暗褐色土	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物粒子・ローム小ブロック微量含む。粘性なし。しまり良。
5	暗黄褐色土	ローム粒子・ロームブロック多量含む。粘性ややあり。しまりやや弱。
6	暗茶褐色土	ローム粒子・ローム小ブロック（1～5㎜）多量、炭化物粒子微量含む。粘性ややあり。しまりやや強。
7	暗褐色土	ローム粒子・灰色粘土小ブロック（1～10㎜）少量、焼土粒子微量含む。粘性なし。しまり良。
8	暗褐色土	ローム粒子多量、灰色粘土粒子少量、炭化物粒子微量含む。粘性ややあり。しまり良。
9	暗茶褐色土	ローム粒子多量、ロームブロック（1～5㎝）少量含む。粘性なし。しまりやや弱。
10	暗茶褐色土	ローム粒子・ローム小ブロック多量、焼土粒子・炭化物粒子・灰色粘土粒子少量含む。粘性ややあり。しまり強。
11	暗茶褐色土	ロームブロック・焼土粒子・灰色粘土多量含む。粘性あり。しまり強。
12	暗茶褐色土	ローム小ブロック・焼土粒子多量、灰色粘土少量含む。粘性あり。しまりやや強。
13	暗赤褐色土	ローム小ブロック・灰色粘土少量、焼土粒子多量含む。粘性あり。しまりやや弱。
14	暗褐色土	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物粒子微量含む。粘性なし。しまり良。

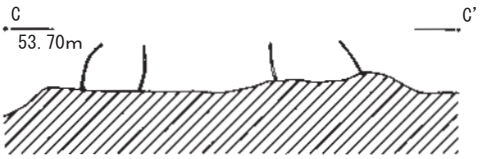
第28図　１号住居跡実測図





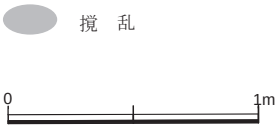




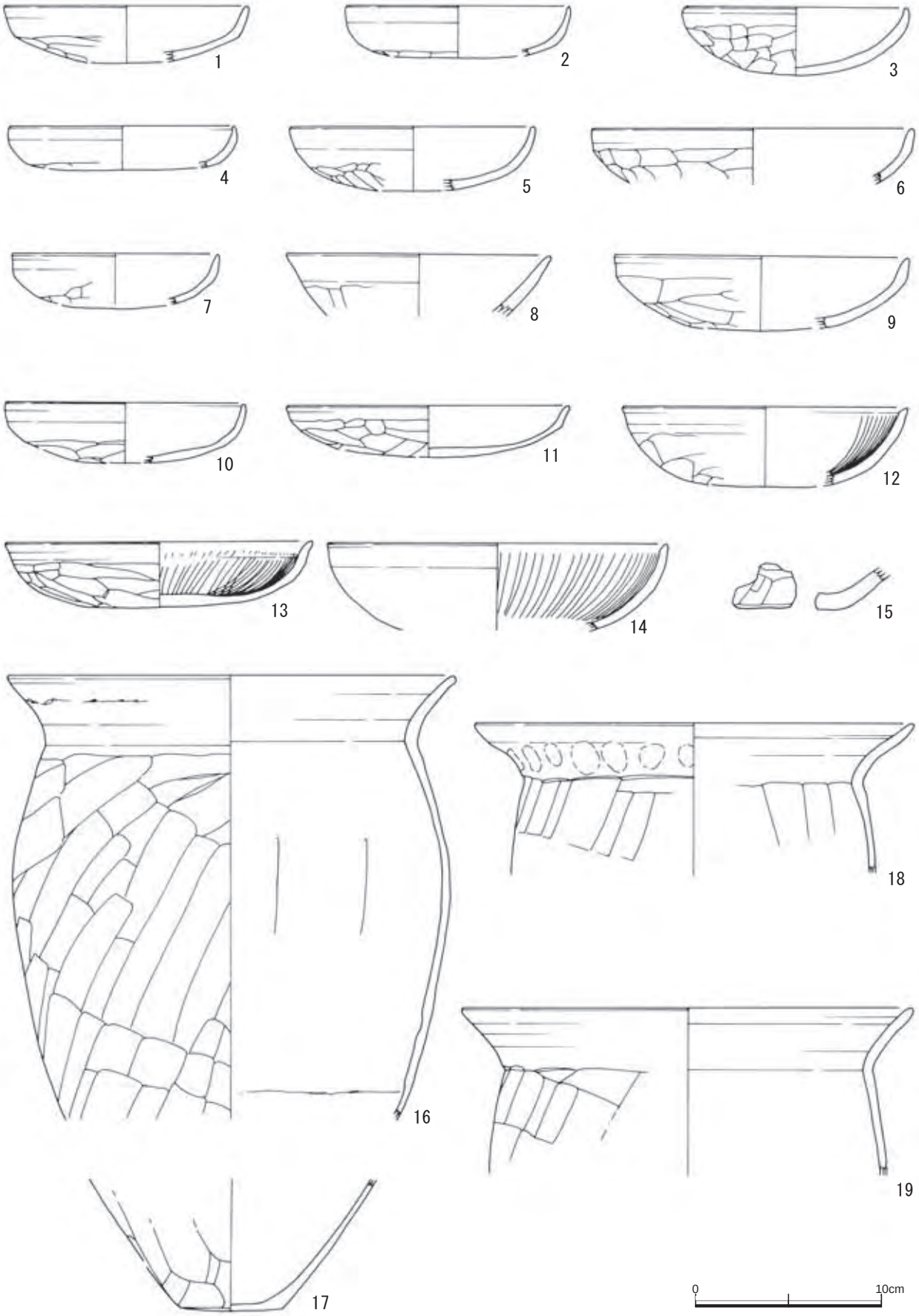


1号住居跡カマド土層説明

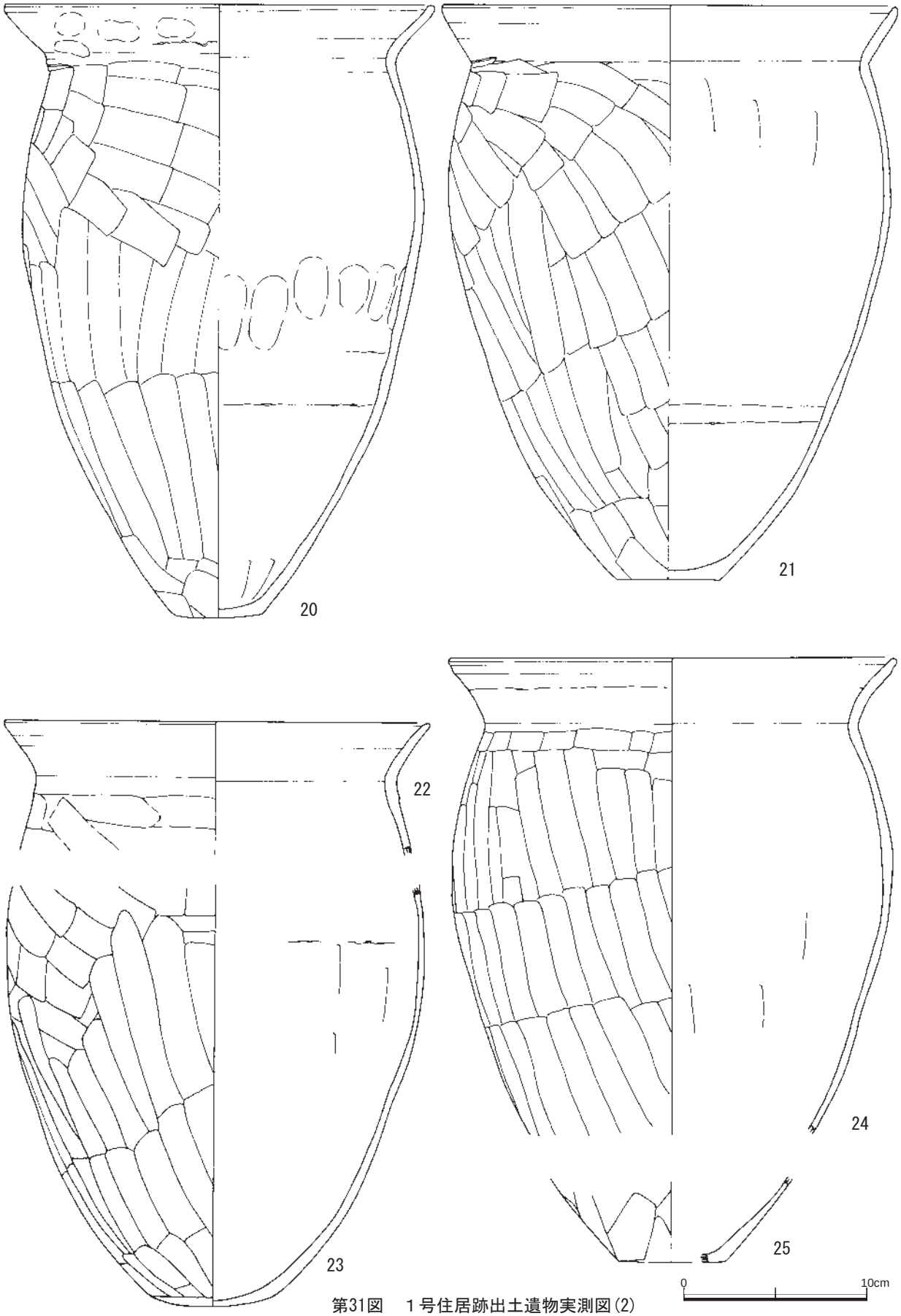
1	暗灰褐色土	ローム粒子微量、焼土粒子少量、暗灰色粘土多量含む。 粘性あり。しまり強。
2	暗灰茶褐色土	ローム粒子微量、焼土粒子・暗灰色粘土多量含む。 粘性ややあり。しまり良。
3	暗茶褐色土	ローム粒子微量、焼土粒子・灰色粘土少量含む。 粘性なし。しまり良。
4	暗茶褐色土	ローム粒子微量、焼土粒子・炭化物粒子少量、灰色粘土多量含む。 粘性なし。しまり良。
5	暗茶褐色土	ローム粒子微量、焼土粒子多量、炭化物粒子・灰色粘土少量含む。 粘性ややあり。しまりやや弱。
6	暗茶褐色土	ローム粒子微量、焼土粒子・炭化物粒子多量、灰色粘土少量含む。 粘性なし、しまり良。
7	暗灰茶褐色土	ローム小ブロック・焼土粒子少量、灰色粘土多量、ローム粒子微量含む。 粘性あり。しまり強。
8	暗茶褐色土	ローム粒子多量、灰色粘土、焼土粒子少量含む。 粘性ややあり。しまりやや弱。
9	暗茶褐色土	灰色粘土・焼土粒子・ローム粒子少量含む。 粘性ややあり。しまりやや弱。
10	暗茶褐色土	ローム小ブロック・焼土粒子・灰色粘土少量含む。 粘性ややあり。しまり良。
11	暗茶褐色土	ローム粒子・ローム小ブロック多量、焼土粒子少量含む。 粘性なし。しまり良。



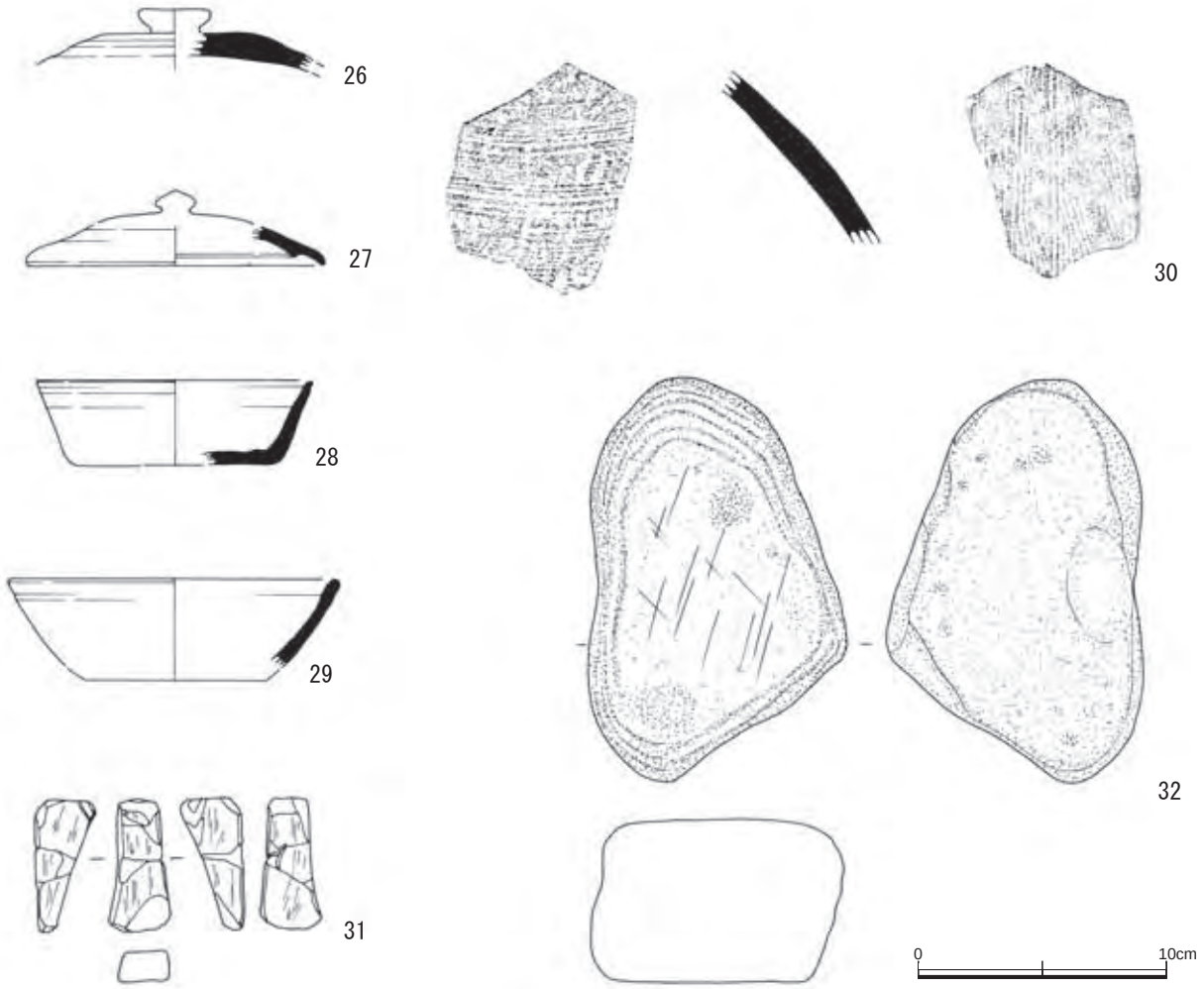
第29図　１号住居跡カマド実測図



第30図　１号住居跡出土遺物実測図(1)



第31図　１号住居跡出土遺物実測図(2)



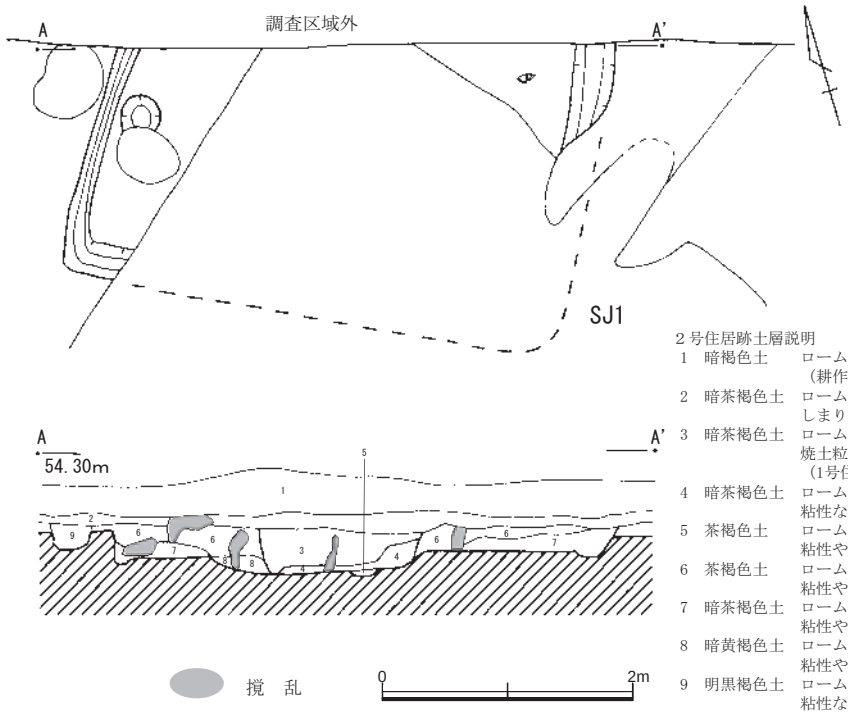
第32図　１号住居跡出土遺物実測図(3)

１号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(12.8)	(3.1)	-	明橙色	普通	石英、角閃石	図示20%	覆土
2	坏	(11.7)	(2.8)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示30%	覆土
3	坏	(11.6)	3.6	-	明橙色	普通	石英、角閃石､微砂粒	35%	図示
4	坏	(11.8)	(2.4)	-	灰褐色	やや悪	石英、角閃石	図示15%	カマド
5	坏	(12.7)	(3.4)	-	にぶい灰橙色	良好	雲母、角閃石、(精良)	図示20%	図示
6	坏	(16.8)	《3.0》	-	橙～灰黒色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示30%	図示
7	坏	(10.8)	(2.9)	-	明茶褐色	普通	石英、角閃石	図示15%	覆土
8	坏	(13.8)	《3.3》	-	暗橙褐色	普通	石英、微砂粒	図示20%	覆土、鉢？
9	坏	(15.4)	(4.0)	-	灰橙～灰黒色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示20%	図示
10	坏	12.4	3.2	-	暗灰橙褐色	やや悪	石英、角閃石、長石	60%	カマド、磨滅ややあり
11	坏	14.8	2.7	-	灰黒～橙褐色	普通	石英、雲母、角閃石	60%	図示、３住Pit１と接合
12	坏	(14.9)	(4.2)	-	にぶい橙色	普通	石英、チャート、角閃石、砂粒	図示10%	貼床下一括、内面放射状暗文
13	坏	16.1	3.4	-	灰黒～橙褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	70%	図示、内面放射状暗文
14	坏	(17.7)	《4.7》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、チャート、砂粒	図示35%	貼床下一括、内面放射状暗文
15	甑	-	-	-	灰橙褐色	良好	石英、長石、砂粒	破片	貼床下一括
16	甕	(23.4)	《23.8》	-	橙褐色	普通	微砂粒多量	図示45%	カマド図示
17	甕	-	《7.3》	5.5	暗赤褐色	普通	微砂粒多量	図示30%	カマド図示
18	甕	(22.8)	《8.1》	-	橙褐色	普通	雲母､微砂粒	図示20%	カマド図示
19	甕	(23.7)	《8.9》	-	明橙褐色	普通	砂粒多量	図示15%	貼床下一括
20	甕	22.8	33.2	4.8	橙褐～灰褐色	普通	微砂粒多量	60%	カマド図示
21	甕	(24.3)	31.0	(5.5)	橙褐色	普通	微砂粒多量	40%	カマド図示
22	甕	(22.6)	《7.2》	-	橙褐色	普通	微砂粒多量	図示45%	カマド図示
23	甕	-	《22.9》	6.6	暗橙褐色	普通	微砂粒多量	図示80%	カマド図示
24	甕	(23.7)	《25.8》	-	橙褐色	普通	微砂粒多量	図示60%	カマド図示

１号住居跡出土遺物観察表(2)

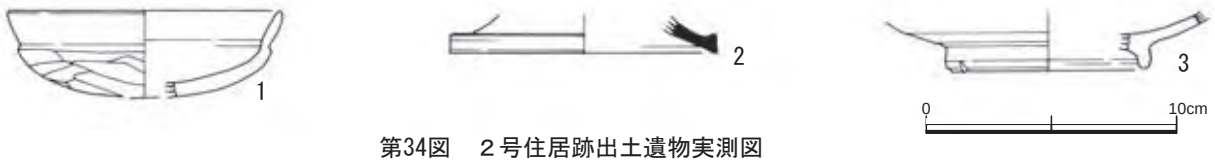
番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
25	甕	-	《4.7》	(5.8)	黒褐～橙褐色	普通	微砂粒多量	図示40%	カマド図示
26	須恵蓋	-	-	-	灰褐色	普通	石英、長石、片岩	図示25%	カマド、末野
27	須恵蓋	(11.8)	《1.6》	-	明灰色	良好	長石、片岩	図示10%	覆土、末野
28	須恵坏	(10.8)	3.4	(7.8)	淡灰色	普通	石英、長石、黒色粒	25%	覆土、底部浅い回転篦ケズリ、末野
29	須恵坏	(12.9)	《3.5》	-	灰褐色	やや悪	石英、長石、黒色粒	図示10%	覆土、末野
30	須恵甕	-	-	-	灰褐色	普通	石英、長石、片岩	破片	貼床下、内外面ハケメ
31	砥石	長さ 5.3cm	幅 2.5cm	厚さ2.4cm	重さ 23.0g	石質凝灰岩			貼床下一括
32	磨痕石	長さ16.1cm	幅10.2cm	厚さ6.5cm	重さ 1.74kg	石質安山岩			図示、砥石か？



２号住居跡土層説明

1　暗褐色土　ローム粒子少量、パミス多量含む。粘性なし。しまり不良。（耕作土）
2　暗茶褐色土　ローム粒子、パミス少量、焼土粒子微量含む。粘性なし。しまりやや弱。
3　暗茶褐色土　ローム粒子多量、パミス・ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物粒子微量含む。粘性なし。しまり良。（1号住覆土）
4　暗茶褐色土　ローム粒子多量、ローム小ブロック少量含む。粘性なし。しまり良。（1号住覆土）
5　茶褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量含む。粘性ややあり。しまりやや弱。（1号住覆土）
6　茶褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量、焼土粒子微量含む。粘性ややあり。しまり良（2号住覆土）
7　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック（1～2cm）多量含む。粘性ややあり。しまり良（2号住覆土）
8　暗黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量含む。粘性ややあり。しまりやや弱。（2号住覆土）
9　明黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・パミス少量含む。粘性なし。しまり良。

第33図　２号住居跡実測図



第34図　２号住居跡出土遺物実測図

２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(10.7)	(3.4)	-	にぶい橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	50%	図示
2	須恵高盤	-	《1.5》	(10.5)	灰色	普通	石英、長石	図示20%	覆土、末野
3	灰釉高台皿	-	《2.2》	(7.7)	淡灰色	良好	長石（精良）	図示７%	覆土、東海産、混入

ピットは西壁際に１基検出したが、深さ10㎝程で浅い。

出土遺物は少なく土師器坏・甕片、須恵器高盤、灰釉高台皿が出土した。１の土師器坏は模倣坏で、２は高盤の脚、３の灰釉高台皿は東海産で混入と思われる。

住居の時期は不明確であるが、１号住居跡との切り合い関係と土師器坏の年代から７世紀前半～中葉と考えたい。

【３号住居跡】

３号住居跡は、調査区東端に位置する。１号住居跡に住居の南西部を切られている。

平面形態は方形ないし長方形と考えられるが、大半が調査区外であり規模は不明である。

床面は概ね平坦でよくしまっていた。壁溝は西壁側で一部検出した。

ピットは５基検出した。Ｐ１、Ｐ２は主柱穴と思われるが、Ｐ３は遺構に伴わない。

カマドは検出されなかった。

遺物は少なく、土師器坏と甕の破片が出土した。１は北武蔵型坏で、口縁部が直立する。２の甕は口縁部の開きが強い。長胴甕か。

住居の時期は不明確であるが、第１号住居との重複関係から７世紀中葉～後半と考えられる。

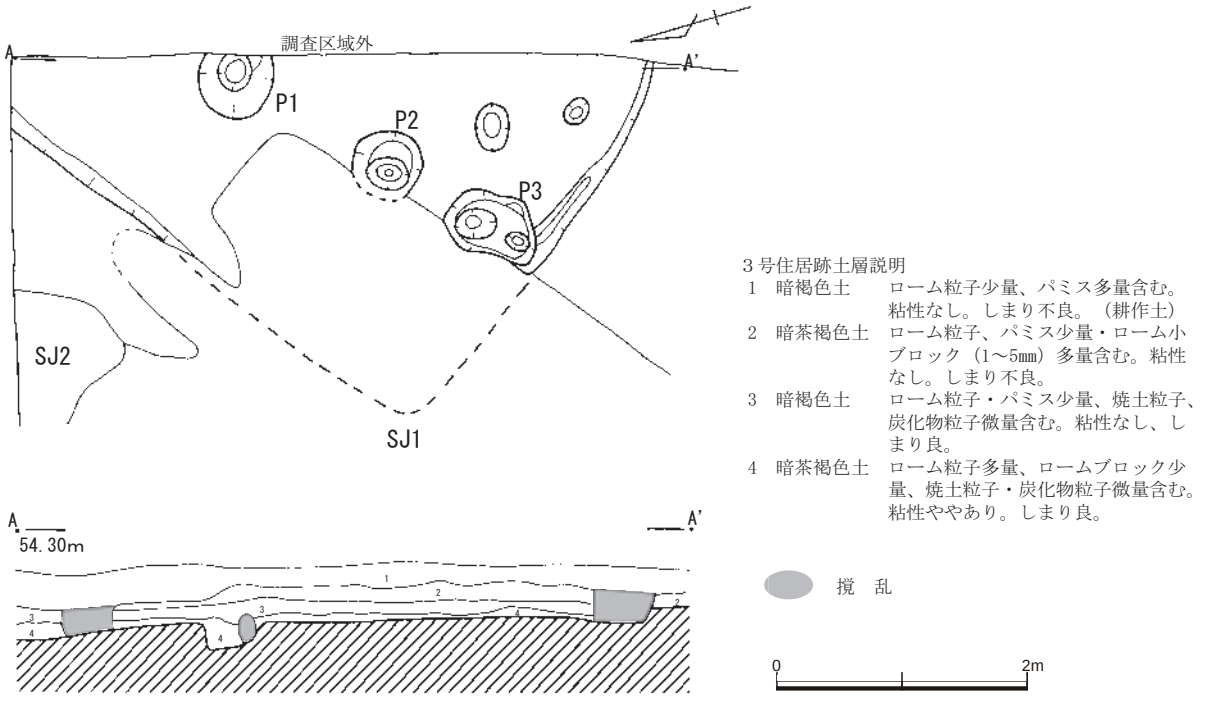
【４号住居跡】

４号住居跡は、調査区の南西部に位置する。遺構の南側半分が調査区外のため、全体の規模は不明である。

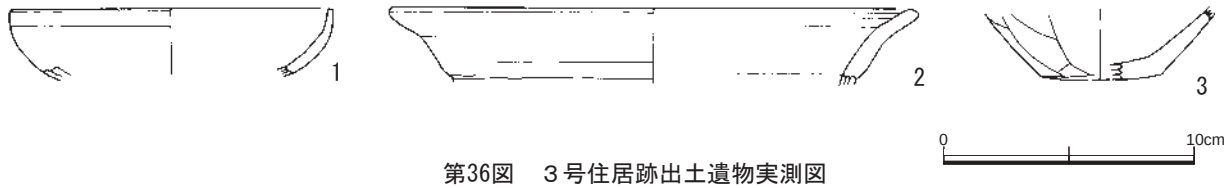
平面形態は方形ないし長方形と思われる。残存規模は東西軸で約1.6m、深さ約0.2m、主軸方位はN-54°-Wを示す。

床面は概ね平坦であるが、しまりはなかった。壁溝は検出されなかった。

カマドは大半が調査区外のため規模の詳細は不明だが、灰色粘土と焼土を検出したためカマドとした。



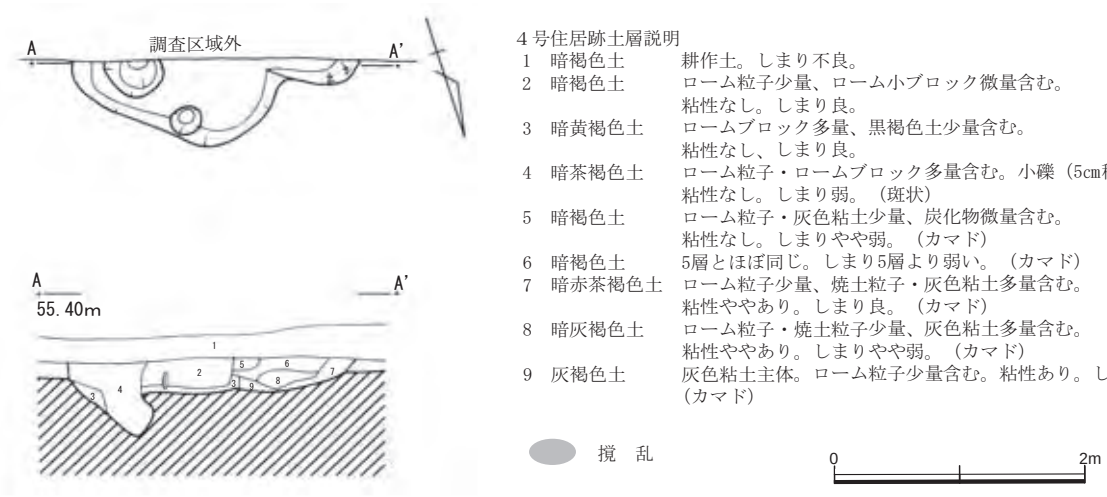
第35図　３号住居跡実測図



第36図　３号住居跡出土遺物実測図

３号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(12.6)	《2.7》	-	明赤褐色	普通	微砂粒	図示７％	Ｐ１覆土、内面放射状暗文
2	甕	(20.8)	《3.0》	-	暗灰赤褐色	普通	石英、長石､角閃石、砂粒多	図示15%	Ｐ３覆土
3	甕	-	《2.9》	(4.8)	灰橙褐色	普通	石英、チャート、角閃石、砂粒	図示45%	Ｐ１覆土



第37図　4号住居跡実測図

ピットは２基検出したが、遺構には伴わない。

出土遺物はなく、時期も不明である。なお住居としたが、規模も小さく不明確な点が多いことから、竪穴状遺構とするのが妥当かもしれない。

【１号土坑】

１号土坑は、調査区西側に位置する。南東に隣接して４号住居跡がある。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸約2.1m、短軸約1.3m、深さ約0.3mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む黒褐色土である。

出土遺物は混入と思われる土師器、須恵器甕の破片（図１，２）が出土している。

時期は不明確だが中世と推定される。

【２号土坑】

２号土坑は、調査区中央部の南端に位置し、隣接する４号土坑と主軸をそろえて直列する。

平面形態は南側が調査区外のため全容は不明であるが、長方形と考えられる。規模は残存長約2.1m、短軸約0.9m、深さ約0.4mである。主軸方位はN-17°-Eを示す。埋土はロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、中世と考えられる。

【３号土坑】

３号土坑は、調査区中央部の北端に位置し、隣接する４号土坑と主軸をそろえて直列する。

平面形態は長方形ないし方形と思われる。規模は北

側の大半が調査区外のため、全容は不明である。残存長約0.9m、短軸約0.8m、深さ約0.4m、主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む黒褐色土である。

遺物は、土製支脚が出土した。時期は不明確だが、中世と考えられる。

【４号土坑】

４号土坑は、調査区中央部に位置する。２、３号土坑の間にあり、主軸を揃えて直列する。

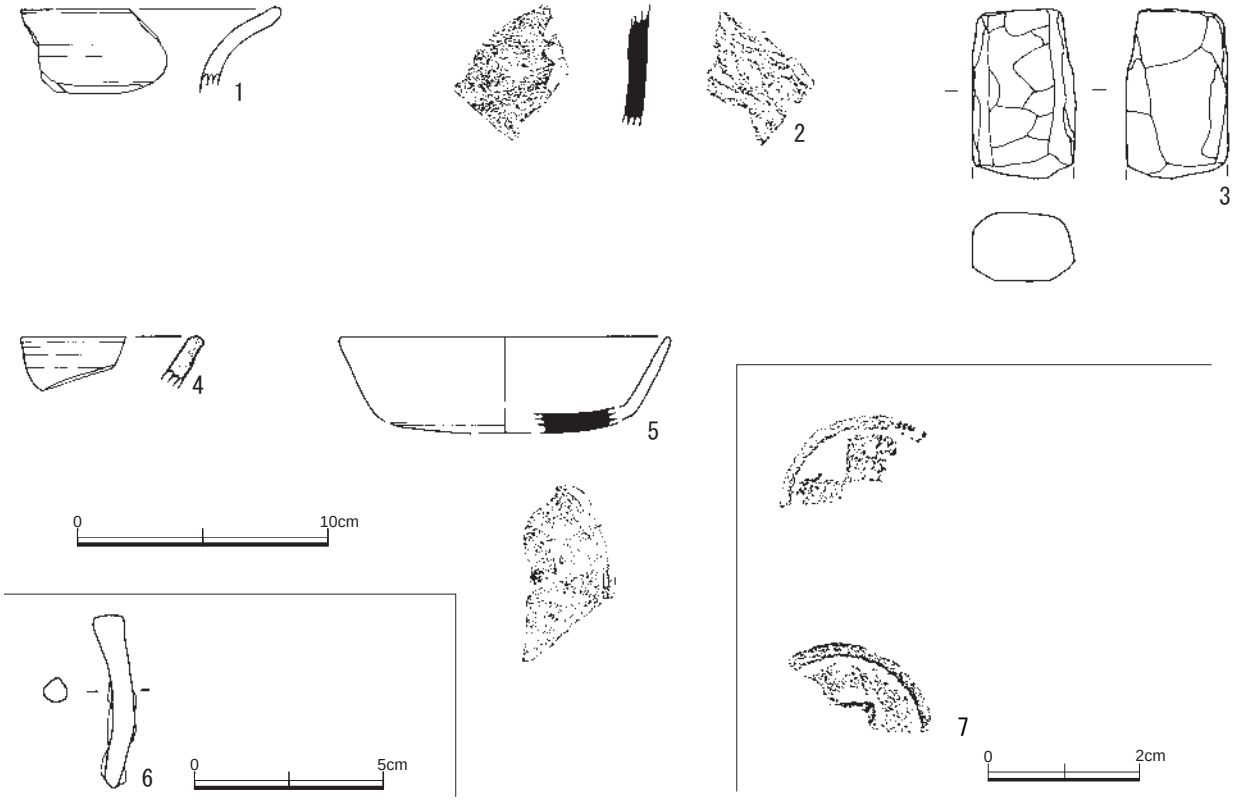
平面形態は長方形で、規模は長軸約3.7m、短軸約0.8m、深さ約0.4m、主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土は２、３号土壙と同様ロームブロックを多量に含む黒褐色土主体である。

出土遺物は常滑の鉢、須恵器坏、鉄釘があるが、須恵器坏は混入と思われる。時期は中世と考えられる。

【ピット・表採遺物】

ピットは調査区全域に分布するが、２～４号土坑の西側に集中するようである。形態は円形を基調に楕円形のものも含まれる。中世の土坑を切っているものも多く、分布に規則性のみられるものはない。時期は中世以降、近世の所産と考えられる。

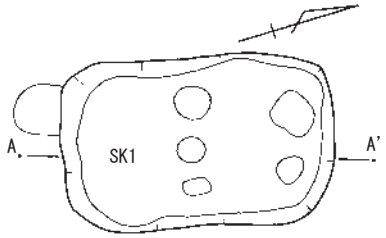
表採遺物７は渡来銭である。大半を欠くが開元通宝と思われる。初鋳は621年（唐）である。

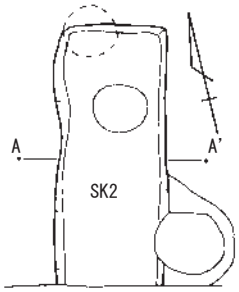


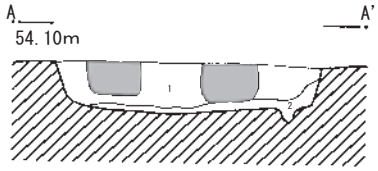
第38図　土坑出土・表採遺物実測図

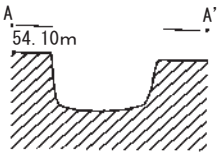
土坑出土・表採遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	甕	-	-	-	橙色	普通	石英、角閃石、砂粒	破片	ＳＫ１、覆土
2	須恵甕	-	-	-	明灰色	普通	石英､長石	破片	ＳＫ１、覆土
3	土製支脚？	長さ6.7cm	幅4.1cm	厚さ2.9cm	灰赤褐色	普通	微砂粒	破片	ＳＫ３、覆土
4	鉢	-	-	-	にぶい茶褐色	普通	石英、長石	破片	ＳＫ４、覆土、常滑
5	須恵坏	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示25%	ＳＫ４、覆土、末野、混入か
6	鉄釘か	長さ4.6cm	幅0.8cm	重さ3.3ｇ				破片	ＳＫ４内Pit、覆土、錆瘤
7	銭貨	開元通宝（唐銭621年初鋳）						35%	表採



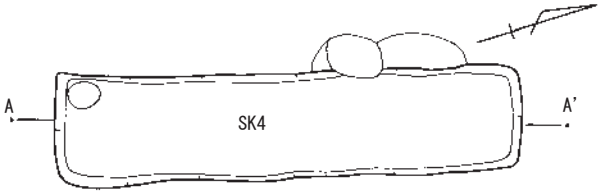


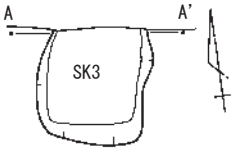


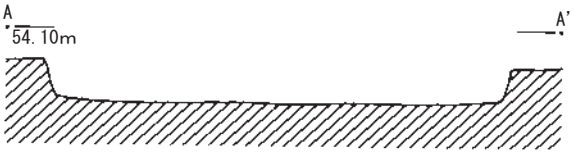


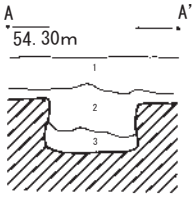
撹　乱

1号土坑土層説明
1　黒褐色土　ローム小ブロック多量、パミス少量含む。
　　粘性なし。しまりやや弱。
2　黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック少量含む。
　　粘性なし。しまり良。









3号土坑土層説明
1　暗褐色土　　ローム粒子・パミス少量含む。粘性なし。しまり弱（表土）
2　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック（1～2cm）・黒褐色土粒多量含む。
　　粘性なし。しまり弱。（斑状）
3　黒褐色土　　ローム粒子・ローム小ブロック多量、黒褐色土少量含む。
　　粘性なし。しまり弱。（斑状）

第39図　1～4号土坑実測図

(5)　熊野遺跡第124次調査

①　発掘調査の経過

熊野遺跡第124次調査地点は、深谷市岡字内出2785番地２（岡中央土地区画整理事業地内９街区11画地）である。

周囲は、区画整理事業及び個人住宅建築等により発掘調査が実施されてきた。近接して95次・98次・125次調査区などが位置する。調査区中央での標高は、50.2mを測る。

発掘調査は、平成９年12月15日から同年12月26日にかけて実施した。発掘調査面積は、約70㎡である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から行った。遺構確認面は、表土から30cmほど掘り下げたソフトローム面とした。

表土除去後、遺構確認作業を行い、竪穴住居跡３軒、溝１条、土坑２などを確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、大溝にトレンチを３本設定し、ここから掘り下げを開始した。その後、順次他の遺構も掘下げていった。

土層断面図の作成は、遺構掘り下げと並行して実施し、その後に平面図を作成した。土層断面図・平面図ともに１/20の縮尺で実測した。

全ての掘り下げ・図化作業が終了した後、全景写真を撮影した。これにより、発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

②　遺構と遺物

調査により検出された遺構は、奈良時代の掘立柱建物跡１軒、平安時代の大溝１条、中～近世の土坑２基・溝１条である。

【１号住居跡】

調査区の東端に位置する。６号住居跡・１号溝と重複し、切り合い関係から、本遺構が最も古いことが確認されている。

東半部が調査区域外にあるため、全容は不明である。規模は、短軸で4.62m、長軸は5.50m以上を測る。主軸方位は、N-37°-Wである。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、40cmほどを測る。壁溝は、確認できた範囲では全周した。

カマドは、北壁の北東コーナー寄りで検出された。ただし燃焼部から煙道にかけて撹乱により破壊されている。袖は粘土の造り付けで、左袖94cm、右袖65cm以上を測る。両袖先端部の内側に、補強材として平坦な石材が使用されていた。また、燃焼部中央から支脚として用いられた円柱形の石も検出された。

土坑は２基が検出され、いずれも不整円形を呈する。１号土坑は、直径117cm、深さ27cmを測る。２号土坑は、直径95cm以上、深さ76cmである。ただし、断面観察により２号土坑は住居埋没後に掘削されたことが確認された。

ピットは大小合わせて７基が検出された。いずれも平面形態は円形を呈し、規模の大きいものは直径58～72cm、一方小さいのは直径16～28cmである。

遺物は、土師器の坏・甕・甑、須恵器の蓋・壺・甕、鉄滓、砥石、磨石がある。

【２号住居跡】

調査区の北端に位置する。

北半部が調査区域外にあるため、規模は不明である。確認できたのは、東西4.65m、南北4.86mの範囲である。平面形態は、方形ないし長方形であると考えられる。ただし南壁中央付近の84cm四方の範囲で地山が残されており、結果的に住居内部に張り出す格好となっていた。

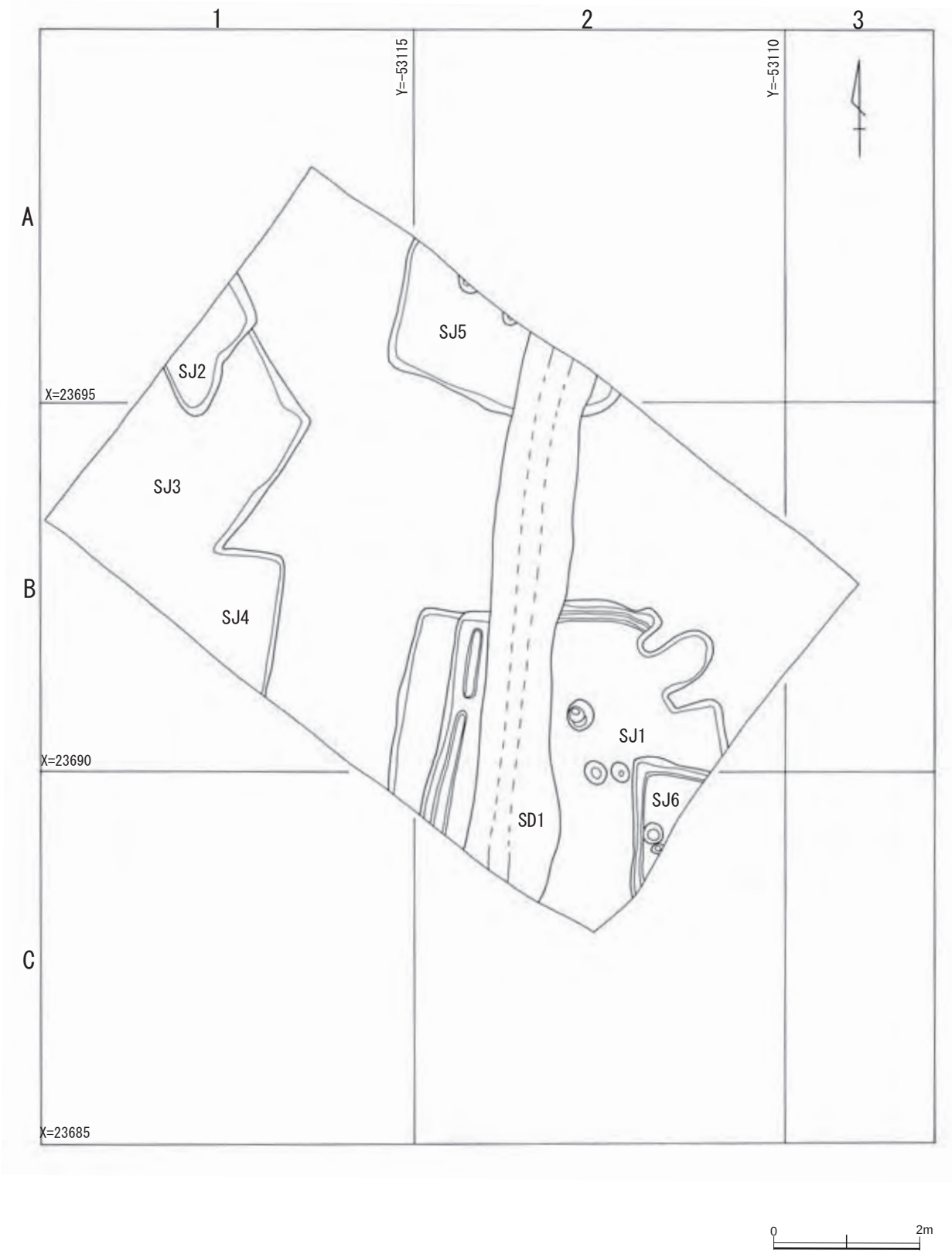
壁は角度をもって掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、25cmほどを測る。壁溝は、東壁と南壁で確認できたが、それ以外は不明である。

土坑は２基が検出され、いずれも不整円形を呈する。１号土坑は、直径100cm、深さ50cmを測る。２号土坑は北半部が調査区域外にあるため全容は不明であるが、直径78cm以上、深さ30cm以上である。

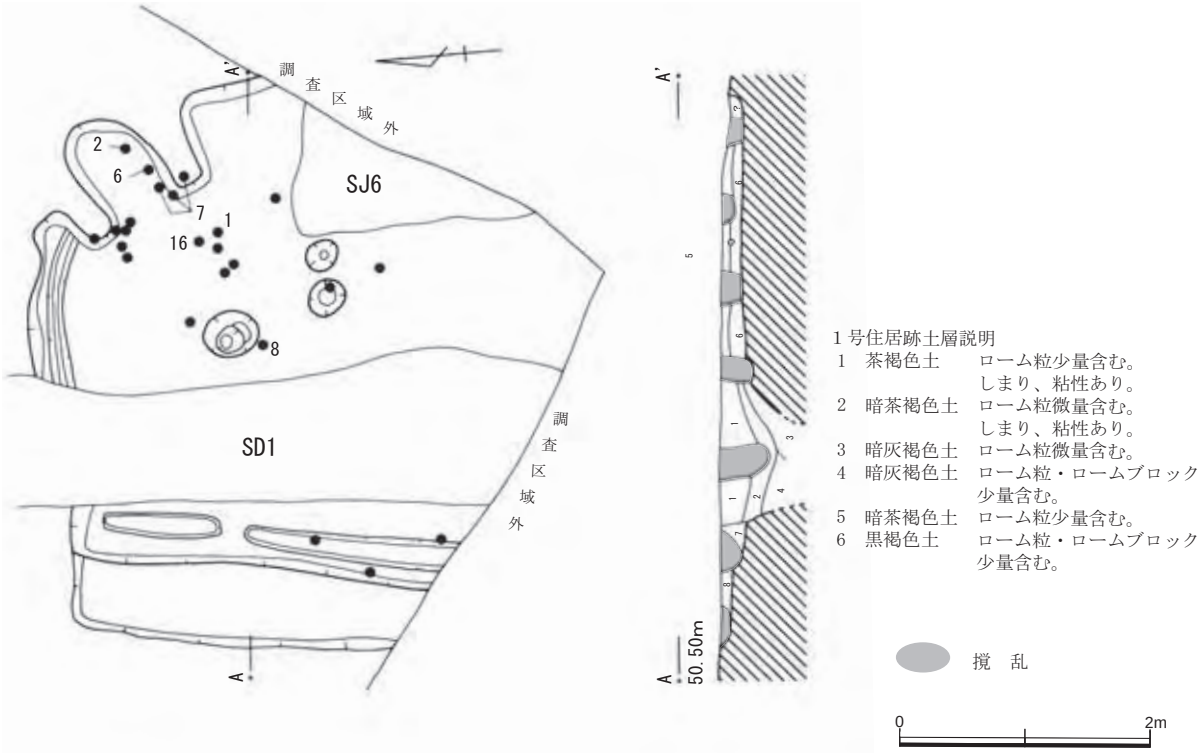
ピットは、南コーナーにおいて１基が検出された。直径49cm、深さ37cmである。

カマドは、調査範囲内では検出されなかった。

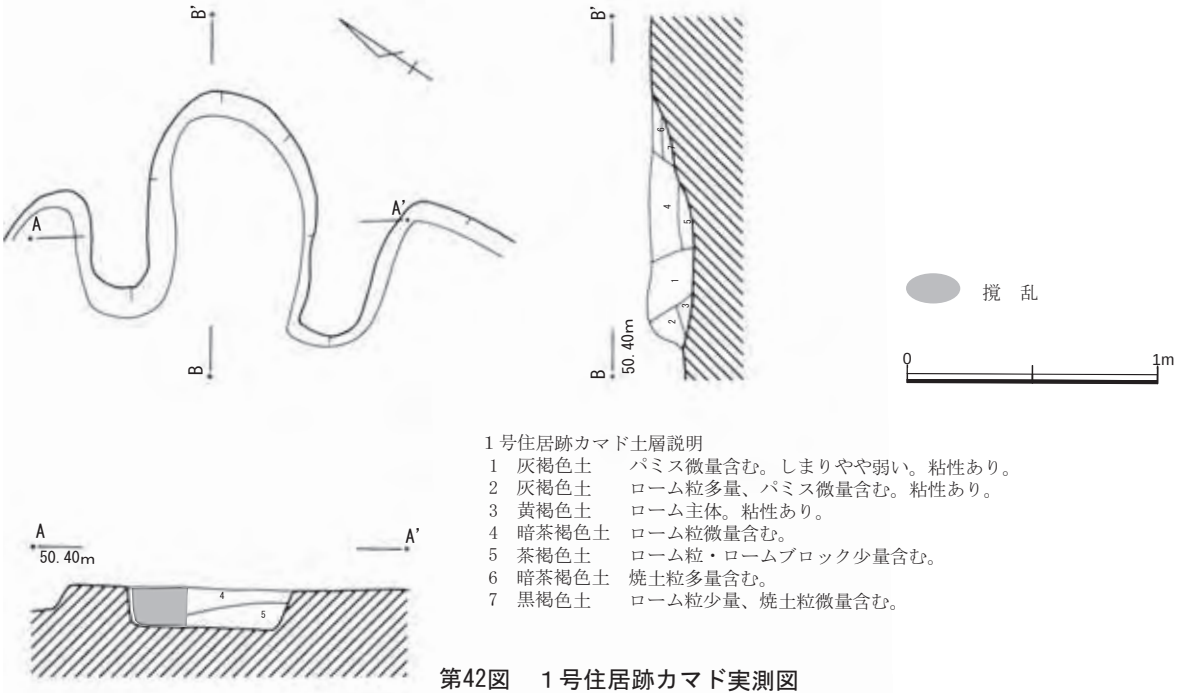
遺物は、土師器の坏・甕、須恵器甕がある。



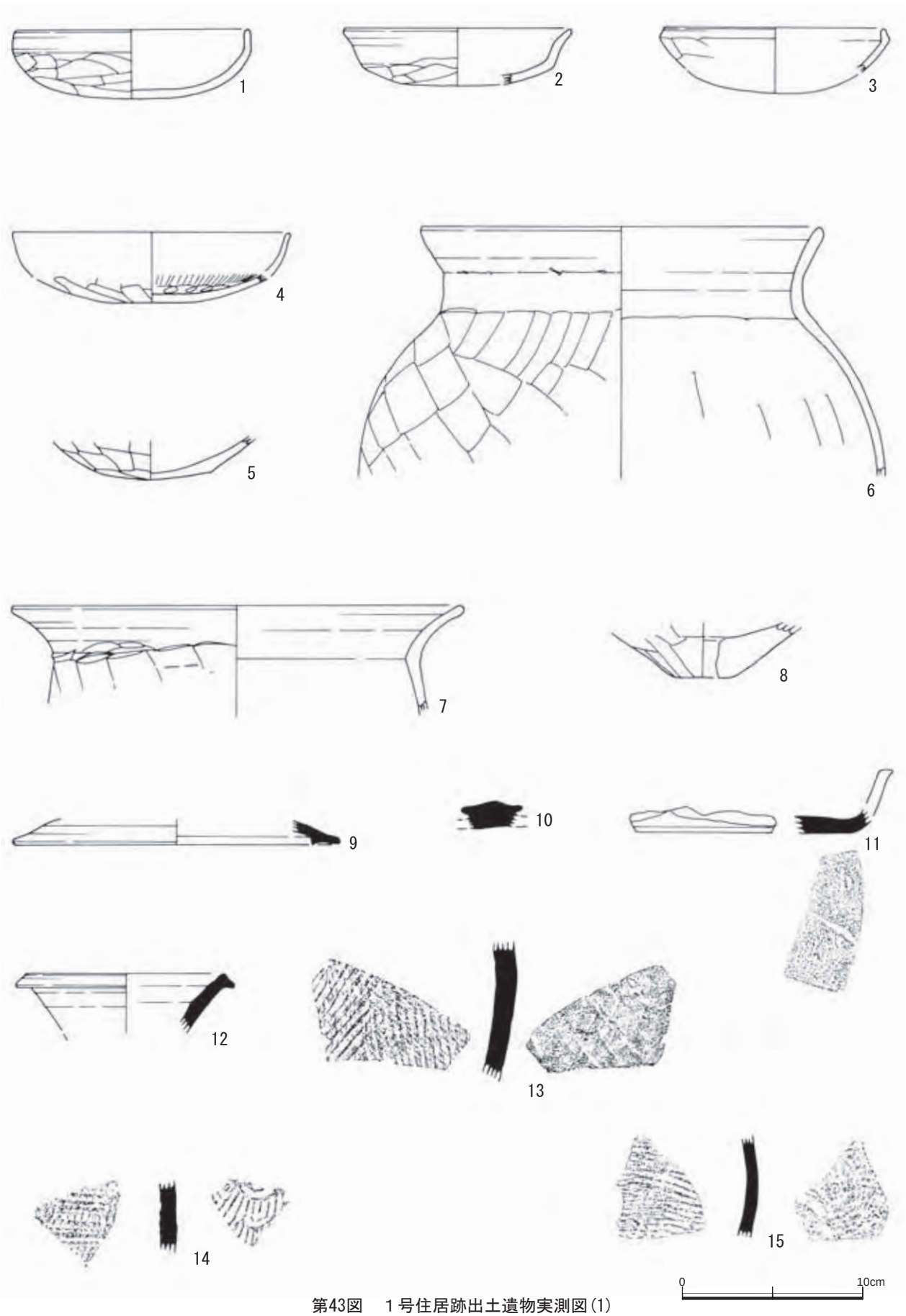
第40図　熊野遺跡124次調査全測図



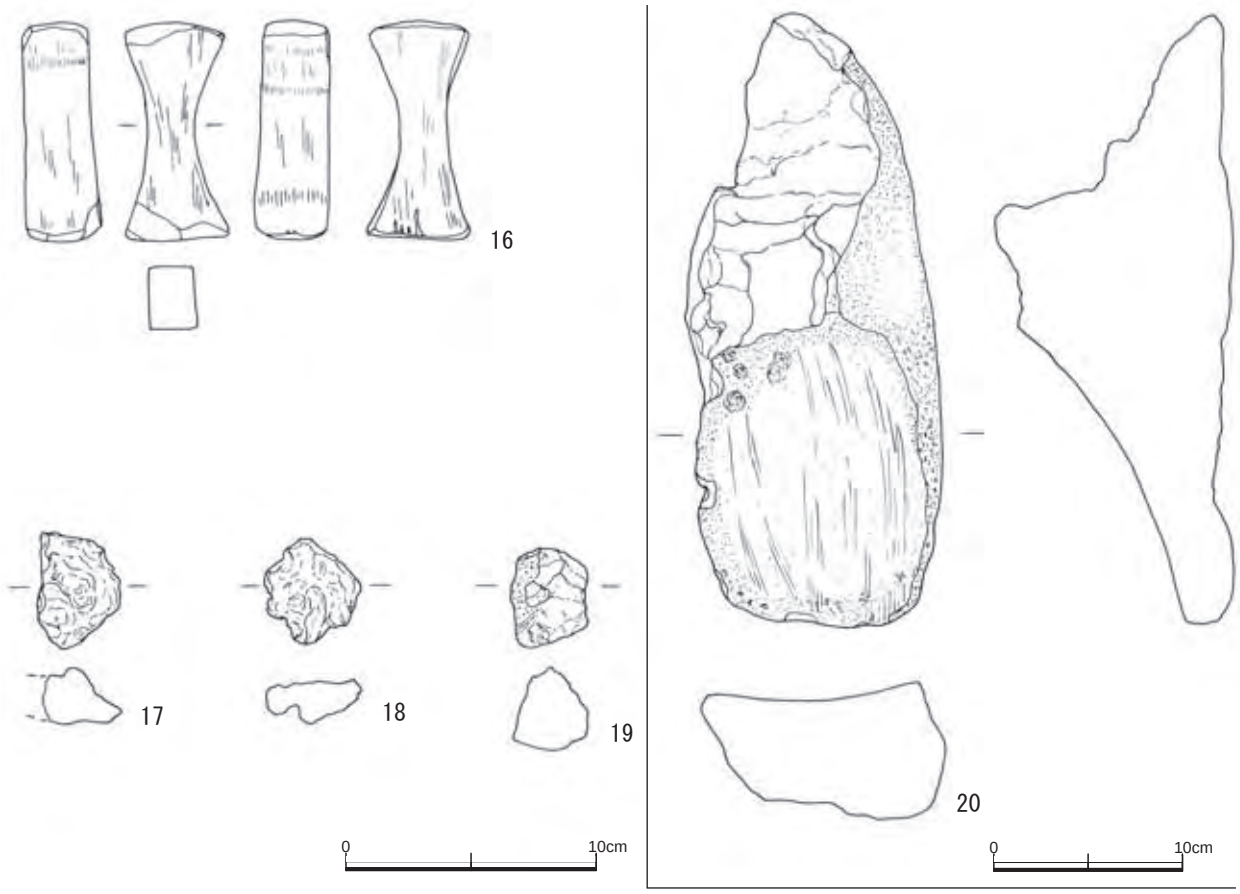
第41図　１号住居跡実測図及び遺物分布状況図



第42図　１号住居跡カマド実測図



第43図　１号住居跡出土遺物実測図(1)



第44図　１号住居跡出土遺物実測図(2)

１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備　　考
1	坏	(12.6)	3.8	-	暗橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母	80%	図示、内面油脂状黒斑
2	坏	(12.2)	(3.2)	-	暗灰橙色	やや悪	石英、角閃石	図示35%	図示、内外面に油脂状黒斑
3	坏	(11.9)	《2.5》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示13%	覆土
4	坏	-	《1.6》	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示55%	カマド一括、内面放射状暗文＋螺旋暗文
5	甕	-	《6.7》	-	橙～黒褐色	普通	微砂粒多	図示70%	覆土
6	甕	21.6	《13.8》	-	橙褐色	普通	微砂粒多	図示70%	図示
7	甕	(24.4)	《6.0》	-	橙褐色	普通	微砂粒多	図示20%	図示
8	甑	-	《3.1》	3.4	灰橙色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示55%	図示
9	須恵蓋	(17.8)	《1.4》	-	淡灰色	良好	長石、黒色粒	図示７％	覆土、末野
10	須恵蓋	-	-	-	灰橙色	不良	石英、長石、微砂粒	破片	覆土、磨滅あり
11	須恵盤	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、末野
12	須恵壺	(10.6)	《3.3》	-	淡灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示20%	覆土、末野
13	須恵甕	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、黒色粒	破片	覆土、外面平行叩き、末野
14	須恵甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石	破片	覆土、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野
15	須恵甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石、黒色粒	破片	覆土
16	砥石	長さ 8.7cm	幅 4.0cm	厚さ 2.9cm	重さ 117.3g	石質 凝灰岩			図示
17	鉄滓	長さ 4.6cm	幅 3.2cm	厚さ 2.2cm	重さ 40.8g	磁着度 中			覆土、発泡少量、重量感あり
18	鉄滓	長さ 4.3cm	幅 3.8cm	厚さ 1.7cm	重さ 32.3g	磁着度 弱			覆土、内面発泡
19	鉄滓	長さ 4.0cm	幅 3.0cm	厚さ 3.2cm	重さ 10.9g	磁着度 弱			覆土、内面発泡
20	磨石	長さ32.0cm	幅 13.2cm	厚さ12.2cm	重さ 2120g	石質 安山岩			図示

【３号住居跡】

調査区の東端に位置する。１号溝と重複し、切り合い関係から、１号溝の方が新しいことが確認されている。

東半部が調査区域外にあるため、全容は不明である。規模は、短軸で4.62m、長軸は5.50m以上を測る。主軸方位は、N-37°-Wである。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、40cmほどを測る。壁溝は、確認できた範囲では全周した。

カマドは、北壁の北東コーナー寄りで検出された。ただし燃焼部から煙道にかけて撹乱により破壊されている。袖は粘土の造り付けで、左袖94cm、右袖65cm以上を測る。両袖先端部の内側に、補強材として平坦な石材が使用されていた。また、燃焼部中央から支脚として用いられた円柱形の石も検出された。

土坑は２基が検出され、いずれも不整円形を呈する。１号土坑は、直径117cm、深さ27cmを測る。２号土坑は、直径95cm以上、深さ76cmである。ただし、断面観察により２号土坑は住居埋没後に掘削されたことが確認された。

ピットは大小合わせて７基が検出された。いずれも平面形態は円形を呈し、規模の大きいものは直径58～72cm、一方小さいのは直径16～28cmである。

遺物は、４号住居跡との一括であるが、土師器の坏・皿・小型甕、須恵器の長頸瓶・甕がある。

【４号住居跡】

調査区の東端に位置する。１号溝と重複し、切り合い関係から、１号溝の方が新しいことが確認されている。

東半部が調査区域外にあるため、全容は不明である。規模は、短軸で4.62m、長軸は5.50m以上を測る。主軸方位は、N-37°-Wである。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、40cmほどを測る。壁溝は、確認できた範囲では全周した。

カマドは、北壁の北東コーナー寄りで検出された。ただし燃焼部から煙道にかけて撹乱により破壊されている。袖は粘土の造り付けで、左袖94cm、右袖65cm以上を測る。両袖先端部の内側に、補強材として平坦な石材が使用されていた。また、燃焼部中央から支脚として用いられた円柱形の石も検出された。

土坑は２基が検出され、いずれも不整円形を呈する。１号土坑は、直径117cm、深さ27cmを測る。２号土坑は、直径95cm以上、深さ76cmである。ただし、断面観察により２号土坑は住居埋没後に掘削されたことが確認された。

ピットは大小合わせて７基が検出された。いずれも平面形態は円形を呈し、規模の大きいものは直径58～72cm、一方小さいのは直径16～28cmである。

遺物は、３号住居跡との一括であるが、土師器の坏・皿・小型甕、須恵器の長頸瓶・甕がある。

【５号住居跡】

調査区の北端に位置する。

北半部が調査区域外にあるため、規模は不明である。確認できたのは、東西4.65m、南北4.86mの範囲である。平面形態は、方形ないし長方形であると考えられる。ただし南壁中央付近の84cm四方の範囲で地山が残されており、結果的に住居内部に張出す格好となっていた。

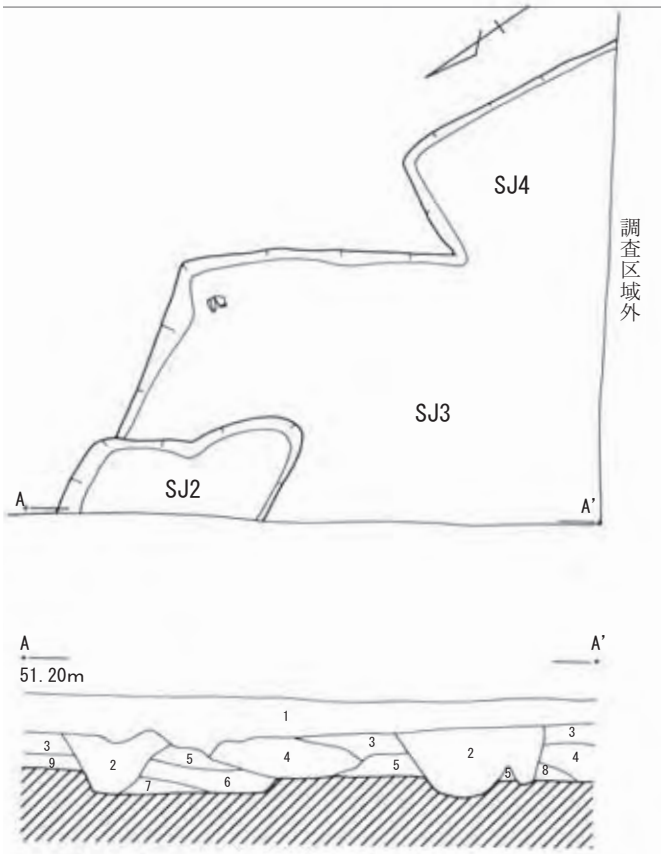
壁は角度をもって掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、25cmほどを測る。壁溝は、東壁と南壁で確認できたが、それ以外は不明である。

土坑は２基が検出され、いずれも不整円形を呈する。１号土坑は、直径100cm、深さ50cmを測る。２号土坑は北半部が調査区域外にあるため全容は不明であるが、直径78cm以上、深さ30cm以上である。

ピットは、南コーナーにおいて１基が検出された。直径49cm、深さ37cmである。

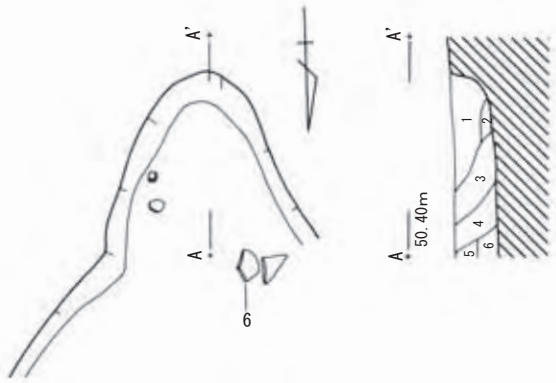
カマドは、調査範囲内では検出されなかった。

遺物は、土師器の皿と甕がある。



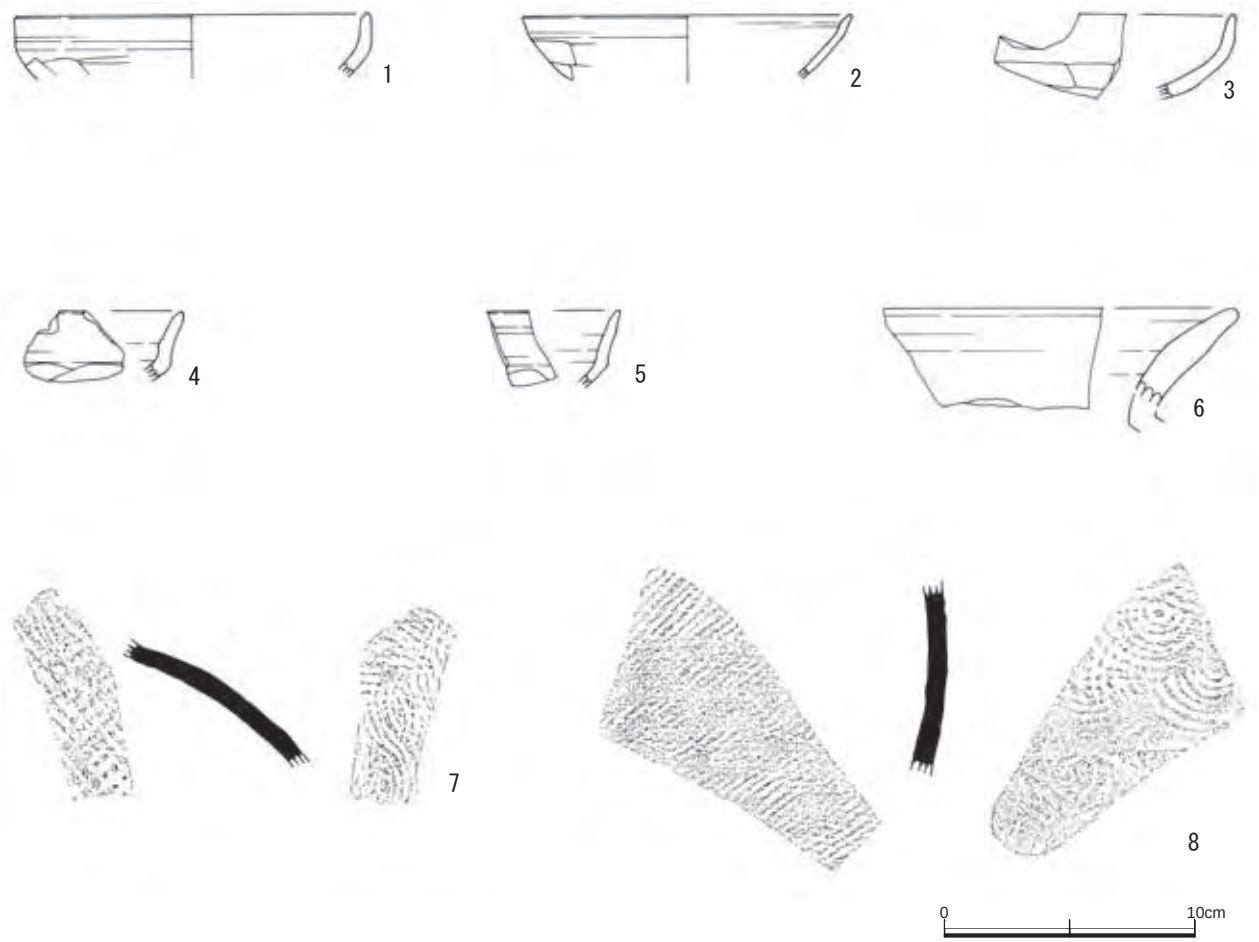
２・３号住居跡土層説明
1　暗褐色土　　Ａ軽石少量含む。しまり、粘性弱。
2　暗褐色土　　１層に類似するが、ロームブロック少量含む。粘性弱。
3　暗褐色土　　Ａ軽石微量含む。
4　茶褐色土　　Ａ軽石・ロームブロック微量含む。
5　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量含む。
6　暗茶褐色土　ローム粒少量、ロームブロック・焼土粒微量含む。
7　黒褐色土　　ローム粒微量含む。
8　暗茶褐色土　ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
9　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック少量含む。

第45図　２・３・４号住居跡実測図



２号住居跡カマド土層説明
1　灰褐色土　粘土ブロックと焼土粒多量含む。粘性強。
2　灰褐色土　ローム粒微量含む。粘性あり。
3　灰褐色土　焼土粒少量、ローム粒微量含む。
4　灰褐色土　焼土粒・粘土粒・ローム粒微量含む。

第46図　２号住居跡カマド実測図



第47図　２号住居跡出土遺物実測図

２号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(13.8)	《2.6》	-	暗灰橙褐色	普通	石英、白色粒、(精良)	図示20%	カマド一括、内面油脂状黒斑
2	坏	(12.8)	《2.6》	-	橙褐色	普通	石英、白色粒、白色粒	図示７%	カマド一括
3	坏	-	-	-	暗褐色	やや悪	石英、角閃石	破片	カマド一括
4	坏	-	-	-	にぶい橙褐色	やや悪	石英、雲母、(精良)	破片	カマド一括
5	坏	-	-	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、(精良)	破片	カマド一括
6	甕	-	-	-	灰橙褐色	普通	石英、雲母、角閃石、赤色粒	破片	カマド図示
7	須恵甕	-	-	-	灰褐色	良好	石英、長石	破片	カマド一括、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野
8	須恵甕	-	-	-	暗灰色	良好	石英、長石	破片	カマド一括、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野

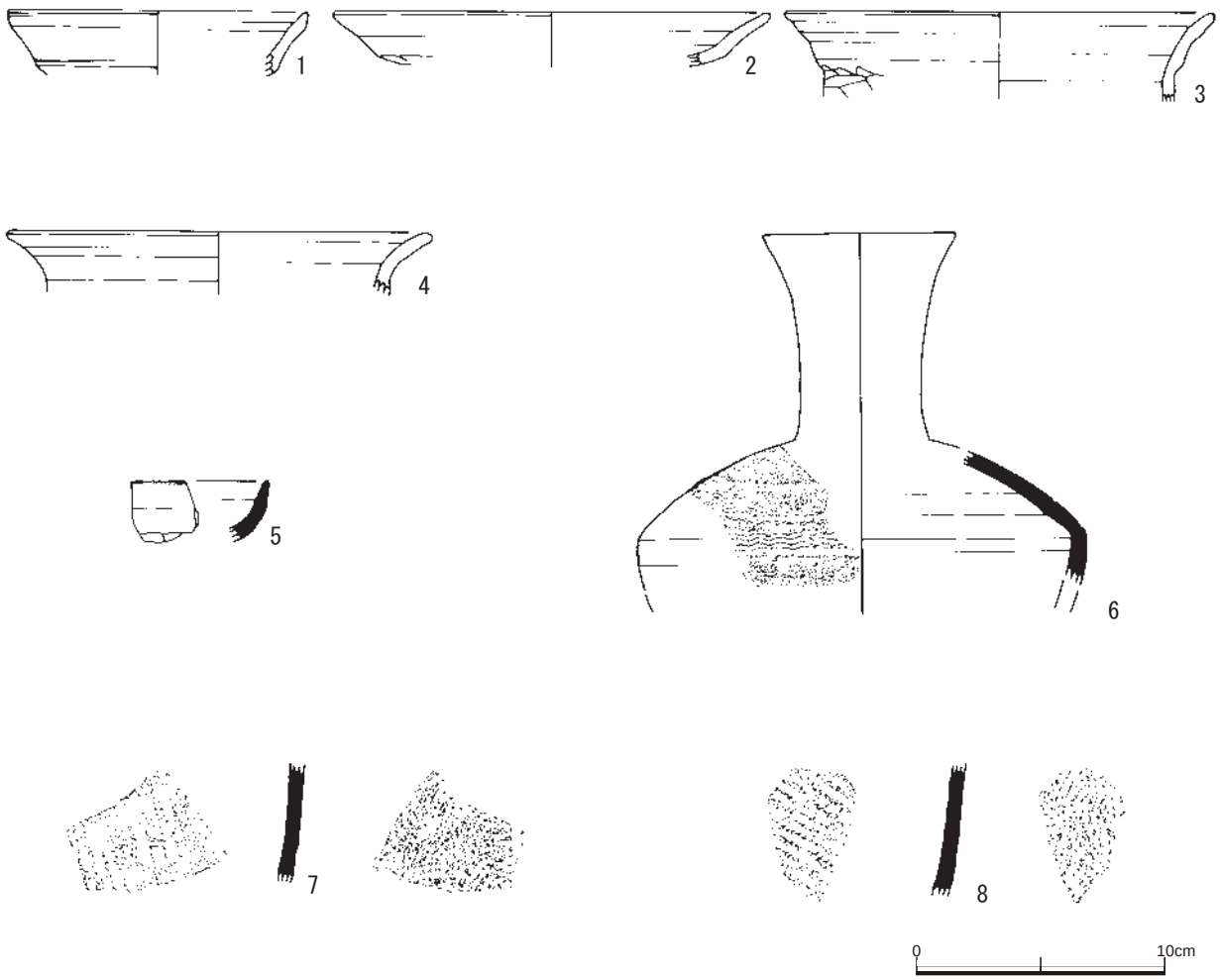
【６号住居跡】

調査区の南東に位置する。１号住居跡と重複し、切り合い関係から本遺構の方が新しいことが判明している。

遺構の南部及び東部が調査区域外にあるため、規模等は不明である。平面形態は、長方形ないし正方形を呈すると想定される。確認されたのは、198cm×104cmの範囲である。

床面は平坦で、確認面からの深さは５cmと浅い。床面には周溝とピット２基が存在する。周溝は幅13～25cm、深さ６cmを測る。ピットは、直径22cmと30cm、深さは18cmである。

遺物は、出土しなかった。



第48図　３・４号住居跡出土遺物実測図

３、４号住居跡出土遺物観察表

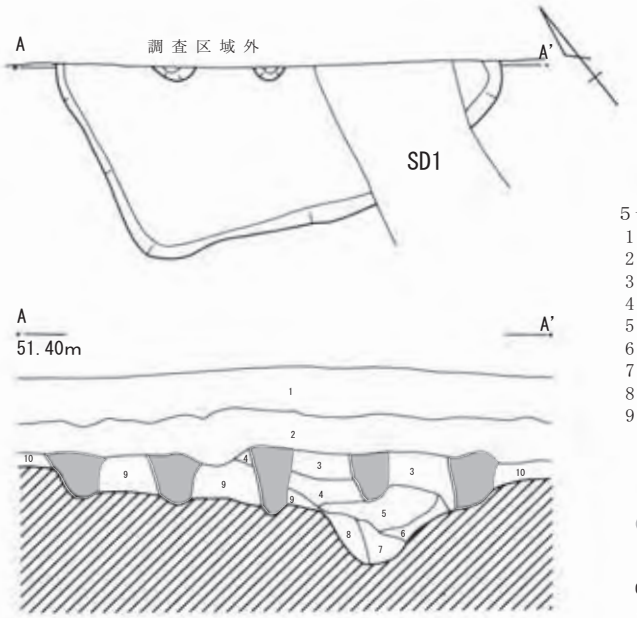
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(11.9)	《2.6》	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、白色粒	図示10%	３、４住一括
2	皿	(17.2)	《2.2》	-	明橙色	普通	石英、角閃石、パミス、砂粒	図示７%	３、４住一括、磨滅あり
3	小形甕	(17.0)	《3.6》	-	淡橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示７%	３、４住一括
4	小形甕	(16.7)	《2.5》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示10%	３住図示
5	須恵坏	-	-	-	灰褐色	不良	石英、長石、角閃石、片岩	破片	３、４住一括、末野
6	須恵長頸瓶	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示10%	３住図示、末野
7	須恵甕	-	-	-	暗褐色	良好	石英、長石	破片	３、４住一括、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野
8	須恵甕	-	-	-	暗灰色	良好	長石	破片	３、４住一括、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野

【１号溝】

調査区のほぼ中央を東西に走行する。５号住居跡と重複し、切り合い関係から本遺構の方が新しいことが判明している。

溝の両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。確認できたのは、長さ7.1mの範囲である。幅は最大で110cmを測り、確認面からの深さは61cmである。壁は角度をもち掘り込まれ、断面形態はＶ字状を示す。主軸方位は、N-6°-Eを示す。

遺物は、多様である。土師器では、１・３の坏、２の皿、９の高台埦、11の甕がある。須恵器では、18の高盤、19～24の甕、灰釉では８の小皿、10の鉢、12の長頸瓶、鉄釉小皿などがある。このほかに、13～15の土鍋、16の焙烙、17の擂鉢がある。25は軒丸瓦、26は軒平瓦、27・28は平瓦である。小鍛冶関連の遺物もあり、29は羽口、30・37～39は鉄滓、32～36は椀形滓、40・41は炉壁、43は砥石である。



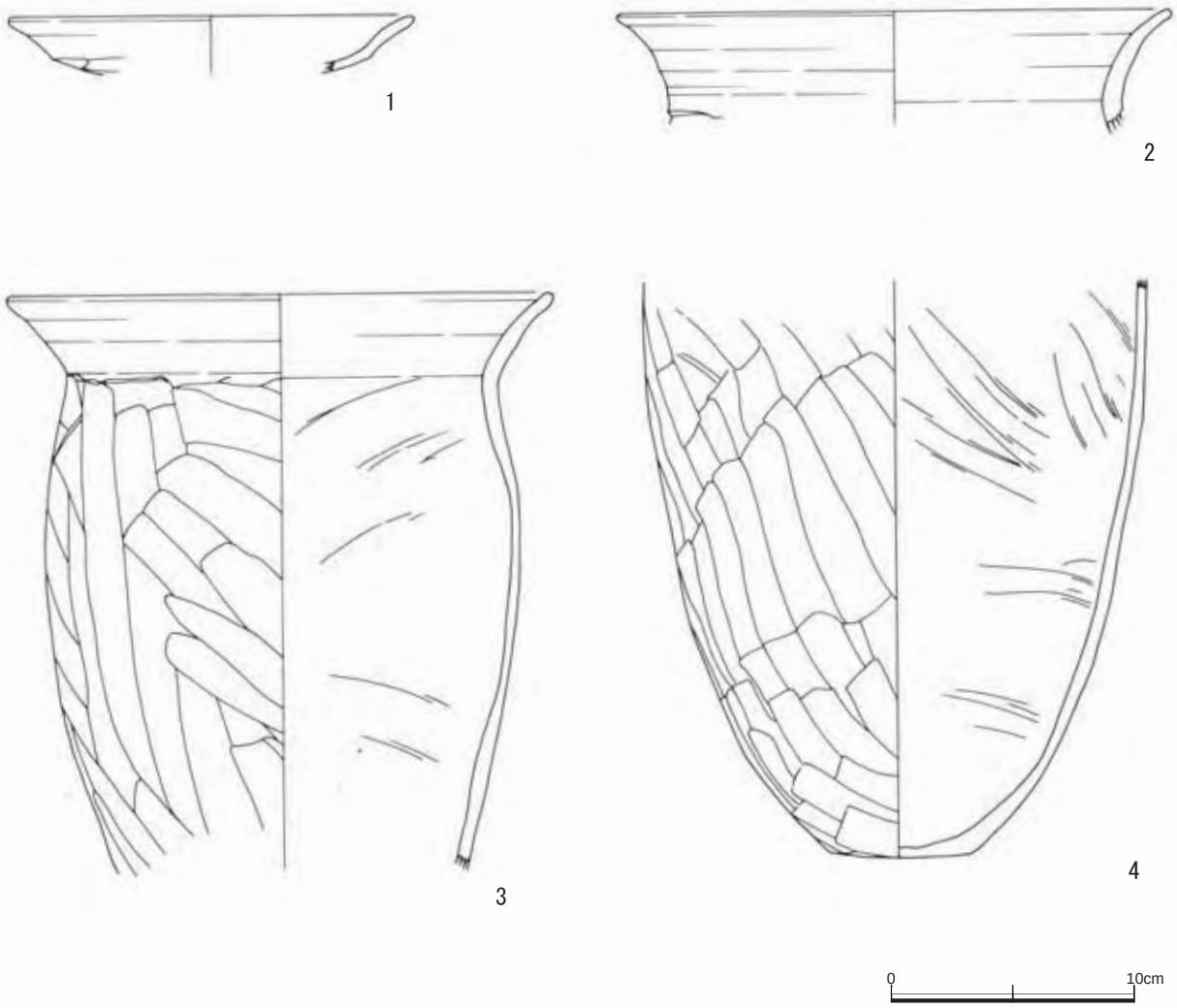
５号住居跡土層説明

1　暗褐色土　　A軽石少量含む。しまり、粘性弱い。
2　黒灰色土　　A軽石微量含む。しまり、粘性あり。
3　褐色土　　灰色粘土ブロック少量含む。しまり、粘性あり。
4　褐色土　　ローム粒少量、ロームブロック微量含む。粘性あり。
5　褐色土　　ローム粒・ロームブロック少量含む。粘性あり。
6　黒褐色土　　ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
7　暗茶褐色土　ローム粒微量含む。
8　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック微量含む。
9　暗茶褐色土　ローム粒少量・ロームブロック・パミス微量含む。

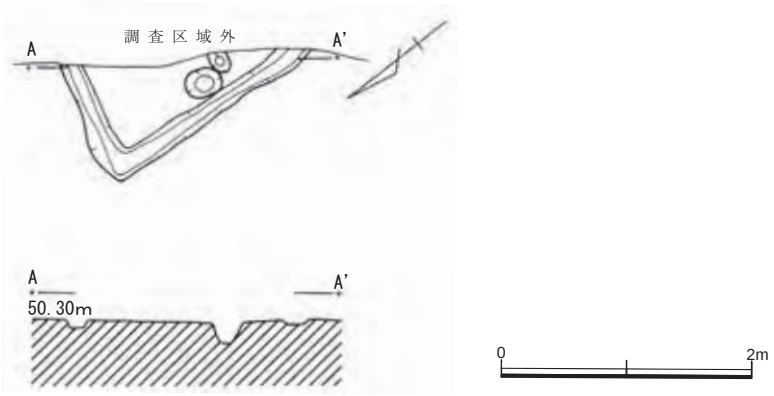
撹　乱

0　2m

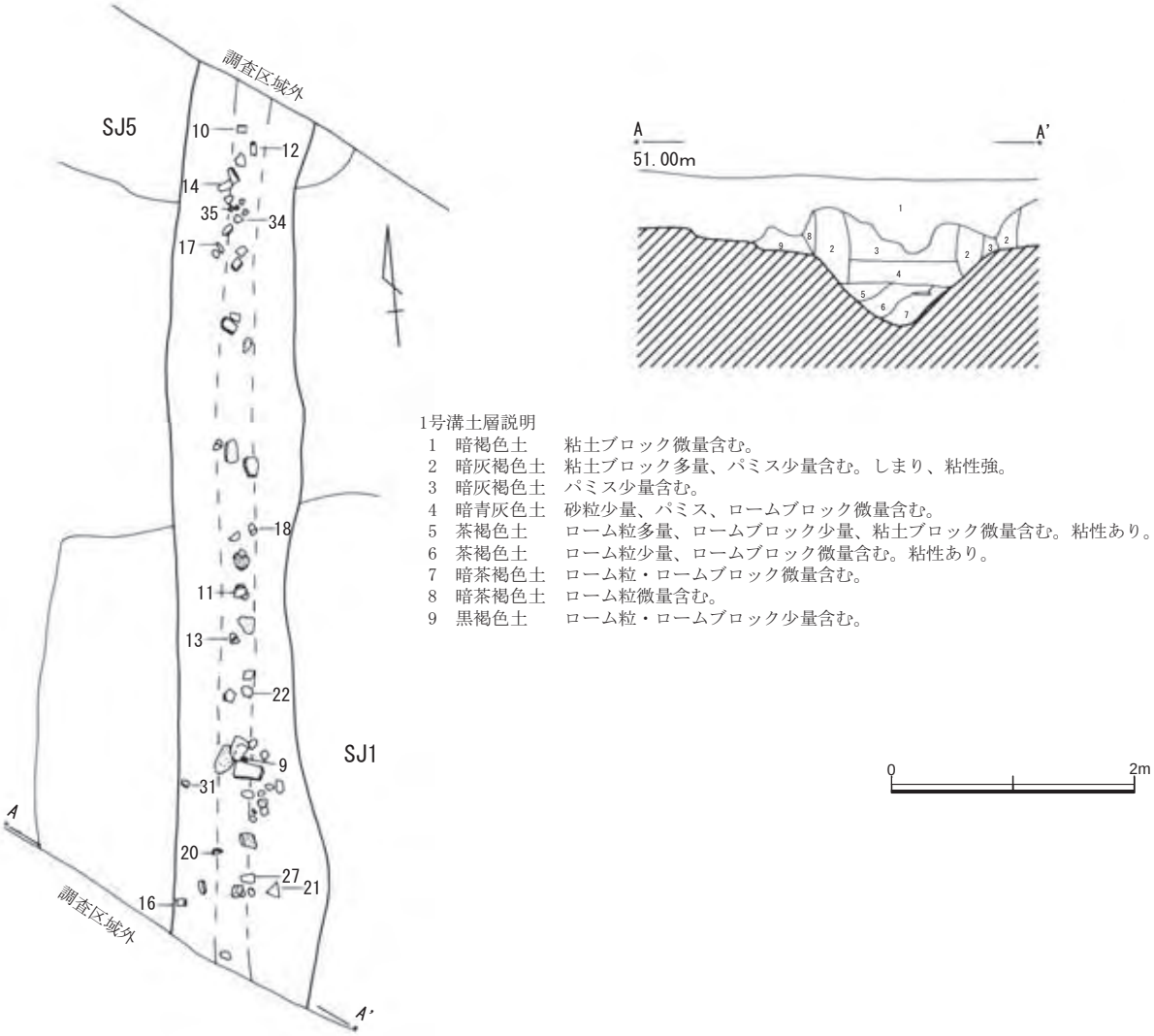
第49図　５号住居跡実測図



第50図　５号住居跡出土遺物実測図



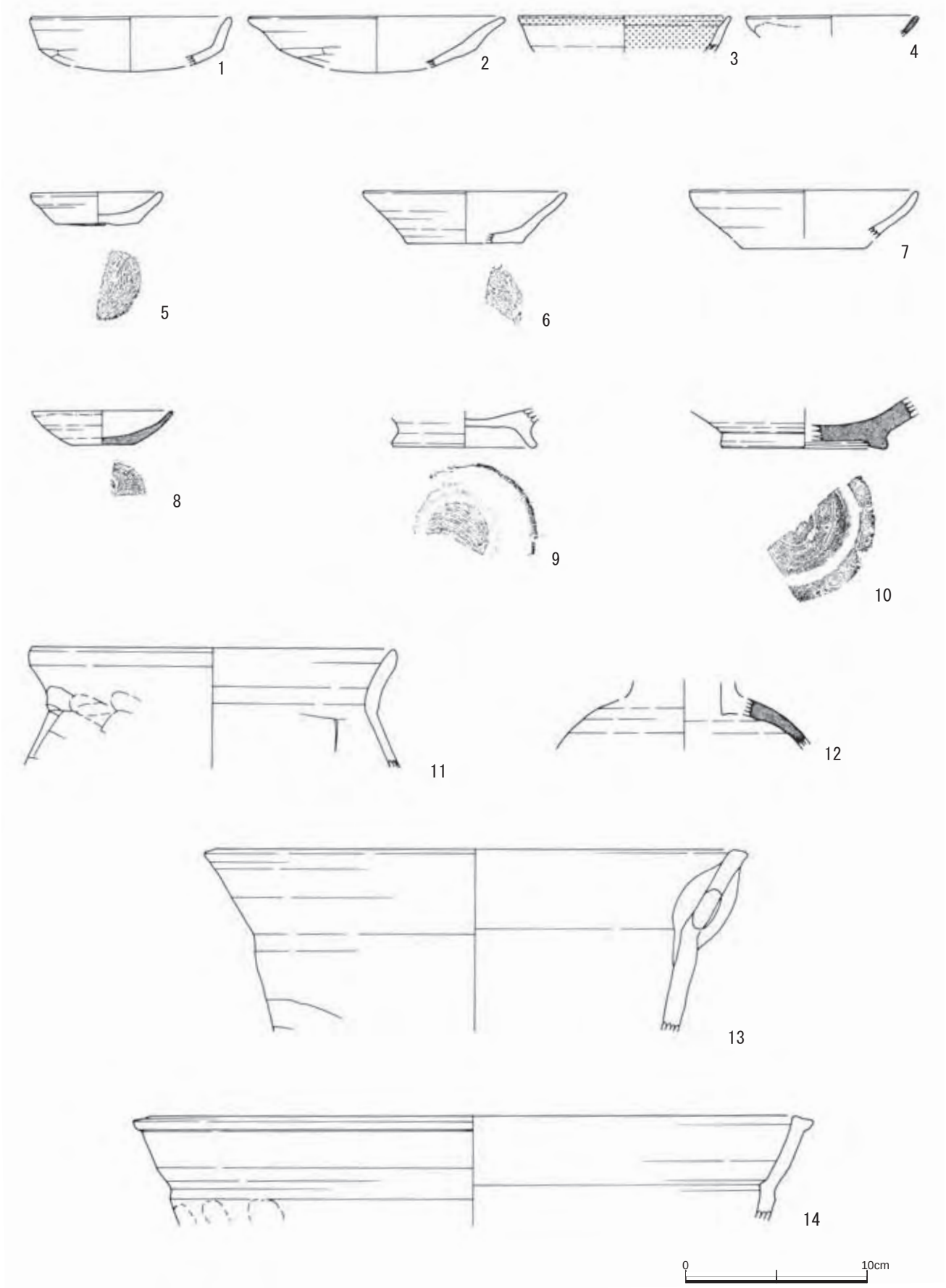
第51図　６号住居跡実測図



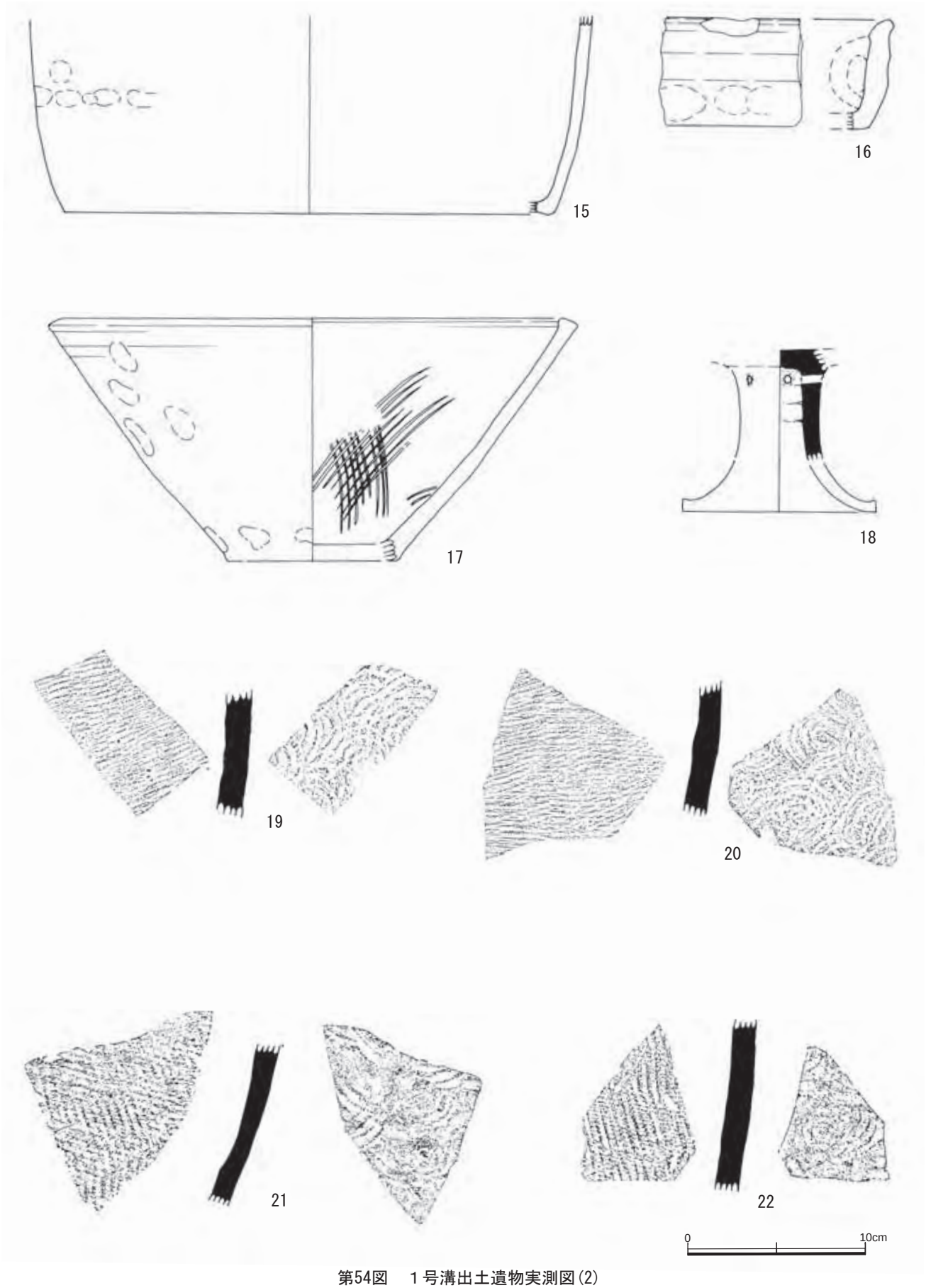
1号溝土層説明

1	暗褐色土	粘土ブロック微量含む。
2	暗灰褐色土	粘土ブロック多量、パミス少量含む。しまり、粘性強。
3	暗灰褐色土	パミス少量含む。
4	暗青灰色土	砂粒少量、パミス、ロームブロック微量含む。
5	茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量、粘土ブロック微量含む。粘性あり。
6	茶褐色土	ローム粒少量、ロームブロック微量含む。粘性あり。
7	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロック微量含む。
8	暗茶褐色土	ローム粒微量含む。
9	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック少量含む。

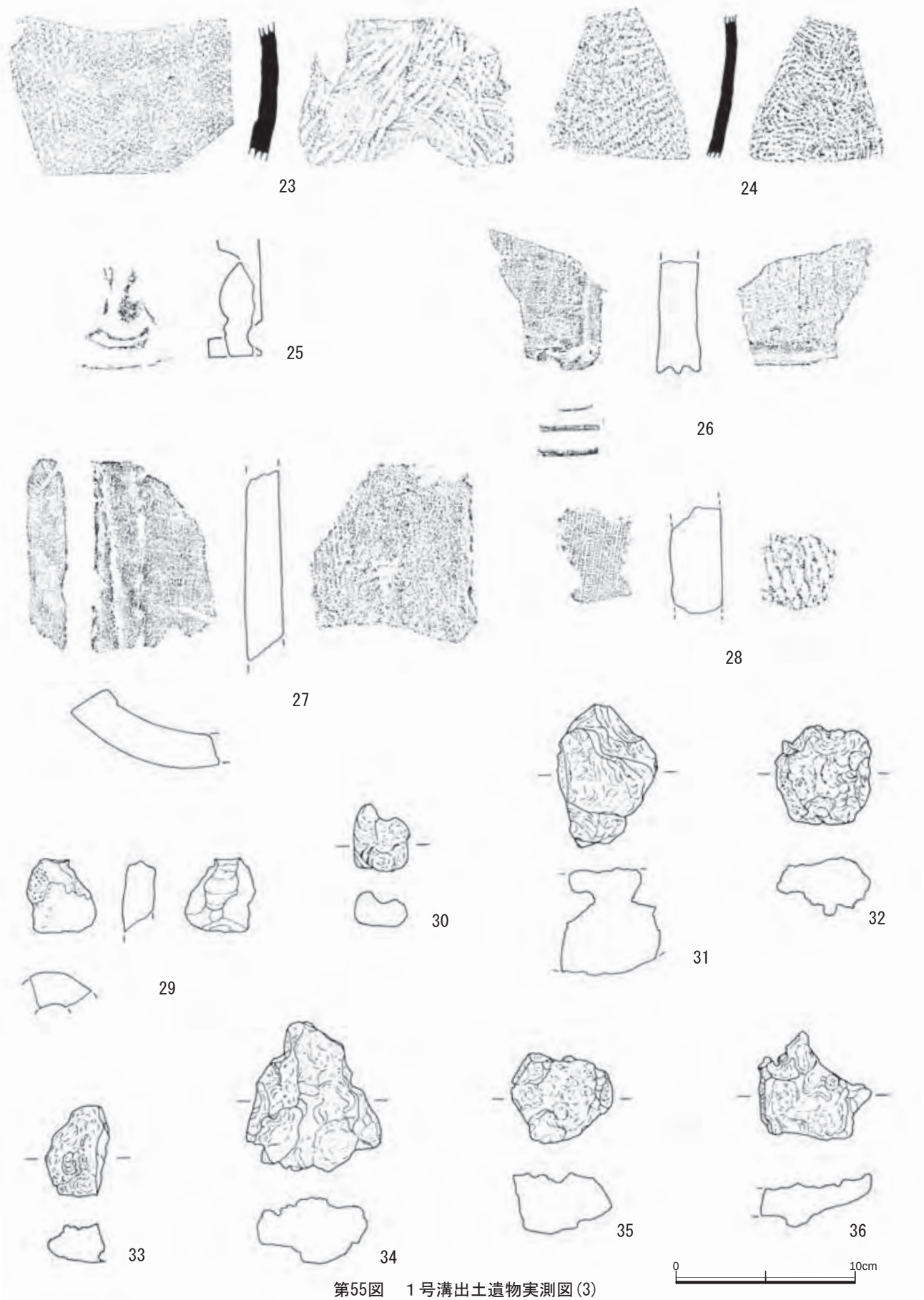
第52図　１号溝実測図



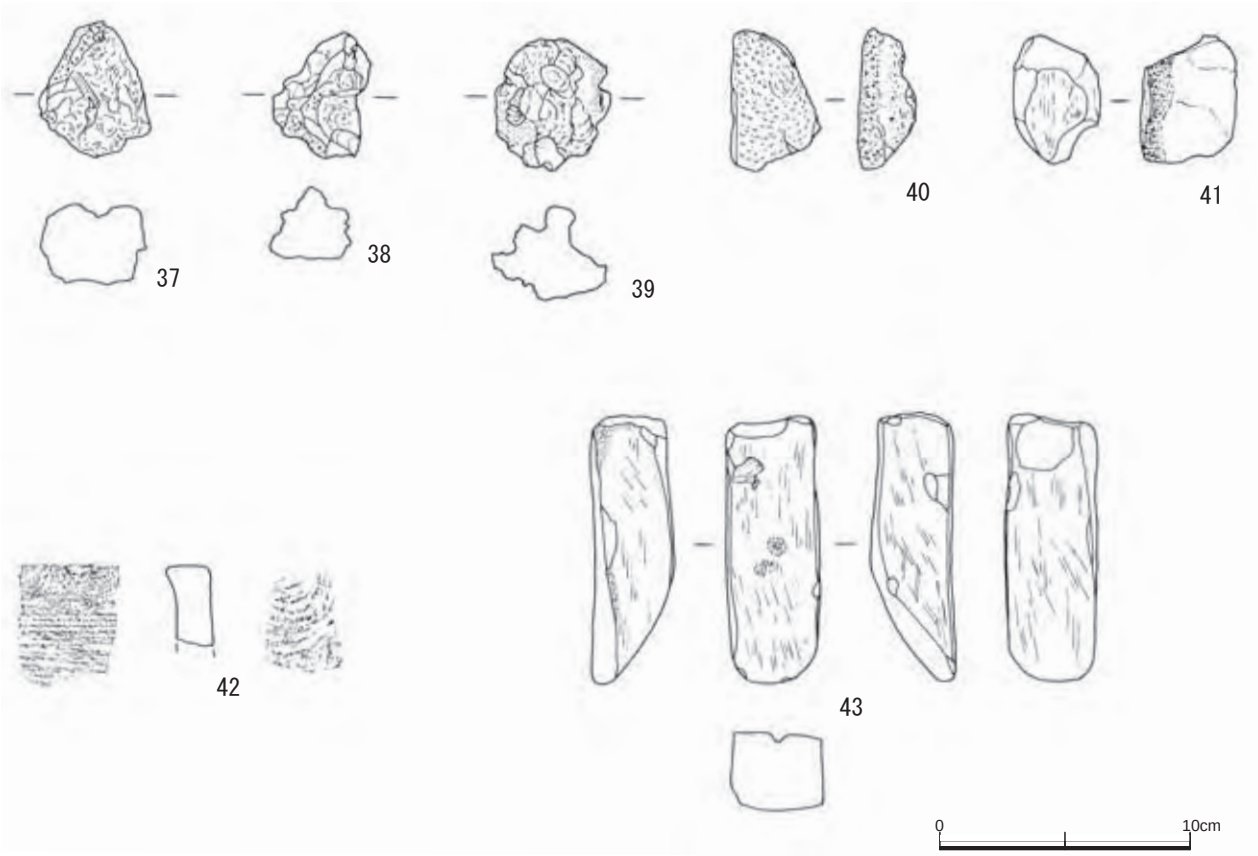
第53図　１号溝出土遺物実測図(1)



第54図　１号溝出土遺物実測図(2)



第55図　１号溝出土遺物実測図(3)



第56図　１号溝出土遺物実測図(4)

第１号溝跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(10.7)	(3.0)	-	明橙色	普通	石英、角閃石	図示15%	覆土、磨滅あり
2	皿	(13.7)	(3.1)	-	灰橙褐色	普通	石英、角閃石	図示20%	覆土、内外面に油脂状黒斑
3	坏	(13.3)	《2.0》	-	暗赤褐色	良好	石英、長石、チャート、海綿骨針	図示７%	覆土、内外面赤彩、比企型坏
4	鉄釉小皿	(9.2)	《1.2》	-	灰茶色	良好	白色粒、(精良)	図示10%	覆土、瀬戸､美濃系
5	かわらけ	(7.0)	1.8	(4.4)	灰橙褐色	普通	石英、雲母、角閃石	45%	覆土、底部回転糸切り未調整板状圧痕あり
6	かわらけ	(10.8)	2.9	(6.3)	にぶい橙褐色	普通	石英、長石、角閃石、片岩、微砂粒	図示20%	覆土、底部回転糸切り未調整
7	かわらけ	(12.2)	《2.7》	-	にぶい灰橙色	普通	石英、雲母、(精良)	図示15%	覆土
8	灰釉小皿	(7.5)	1.9	(3.2)	淡灰色	良好	黒色粒	25%	覆土、底部回転糸切り未調整瀬戸、美濃系
9	高台埦	-	《2.1》	(7.5)	灰橙褐色	普通	石英、角閃石	図示45%	図示、内面黒色処理、ロクロ土師器
10	灰釉鉢	-	《2.9》	(8.8)	乳白色	良好	精良	図示35%	図示､瀬戸、美濃系
11	甕	(19.6)	《6.5》	-	橙褐色	普通	石英、雲母	図示15%	図示
12	灰釉長頸瓶	-	-	-	淡緑色	良好	長石、黒色粒	図示25%	図示、東海産
13	土鍋	(29.1)	《10.0》	-	灰黒色	普通	長石、雲母	図示15%	図示、在地産、瓦質
14	土鍋	(34.8)	《5.9》	-	灰黒褐色	普通	長石、雲母	図示10%	図示、在地産、瓦質
15	土鍋	-	《11.2》	(27.0)	灰黒色	普通	石英、雲母、砂粒	図示15%	覆土、在地産、瓦質
16	焙烙	-	-	-	黒褐色	やや悪	石英、角閃石、長石、赤色粒	破片	図示、在地産、瓦質
17	擂鉢	(27.6)	13.6	(9.6)	明灰色	普通	石英、長石、角閃石、微砂粒	図示15%	図示、在地産、瓦質、擂り目８条
18	須恵高盤	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、黒色粒	破片	図示、脚上部に４ヶ所の穿孔あり、末野
19	須恵甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石	破片	覆土、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野
20	須恵甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石	破片	図示、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野
21	須恵甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	破片	図示、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野
22	須恵甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石	破片	図示、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野
23	須恵甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	破片	図示、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野
24	須恵甕	-	-	-	灰茶褐色	良好	石英、長石	破片	覆土、外面平行叩き、内面青海波叩き、末野

第１号溝跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
25	軒丸瓦	-	-	-	暗赤褐色	普通	石英、長石	破片	覆土、直立縁、複弁八葉、末野
26	軒平瓦	-	-	-	暗灰赤褐色	良好	石英、長石	破片	覆土、凸面ナデ、凹面布目、型挽き三重弧、末野
27	平瓦	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、やや軟質	破片	図示、凸面縄＋ナデ、凹面布目、弱い模骨、磨滅、末野
28	平瓦	-	-	-	暗橙褐色	やや悪	石英、長石、片岩、細礫	破片	覆土、凸面縄、凹面布目、末野
29	羽口	長さ 4.1cm	幅　3.9cm	厚さ 1.8cm	重さ　27.4g	磁着度 中	石英、長石、細礫	破片	覆土、先端部に鉄分熔着
30	鉄滓	長さ 3.7cm	幅　3.1cm	厚さ 1.9cm	重さ　24.2g	磁着度 中			覆土、茶褐色で全体に錆び、亀裂あり
31	椀形滓	長径 7.9cm	短径 5.6cm	厚さ 5.9cm	重さ 264.0g	磁着度 弱			図示、上面流動状、下面縮緬状、重量感あり
32	椀形滓	長径 5.5cm	短径 5.2cm	厚さ 3.2cm	重さ　90.9g	磁着度 弱			覆土、表面縮緬状
33	椀形滓	長径 5.0cm	短径 3.5cm	厚さ 2.2cm	重さ　46.1g	磁着度 弱			覆土
34	椀形滓	長径 8.3cm	短径 7.5cm	厚さ 3.7cm	重さ 173.7g	磁着度 弱			図示、表面発泡、下面縮緬状
35	椀形滓	長径 5.6cm	短径 5.0cm	厚さ 3.4cm	重さ 101.9g	磁着度 中			図示
36	椀形滓	長径 6.2cm	短径 6.0cm	厚さ 2.4cm	重さ　66.9g	磁着度 弱			覆土
37	鉄滓	長さ 5.4cm	幅　4.4cm	厚さ 3.2cm	重さ　30.3g	磁着度 弱			覆土、全体的に発泡、軽い
38	鉄滓	長さ 5.0cm	幅　3.5cm	厚さ 2.9cm	重さ　40.9g	磁着度 弱			覆土、全体的に発泡
39	鉄滓	長さ 5.3cm	幅　4.6cm	厚さ 3.8cm	重さ　55.5g	磁着度 弱			覆土、全体的に発泡
40	炉壁	長さ 5.6cm	幅　3.5cm	厚さ 2.3cm	重さ　24.7g	磁着度 中	スサ	破片	覆土、表面発泡し還元化、鉄分熔着
41	炉壁	長さ 5.1cm	幅　3.4cm	厚さ 3.8cm	重さ　49.0g	磁着度 弱	石英、長石、スサ	破片	覆土、表面発泡し還元化、鉄分熔着
42	不明	-	-	-	明橙色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	破片	覆土、外面ハケメ、青海波叩き
43	砥石	長さ10.7cm	幅　3.7cm	厚さ 3.2cm	重さ 178.2g	石質 凝灰岩			覆土、中央部に円形の窪みあり

Ⅳ　発掘調査のまとめ

熊野遺跡は、榛沢郡家正倉跡と推定される中宿遺跡の南方約250mに位置する。現在までに167地点において発掘調査が実施されてきた。131次調査における１号・２号住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、遺跡の成立は７世紀第３四半期と考えられる。さらに、１次調査で検出された７間×３間の掘立柱建物跡をはじめとする大規模建物群等の存在から、初期評家の性格が与えられている。

この131次調査区の南東約80mには、瑪瑙原石を出土した連結住居が存在する。更に、その50m先には、７世紀後半～末葉の土器を多量に出土した47次調査２号住居跡がある。土器の量・器種ともに豊富で、盤・脚付盤・円面硯が多いことから、饗宴や行政実務が行われた可能性が指摘されている。

102次調査は、この２地点の中間に位置する。131次調査でも検出された掘立柱建物跡と大溝の肩が検出された。掘立柱建物跡は、２間×２間の側柱建物であり、131調査時に出土した土師器坏から７世紀後葉の時期と考えられる。大溝は幅3.5～4.3m、深さ0.75mを測るが、周辺における調査例は多いにもかかわらず流路は判明していない。平安末期には埋没していた状況が確認されている。

122次調査は、この南西400mの地点において実施された。２号住居跡は、出土土器などから７世紀前半から中葉の時期が想定される。熊野遺跡内では未検出であった初期評家成立以前の住居跡であり、注目される。現在、調査地の東隣を細田堀川が北流するが、耕地整理以前には緩やかな谷筋を小川が蛇行しながら流れていたという。比較的平坦な熊野遺跡内における唯一の谷筋であり、この谷筋をはさんだ東西で遺跡の性格が異なる可能性も指摘される。

また、124次調査は、８世紀前半に建立されたと考えられる岡廃寺の南西に接する。岡廃寺の伽藍配置等は確認されていないが、掘込地業を伴う基壇建物であったことが判明している。今回の調査の結果、中世の溝からではあるが、軒平瓦や平瓦が出土しており、岡廃寺関連遺物として注目される。また須恵器高盤や灰釉の小皿・鉢・長頸瓶などの出土も特筆される。

118次調査では、世紀の井戸を検出したほかは、中近世の土坑を主体とした。

107次調査は、東西に走行する近世の溝跡を検出したのみであった。この溝は、230m以上に直線的に延びることが、周辺の調査結果から判明している。

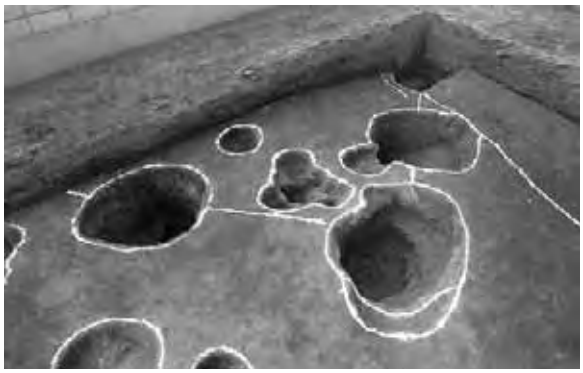
第 57 図　熊野遺跡全体遺構配置図

第58図　熊野遺跡（区画整理地内）遺構配置図

写 真 図 版

図版 1

熊野遺跡108次全景

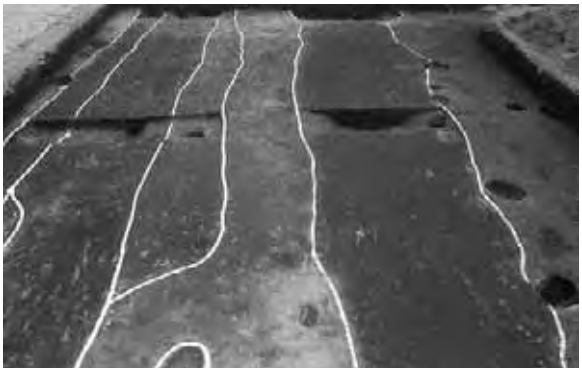

１号掘立柱建物跡(1)

１号掘立柱建物跡(2)

１号溝埋没状況

１号土坑

２号土坑


熊野遺跡107次全景（西から）

107次全景（東から）

図版２

熊野遺跡118次全景（東方より）

全景（西方より）

１号井戸跡

１号土坑

２号・３号土坑

４号土坑

熊野遺跡122次全景（西方より）

全景（東方より）

図版 3

1 号住居跡

1 号住居跡カマド遺物出土状況

1 号住居跡カマド支脚検出状況

1 号住居跡カマド補強材検出状況

2 号住居跡

3 号住居跡

4 号住居跡

1 号土坑

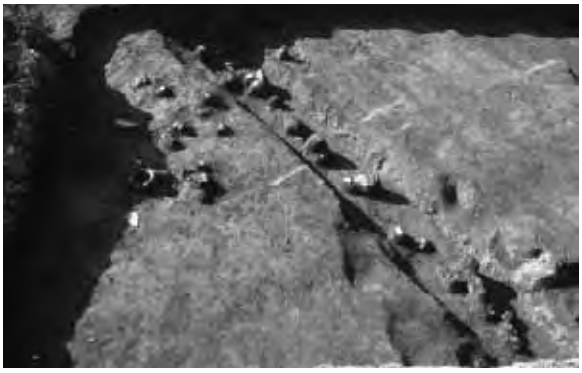
図版４

熊野遺跡122次２・４号土坑

ピット群

熊野遺跡124次全景

１号住居跡



１号住居跡・１号溝遺物出土状況

１号住居跡遺物出土状況

２・３・４号住居跡

１号溝跡

熊野遺跡107次１号溝跡No.１～６

３号溝跡No.１～３

熊野遺跡118次１号井戸跡No.１～６

１・３号溝跡No.１・２

１・４号土坑No.１～３

熊野遺跡122次１号住居跡No.10

１号住居跡No.11

１号住居跡No.16

１号住居跡No.20

図版 6

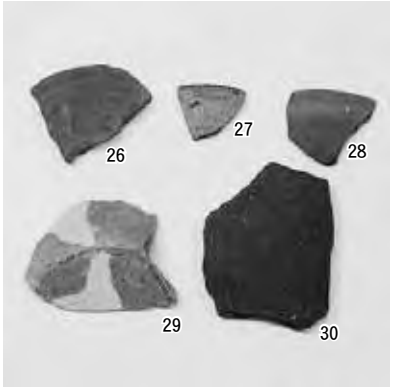
1 号住居跡No.13

1 号住居跡No.31

1 号住居跡No.23

1 号住居跡No.24

2 号住居跡No. 1



1 号住居跡No.26 ～ 30

1 号住居跡No.32

3 号住居跡No. 1 ～ 3

1 号土坑No. 1 ～ 2

3 号土坑No. 3

4 号土坑No. 4 ～ 6

表採

熊野124次 1 号住居跡No. 2

1 号住居跡No. 6

1 号住居跡No. 8 （側面・底面）

図版７

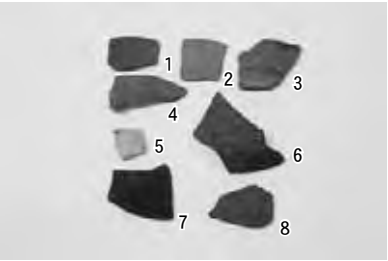
熊野124次１号住居跡No.１

１号住居跡No.16

１号住居跡No.17 ～ 19

１号住居跡No.20

２号住居跡No.１～８



３・４号住居跡No.１～８

５号住居跡No.３

５号住居跡No.４

１号溝跡No.１～３

１号溝跡No.５

１号溝跡No.６

１号溝跡No.８

１号溝跡No.10

１号溝跡No.13

１号溝跡No.14・15

１号溝跡No.16

図版８

１号溝No.17

１号溝No.18

１号溝No.19 ～ 24

１号溝No.26

１号溝No.25（表・裏）

１号溝No.27（表・裏）

１号溝No.28（表・裏）

１号溝No.29（表・裏）

１号溝No.30 ～ 39

１号溝No.43

報告書抄録

ふ り が な	ふかやしないいせき
書　　名	深谷市内遺跡　XⅥ
副 書 名	
シ リ ー ズ	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第105集
編 著 者 名	宮本直樹、竹野谷俊夫
編 集 機 関	深谷市教育委員会
所 在 地	〒366－0823　埼玉県深谷市本住町17－3番地　TEL　048－572－9581
発 行 日	平成21年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
熊野遺跡（102次調査）	埼玉県深谷市岡字前屋敷3047-5	11210	63-17	36° 12’ 44”	139° 14’ 26”	平成９年４月22日から平成９年５月16日まで	397㎡	個人住宅
熊野遺跡（107次調査）	埼玉県深谷市岡字熊野2939-2	11210	63-17	36° 12’ 25”	139° 14’ 19”	平成９年６月２日から平成９年６月27日まで	500㎡	個人住宅
熊野遺跡（118次調査）	埼玉県深谷市岡字熊野2912-4	11210	63-17	36° 12’ 28”	139° 14’ 22”	平成９年11月４日から平成９年11月21日まで	247㎡	個人住宅
熊野遺跡（122次調査）	埼玉県深谷市岡字千手堂1880-4	11210	63-17	36° 12’ 38”	139° 14’ 11”	平成９年12月８日から平成９年12月20日まで	110㎡	個人住宅
熊野遺跡（124次調査）	埼玉県深谷市岡字内出2785-2	11210	63-17	36° 12’ 43”	139° 14’ 34”	平成９年12月15日から平成９年12月26日まで	70㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊野遺跡（102次調査）	集落跡 官衙跡	奈良～平安時代	掘立柱建物跡 溝跡 土坑	なし	
熊野遺跡（107次調査）	集落跡 官衙跡	近世	溝跡	土師器 須恵器	
熊野遺跡（118次調査）	集落跡 官衙跡	奈良 近世	井戸跡 溝跡 土坑	土師器 須恵器	
熊野遺跡（122次調査）	集落跡 官衙跡	飛鳥時代 奈良～平安時代	竪穴住居跡 土坑	土師器 須恵器	
熊野遺跡（124次調査）	集落跡 官衙跡	奈良～平安時代 中世	竪穴住居跡 溝跡	土師器 須恵器 土鍋	

深谷市内遺跡ＸⅥ

2009年３月31日

編集発行　深谷市教育委員会
埼玉県深谷市本住町17番地３